
汗ばむ鳥籠

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汗ばむ鳥籠

【Nコード】

N9184D

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

心中した男女が川に浮かんだ。水死体見物にやってきた少年は舟に飛び乗る。……一方、別の場所、時に、一人の少女が口減らしとして殺されるかわり、男に売られた。彼女が旅の末にたどり着いたのは江戸は吉原。女を飼う、鳥籠だった。***6月26日、おまけとして外伝を追加いたしました。

第一話「???」（前書き）

これは春エロス2008（2008/3/20/）4/20開催）
参加作品です。企画特設サイトの作品一覧表の観覧または
「春エロス」などで検索すると、他の作品群も読めます。
お楽しみ頂けましたら幸いです。

第一話「???」

あなたの棘に、

満たされるために生まれた。

着物に頬かむり、下人の格好をした小柄な男が辻道をゆく。

彼は小鳥のようにざわめく心臓を喉下に感じながら真顔を繕うと、四郎兵衛と呼ばれる見回り小屋の男達を横目にした。男達が視線を門から外しているのを見計らい、ひいふうみいと歩みを舌で転がして通り過ぎる。

一步また一步と、緊張でぎこちない歩みで背後にするは、鳥籠の象徴、柳の木。

それが完全に消えてしまうと、ついに男は手を大きく振って、膝を高々と上げて大川へと向かった。

頬かむりが勢いに弄ばれ、後ろへと流れる。拍子に露出したのは、幼い影、少年であった。

冷静に頬かむりを両手で正すと、疾駆し、鳥のように飛翔する。風のように速かった。それほどまでに、少年の心は高ぶっていたのだ。

そうだ、ずっと、……会いたかった。

山谷堀というお堀をなぞるように進んで土手を上がり、少年はついに目的の匂いを嗅いだ。

むっと鼻腔に絡みつく、濃厚な水の匂い。次いで光が弾け、蒼穹

と水面とを踊る太陽光が、高揚を抑えきれずに彼の全身を包み込む。

目下に横たわる大川、隅田川、と呼ばれる川のすがた。

少年は思わず、打ち震えた。こんなにも燦然とした隅田川は初めてだと感嘆に身をすくめる。

けれどすぐに目的を思い出し、遠く広くと小首を回した。

探しているのは舟渡し。舟渡しを求めて勾配を下っていき、ふいに目を止めると、彼は駆け出した。

身体が熱を帯びている。卵のような顎から汗が滴り、肺は肋骨を強く押し上げては引つ張り下ろす。

眩暈がした。倒れそうだった。けれども、ここ倒れるわけには行かなかった。

「すまないが」

激しく空気を求めながら、川岸で火を焚く男たちに声を投げた。

適当に結んだ鬚、これ以上焼けることは出来ないだろうと思われ
るほど黒い上半身を露出し、腰に布だけ巻いた男たちが一斉に目を
やる。

じろりと、嘗めるように動いた眼球の意図を彼は瞬時に悟り、後
じさってしまわないよう、ふくらはぎに力を込めた。

よくよく見れば、少年はとても奇妙な格好をしているのだ。痩せ
ぎすには大きすぎる男物の着物をだらしなく着て、頬かむりを深く
縛っている。

衣服と、衣服からちゃんと覗く四肢は泥をまぶしたように薄汚れ
ていて、だが頬かむりに隠れた顔は、奇異なほど整っているようだ

った。男たちに伺えるのは顎と唇くらいのものだろっ、しかしその一部分だけを覗いても、著名な画家の絵筆を思わせる流麗さがあつた。

美貌の少年があえて大人の男の格好を真似ている。そのことに気付いたのか、一人の男がにたりと笑った。

「坊主、どっかの奉公から逃げてきた口か？」

少年は千切れる息を無理やり整えながらも頭を振って、出来るだけ低い声になるよう、喉を絞る。

「そんなことは関係ない。それより、

……心中が見たい」

「なんだ、お前もあんなものを見に来たのか」

皺の深い舟渡しが、眉間に皺を寄せる。

「けったいな世の中よ。……おい、客だ」

年長の舟渡しに手をこまねられ、火に手を翳していた一番歳の若そうな男が顔をあげた。

男はだらしない背骨を少しだけマシにすると、面倒くさそうに籠を担ぎ、よたよたと歩き出す。その背を追って少しばかり下ると、川には一隻の古い舟が水面に浮かんでいた。

男は慣れた手つきで岸と舟とを結ぶ縄を繰りながら、

「一分だ」

「一分？」

舟賃が思ったよりも高くて、喉を騙るのも忘れて少年は聞き返した。

川を渡る橋は五つもある。よほどの急ぎ用があるか物好きでなければ、渡し舟など乗るものはいない。

川に舟を持つものは大抵、漁をしているのだ。そんなに金を取るはずがない。

「まあよ。見りや分かるだろう。心中見物つてのはな、良い見物になるんだ。男と女が腰紐を互いに巻いて川にぶかぶか浮かんでる。そうそう見れるもんじゃねえ」

確かに、川を一望すると、町人の乗った舟が多いようだった。

彼らが見物のために金を惜しまないのならば、客商売、値がせり上がるのも必然なのだろう。しかし。

「そんなに駄賃はない」

「それじゃあ、駄目だ」

「なんとかまけてほしい」

「はっ、駄目だ。お前が払わなくとも、客は何人と来るんだからな」

親指と人差し指で円をつくって嘲ると、男は舟を戻そうと縄を引っ張った。

少年は呆然と佇立していたが、やがて意を決し、舟渡しが手繰ろうとする舟へしなやかに飛び乗った。

「てめえ、降りろ！」

慌てて男が少年の袖を掴む。

少年は引きずり下ろそうとする手を無言のまま弾くと、きつと睨んだ。

そして。

「水夫よ」
かこ

河のぬるりとした匂いが爽やかな風に押し上げられ、光彩は喜びに羽を広げる。

少年は口角をあげていた。

光に皮膚の境界を失い、景色と同化する。いやむしろ、内から光を放っているようにさえ思える。

男は心を奪われた。

瞬間的に忘却の極地へと立たされる。夢見のように、その情景は美しすぎた。

「錢より何より、いいものをあげる」

頬かむりを外し、くると首に巻く。するりと下りる緑の黒髪と、猫のような瑠璃の流し目。紅色のふつくらとした唇に、僅かにのぞく女の色合い。

少年ではない、少女だ。

いやしかしこれは、

「わっちを、好きに鳴かせて良いよ」

魔性だ。

第二話「くちべらし」… 1859秋

彼女はある北国の寒村に生まれ育った。

長い冬は村にやつれた灰色の空を与える。

加えて閑散とした侘しい山を与え、雪解け水による沼地を与え、底知れぬ貧しさを与え、更には土地柄による慢性的な飢饉を与える。

彼女の知る自然は厳格で冷徹で、血を失った死体のようだ。

誰も彼も腹をすかせながら仕事をしていて、男は恵まれない土に鋤を刺し、女は赤ん坊を背負いながら冷え切った川で汚い染物をし、子どもまでも寺子屋を済ませると汗水たらして働いている。

みな、手が年寄りのようだった。

そんな貧しい村の農民の九番目として彼女は生を受け、育った。姉たちの背中に背負われ、働く両親の何かを悔いているような眉間と、刻まれた苦労の皺を網膜に焼き付け、大きくなった。

彼女がようやく寺子屋へ通うことを許されたとき、村に病が流行った。

とはいっても、稲穂につく病で、それでも彼女の村では死を表すも同然だった。

ただでさえ貧しい土地、稲以外の作物も思うように実らない。いつも芋粥ばかり食べていたのに、その粥に、僅かばかりの米がなくなっただとなれば、村の者はなにを食べれば良かったのか。

最初に、子どもたちが消えていった。

子どもたちがどこへ行つたのか、大人たちの疲労しきつた瞳が恐ろしく、彼女はそれを問うことなど出来なかった。

大人たちは寒い大地の者特有の赤い頬をより紅潮させて、同じように口を開く。

村の外には出るな、川の近くには行くな。天狗と河童が出るぞ、と。

ある日、川に河童を見に行つた彼女の兄が、震えながら帰つてきたことがあつた。そのとき兄は煎餅布団にすっかり丸まってしまい、翌朝まで出てこなかった。

ようやく姿を現したと思いきや、青ざめてこんな事を耳打ちした。「河童はおつた。だけど、キネだった。キネだったよ」

キネとは、隣の家に住んでいる、末娘のこと。彼女よりひとつがふたつ下で、仲は良くなかつたけれど、知っていた。

やがて秋も終わりに近づき、枯れ草の量から厳しい冬の予感が香つてきた。それとともに、村は更に悲哀と疲弊とに包まれていった。乞食の死体が道端に転がって、空き家が増えた。村を捨てたのだ。

家ではもう、芋さえ少なくなっていて、母は嫁入り道具の着物を売り払い、箆笥を売り払い、寂しい家はどんどん寂しくなっていた。

かまどに埃が積もる、早朝。ついに困窮した彼女の両親は、下の子どもたち三人を、奉公に出すこととした。

奉公といえは聞こえは良い、要は口減らしだ。

人買いに、売られたのだ。

最後に仰いだ両親の目はまるで漆のようで、とても底の知れない

ものだった。人買いの男に銭を貰う二人を見て、彼女はむしろ、安心したのだ。

「殺されなくて、済んだ」

こうして彼女は、生まれ育った村を後にし、人買いと共にどこかへと向かった。

距離は遠く思われた。歩いても、歩いても、

「まだまだ先だ」と言われるのだ。

何故に人買いが遠方にある貧しい村まで来て彼女を買ったのか、分からないまま、彼女は足を棒にしてついていった。

足の痛さと、ほんの少しの寂しさとを食いしぼりながら、いくつかの関所を手形で抜けた彼女は、

日光街道は下野の南方、今でいう栃木県那須郡にいた。

「今日は宿に泊まるぞ」

ぶっきらぼうに人買いが言う。

「風呂があるところだ」

野宿といっても差し支えないくらいにぼろぼろの宿で雑魚寝することが殆どだったこともあり、彼女はほんの少しばかり喜んだ。しかしすぐに気持ちは、沈んだ。

人買いを見上げる。彼は彼女が買われるまでに出会ったことのない風貌の大人だった。

まず、大きな傷が顔にあった。

右のこめかみから鼻先、そして左耳たぶの下へと、醜く太い線が

走っている。刀でばつさりと切られたのだろう。その強面に不精髭が加わって、野獣を思わせる威圧感が漂う。

背は驚くほど高く、平均的な大人の身長より頭ひとつぶんあるようだった。

その天に伸びた背筋を、鬚も何もない手のまったくついていない長髪が覆う。

遠くで見たら、乞食のよう。近くで見たら熊だと、彼女は思う。しかしながら名は、とらいち。

この男と宿に泊まるのだということに、彼女は少し不安を覚えた。

素早い歩行に置いていかれては、離れてしまった距離の縮まるのを待たれるという旅は、とらいちという男のことを詳しく語ってはくれない。

夕と晩の食事も沈黙がおかずで、日が暮れたら早々に寝てしまう。話という話をしたことがない。

この男と宿に泊まるのだろうか。

食事を用意されるだろうし、寝るときも盗人にあまり気を配らなくて良い。その環境は、寡黙な男の唇を僅かに解してしまうだろうか。

思考を弄んで彼女はふさぎ、緊張した。

街道脇の小さな宿に入る。風呂があることを表す弓も、小さいものがかかっている。

部屋に案内されると、とらいちは荷を肩にかけたまま女将を呼び止めた。

「宿屋」

「なんしょう」

「すぐに湯は用意できるか」

「あい。もちろん浴場が」

「貸してもらおう、どこだ」

女将に聞いてさつさと風呂に行くと、とらいちは荷から錢袋だけ取り出して腰に巻きつけた。籠へ荷を投げ込むと、服を脱ぎ始める。

彼の体は肉付きがよく、鍛えられているようだった。農民とは違う、土の汚れのない筋肉は呼吸と共に密やかな躍動を抱く。

「何をしている、脱ぐんだ」

ぼうつとしていたのを叱咤され、彼女は大きく急ぎで隣にあるだろう女湯へつま先を前進させた。が、首根っこを掴まれて阻まれる。

「何処へ行く」

「お、女湯」

「お前のどこが女だ。ごぼつみたいな体のくせに」

ムツとするより先に、瞠若した。この男もこんな口を聞くのか。

「脱げ」

とらいちが乱雑に彼女の着物を脱ぎ去っていく。平坦でふくらみくびれも無い、下の毛も生えていない身体が外気に晒され、彼女は小さく唸った。

「ほら、お前のどこが女だ」

その言葉に彼女の丸い目が再びとらいちの顔をなぞった。彼が目を細めたような気がして、少しばかり、彼の中の人間が覗いたよう

な気がして、彼女はその顔をまじまじと見た。

この、醜い傷のある男は、どんな生き方をしてきたのだろう。

思案を繰ってみると、驚きに押されていた腹立たしさが不思議と湧いてきて、彼女はふてぶてしく腕を組んだ。

「おらだつて、そのうち女になるよ。おつかあは村一番の美人なんだ。おつかあみたいに綺麗になれるかは、わがんねえけど」

人買いに不遜な態度で身の上話するのは初めてで、怒るだろうかと思った。

が、とらいちは怒るでなく、ただ針山のような不精髭を掻いただけだった。

第三話「未熟な瘦躯」

大浴場に入ると、もうつと瑞々しい湯気が踊った。湿っぽく温かい匂い。彼女の白い視界にはとらいちしかない。

ふたりぼっちの浴場で、男は桶に湯を汲むと、豪快に彼女の身体にぶつけた。真っ先のこと、あまりにも突然のことに、むせる。

「さつき、母親のことを話しただろう。あれも、女じゃない」

その口ぶりに、彼女は自分の言葉が彼の心の何かに触れてしまったのを知った。無表情の、とても深い黒の瞳が幼い肌を刺し、心臓を潰すように握りこんでくる。

とらいちは彼女の細い腕を引つ張った。

拍子に彼女が転んでも、そのまま引きずる。そして鏡の前に立ち、彼女の肩甲骨を押した。鏡の曇りを腕で拭い、折れそうな肩を掴んだまま、鏡に映す。

肩をがっちりと掴まれて、彼女は自分の幼い身体を見た。

全身を鏡で見るなど、生まれて初めてのことだ。自分ではそれほど気にしていなかったが、確かに女とはいいがたい身体だ。

まっさらな雪に野いちごだけふたつ落としたような、頼りない瘦身。

背後にある、猛禽のような双眼がそんな彼女を凝視している。

彼女の頬に左手を添えると、

「よく観察しろ。お前自身の身体を。他人との違いを。お前は、どこがお前らしい？」

訊ねられ、見当もつかず彼女は首を左右に振った。

「まず、髪がある」

髪を手のひらで撫で、五指で弄ぶ。

「芯の強い素直な黒髪。しかし光に透かせば茶色に輝く。肩までか。短い、伸ばすぞ」

流れるように顎を引き、

「次に顔の形。」

お前の両親は器量良しだ。お前は運よく両親の良い部分ばかり貰った。骨も肉も皮も、申し分ない。

では、身体はどうか。芋粥ばかり食べているせいで、痩せているが」

どんな思惑のあつてのことが、とらいちが彼女の腕を持ちあげ、彼女の内側の隅々まで晒した。

当然の事ながら彼女は羞恥と、男への恐怖を感じ始めた。父親でもない男に、何故裸体を晒さねばならないのだろうか。しかも男は、獲物の動きを観察するかのような殺気を隠さず、放ち続けている。

晒すだけでは終わらず。

その手が、彼女の身体を順々にまさぐり始めた。熊のような容貌にそぐわない細く長い手が、しなやかな蜘蛛のように彼女の柔らかな肉を這う。

「やだ」

彼女は両手を上げながら身をくねらせ、抵抗の声を呟いたが、彼は構わず乳房へと指先を落とす。

胸の先端にある朱を、指の腹が掠めていく。

「母親や姉たちと同じように、お前の乳房も大きくなるだろう。しかし着物には合う、ちょうど男の手に納まる大きさになる。

くびれが出来る。尻は少しばかり小さいかもしれない」

「やだ」

まるで彼女の訴えが聞こえないかのように、

「太ももにも肉がつく。しかし中年になってもそれほど肥えはしない。

足は小さい。草履やら探すのに苦労しそうだ。

手も小さいな、これもそれほど育たない。初々しさを残したままになる。腹に手を当ててみる」

掲げられていた彼女の両の手に男の両の手が重なる。二人の手がひとつとなって彼女の腹を押す。そして空へと浮かび、曲線を描く。

「この下には赤ん坊ができる。女だけが持っている、赤ん坊が育つとここが膨らんでくる。まるで蛙のようにでぷりと膨らんでしまふ」

再び腹を押すと、今度は滑らすように下へと伝う。

その先には、少女自身あまり触れない場所がある。迷い無くそこへと指先は落ちていく。人間の端、そして先端でもあるそこへと。

「いやだ！」

ついに堪りかねて、彼女は男を突き飛ばした。だが細く弱々しい彼女の身体は逆につんのめり、床に崩れる。膝と尻とをついたと同時に、彼女は男を怯えの目で仰いだ。

「最後に、お前の目」

男、とらいちがにたりと笑い、指をさす。

「病気ではないのに、右片方だけ薄い緑色をしている。

お前のような目を持つ人間を探して、俺はこんな北まで来たんだ。その目は稀だ、なにより武器になる。

だが女じゃない。それがお前だ。ただの、女の素だ」

腹の底まで響くような低い声。彼女は自分が洞窟にでもなつてしまったような感覚に襲われた。

女の素という、ただ一言が彼女の中で木霊し、蝕み、内側の四方八方を引っかけてゆく。

とらいちは茫然自失とする彼女に顎をしゃくった。

「風呂に入れ」

言われて、彼女はふらふらと風呂の淵にすがり、ゆっくりと湯船に浸かった。警戒しながら、鼻の下までうずまった。

とらいちはもう彼女の峻拒を受け入れたのか、自分自身の身体を洗い始めた。

貪るように触れてきたたくせに、まるですっかり忘れてしまったかのような処遇。

彼女は湯の中でうずくまった。

どうしたとか。身体が、湯船よりもはるかに熱いような、だが雪よりも冷たいような気がする。

特に臍の下あたりが、じんじんと疼く。何かが滾る。

身体を浸食する不可思議な感覚。その未知の痺れに戸惑いながらも、一方で彼女は現状に冷静であった。

この男は人買いで、彼女に彼女自身の価値を教えようとしたのだ。己というものを、売られたということの現実を。そして、彼女の価値は女になっただけ劇的に変化するだろうということ。

教え、彼女は知った。

……自分は、物なのだ。

状況を整理してみると容易い。今度は斬られたように胸が痛んだ。心臓から悲しみが滲み出て、彼女の身体から熱を奪っていく。

死なずに済んだ。しかしもう村には帰れない。

酷く貧しい村だった。だが生まれ故郷というものはそこに在るだけで人を癒すものだったのだと彼女は今更に思い知っていた。

毎日見た硬く凡庸な景色が、今はとても柔らかな美しいものに思え、無性に戻りたい。帰りたい。

父と母と兄弟たちが厳しい顔をして畑を耕しているその傍へゆきたい。

彼らは時折、寒さに凝り固まった顔を綻ばせるだろう。

そして無条件の、家族同士にのみ許された愛情を僅かに傾ける。

本当は漆のような眼などして子どもを売るような人間ではないのだ。

どうして自分は、故郷にはいらなかったのだろう。自分が何をしたのだろう。何をしたというんだろう。

自分たちが一体なにをしたんだというんだ。

彼女はお湯に顔ごと突っ込んだ。

輝く水面を湯の中から見上げ、思う。いつそ河童の方がましだったんじゃないか、と。

おらはこれから、どうなるんだろう……。

今すぐにこの湯から飛び出し、街道を駆け出し、家族の胸に飛び込めたら。

夢想し、目を閉ざす。愚かなことだと、涙が湯に溶け込んでいく。

本来なら死んでもおかしくはない命を、偶然、運よく買われたのだ。全てを受け入れなければ、このさき生きてはゆかれない。

分かっている。それでも。

彼女は密やかに、仏にすら聞こえてしまわないように、家族の名前を口ずさんだ。耐えるために、名を呼んだ。

父と母と、兄弟たちの名前を。

時は安政六年、今でいう西暦一八五九年。日本が文明開化の扉を開ける、ほんの九年前のこと。

彼女は、十歳だった。

第四話「四角い鳥籠」

宿場での出来事から更に歩き、足の裏にまめを作りながらの二人旅。街道を沿って行き、彼女はついに目的地らしき町に辿りついた。彼女の住んでいた村や、今まで通った町並みをはるかに凌駕した大きさ、広さ、美しい瓦作りの建物、なにより目を回すほど人がいる。

「迷うなよ。はぐれたら二度と、俺にも、親にも会えないと思え。ここは田舎者には生きづらい、江戸だからな」

江戸。

百万人がひしめき合い、息づく場所。

隅田川という大きな川に架かる大橋を渡ると、左手に大きな城が霞んでいた。そこに向かうと思いきや反対側へと回って、城を背にする。

柳の木が並ぶ堀をなぞりながら太い辻をいくと、いくつかの建物を囲む堀が覗えた。珍しいことに黒っぽい色をした小高い堀の中央部には橋があり、堀が掘られ、大きな門が口を開けている。

門は奇怪な形をしていた。丸に、上のほうが鋭く尖っていて、中央にぽっかりと穴が開いている。鉄の扉が左右に開き、蝶が留まっている様にも似ている。拱門なのだ。

橋をおずおずと進んだ。橋の下の堀は下水道なのだろう、僅かに濁っていた。

「来い」

とらいちが彼女へと手を伸ばす。素直に彼女はその手をとった。とらいちの手のひらは少し汗ばんでいて、それなのに不思議とさらさらして心地が良い。

二人は門へと手をつないで歩き、ぐぐった。

門を通り抜けてしまつととらいちが彼女の手を振るように外し、数歩進んでから、首だけ振り返った。

「ここが今日から飼われる鳥籠だ」

深く息を吸うとらいちの背中。いつもは大きいと感じるそれが、何故だか小さく思え、目を擦る。

目蓋を開くと、とらいちはまだ、大きいとらいちだった。

「今日も、女臭い」

鼻先に大きな辻が真っ直ぐ伸びている。脇には茶屋らしき建物が佇んでおり、先ほどまでいた場所と同じつくりだが、まったく異なる場所に來たようだと彼女は思った。

まず、音が違う。人のざわめきに紛れて琴や三味線、太鼓の音が聞こえる。たわみ、絡み合い……、心地は良いのだがどこか夢見のようで、人を酔わせる旋律。

次に、甘ったるい匂いが漂っている。花のような、だがもっと強烈で濃厚な芳香。頭痛でも覚えそうなものだが、ずっと身体に入り込んできて、これもまた地を失わせる。

「今通った門が大門だ。卯の刻から亥の刻まで開いている。女が通るには女切手がある」

「おらは女じゃないんだらう?」

「女の素も出れん」

とらいちが袖からさり気無く手を出したので、慌てて彼女はとらいちの手に駆け寄った。

が、勢いあまって前のめりに転んでしまった。

なんとか受身で転び傷をつくらず済んだもの、見やると草履の鼻緒が千切れている。仕方なく、草履を脱いで小脇に抱え立ち上がった。砂利が旅路で出来たために喰いつき、痛む。

「怪我は無いか」

とらいちに問われて頷いた。素直に首を縦に振ることは躊躇われた。

しかしとらいちは、血を尾にする彼女の足を見やると、おもむろに腰を下ろした。

何事かと一寸怯える。

彼は何をするでなく髪をかき上げ胸の前に流すと、背中を向け、おぶってやる、とだけ呟いた。

その言動に当然のことながら、驚く。きつね、いや虎につままれる。普段は寡黙に彼女を歩かせるだけの男が、おぶるのだという。信じられない。

「早くしろ」

急かされて、恐る恐る彼女はとらいちの背に飛び乗った。刹那の浮遊感。とらいちは軽々と立ち上がると、人垣を分けてゆく。

「中央にあるのは待合の辻、その先が仲の町、右やら左やらは裏道

になるぞ。

右が江戸町一丁目、左が伏見町、仲の町に入って左にふたつ脇道がある、堺町と角街。

その右に揚屋町。奥に京町一丁目二丁目。両端には行くな。河岸といつて、安い女や病氣持ちが多い」

江戸に入ったとたんに、よく喋る。

とらいちの耳元にぼつてりとした頬を寄せて、聞く。いつもは低く恐ろしい声が、今日はとても耳に優しく、染み込む。

「よく覚える。この吉原に住むのだから」

「吉原？」

「そうだ、吉原。おはぐろどぶに囲まれた四角い鳥籠だ」

「おらは鳥じゃない」

「……人も鳥も籠に入れば一緒だ。主が飽きるまで、どこにも飛ばやしねえ」

とらいちにおぶさつて、彼女は仲の町、ちょうど吉原の中央部にある茶屋に入った。

茶屋であるのに、何故かあちらこちらに酒の席が開かれているようだった。小さな庭があり、その周りを囲う障子から、和気藹々とした宴の賑わいが聞こえた。

茶屋の者がじつとりとした目で二人を見つめる。それを飄々と交わして、とらいちは更に奥へと進んだ。土間を過ぎ、細い路地へ出る。

道というよりも家と家の間というべきか。狭く、人がひとり歩くのでやっとといったところ。

「今のが引手茶屋だ。ここは茶屋を通して遊女と遊ぶ。茶屋と遊郭は繋がっているんだが、表を通るには少しばかり銭がいるな」

前進するにつれ、あの匂いが濃くなってきた。甘いような安らぐような、だが異臭のようでもある。

隘路は背の低い引き戸によって行き止まりとなっていた。そこから、芳香は確かに漏れているようだった。

とらいちが僅かに腰を落とした。鈍い音を立てて戸が開き、遮るものを失った香りの触手が二人を捕らえる。

無色なのに霧のよう。

熱っぽい匂いが身体の芯に触れ、次に原色が弾けた。

第五話「交渉」

白亜に真紅。色が瞬き、目が眩む。瞬きをして、彼女はぐりぐりと目を擦った。

見開くと、眩むような絢爛な色使いが広がっていた。

膨大な量の灯が至るところに置かれており、それが梁の高い天井から垂れ下がった赤い薄衣や、床に隙間なく敷き詰められた白い布に反射し、煌煌と光を放っている。

板の露出した階段でさえ、よく磨かれているのか、まるで電を散りばめたようだ。

彼女が息を呑むのが聞こえたのだろう、とらいちが彼女を背から下ろすと、

「驚いたか」

と言った。

こくりと頷く。

「そうか。そのまま真下を見る」

言われたとおりにすると、素足を金魚が泳いでいた。心臓がぶっ飛んで、思わずとらいちにしがみつく。

「安心しろ。硝子の床だ」

とらいちが、左頬をぐつと上げた。顔を横断する傷が少しばかり歪む。彼女はその笑みになんとなく落ち着いた。たまにしか出ない、しかも冗談めいた意地の悪そうな笑みだが、それでも心を解すには十分だった。

遅い腕を握りながら、彼女は再び金魚の群れを俯瞰する。金魚たちは廊下沿いに作られた堀のようなものを泳いでいく。気持ちよさそうだ。

「とらいちかい」

と、頭上から女の声が降ってきた。

パツと顔を上げると、右手から浅黄色の平服を纏った女が滑るように歩いてくるところだった。

でっぷりと肥えた、だが貫禄ある熟女だ。紅だけ目尻と唇に引いている。

とらいちが、三船、と女を呼んだ。

「裏から忍び込んできて、軽々しい男だよ。

あれあれ、今度は女衞せげんの真似事かい。ずいぶん痩せた童だこと。髪もなんだ、へんな色だよ。

禿にするには、歳もとりすぎぢやないかい」

「上玉になる」

とらいちの一言に三船はくくつと喉を鳴らした。

「まったく、呆れた金の亡者だね。一体、外で何をやらかしたんだか。

生憎、うちは筋を通さないことは出来ないよ。その子は、里に返しな」

「無理だ。こいつは、口減らしでね」
「不憫な」

三船は片袖で隠しながら、小さくすくめる。

「別に切見世にやってもいいんだが、これを切見世にやったとなると、上見世の楼主はよほどの間抜けと皆が腹を抱えるだろうな」
「何を」

「こいつは、白子だよ。片目だけだが」

その一言で三船の目の色が変わった。

三船は軽く腰を曲げると、あからさまに彼女の顔を覗き込んだ。

「赤じゃないね。けど萌黄というのは面白い、髪もあるし、肌も強そうだ。どこで……」

「そんなことより、欲しいのか。欲しくないのか」

とらいちちは面倒そうに喉仏を掻く。その余裕ある態度に、三船は袖を下ろして舌打ちをした。

「お役人が許さんよ。あんたは女衞じゃないんだよ。しょっぱかれちまう」

「どうせ人が足りなんだろう。」

三年前の地震では、浄閑寺に骸を運ぶのを手伝ったんだ、あの時に死んだのは何人だった。あの騒ぎに立ち消えたのは何人だ。見習いの引っ込みもいたはずだ、確か、八人はいただろう。

「じゃあ八人分、誤魔化せる」

「九人だよ。うちは火もついたんだよ。捕縛の余裕なんてなかったんだからね……」

目算を浮かべたのか、一寸だけ考え込むと、三船は懐から扇子を取り出し首下を涼ませた。

「名前はなんていうんだい」

交渉がじわりと結び目を探す。

……彼女を、蚊帳の外にして。

「まだ決めてない」

とらいちが世の全てが詰まらないような表情のまま、戸口に置かれた棚にどすりと腰をかけた。長身の男の豪快な動作に、棚に置かれた花瓶と花が揺れて舞う。

花を一瞥し、

「そうだな、おみなえし……御身無し。好きに決めろ。ただし、二十両。年ごとに十両もらう」

突然の切り返しに、三船は顔をこわばらせた。

「戯言を」

「そいつを女にしてやろう。もしあんたが望むような成長が見られなかったら、年毎に十両払ってやる。三年で得をするかもしれないぞ」

「馬鹿馬鹿しい、実に滑稽な」

ついと視線を逸らすのを、とらいちは見過ごさなかった。そのまま淀みなく言葉の一手を指す。

「俺を誰だと思っ？」

沈黙が豪華な空間を俄かに鎮めた。熟女の湿っぽい唸りが響き、とらいちを軽くねめつける。

互いの手をさぐり合う、均衡。

しばらくして、三船の扇子が甲高い音を響かせて静寂を断った。

「良いだろう。ただしあんたが払うのは、十五両だ。そして必要があれば、今まで以上に働いてもらう。あんたことは昔から知っているが、こいつが物になるかは別のこと。」

もし私を満足させることが出来たなら、その時は百でも二百でも、持っていくと良いよ」

「いいだろう。やる」

唐突に背中を蹴られて、彼女は膝をついた。

唖然と、とらいちと三船を仰ぐ。品定めを終えた彼らの面容は、仮面のような、意図の知れない色をしている。

不意に今起こっていることが、彼女には空恐ろしく感じた。

この世には自分を売るものがいて買うものがある。

手のひらで転がされるその先に何があるのか。未知にくるまれて、自分はどうなってしまうのか。

三船の唇、朱が半月を描く。

「そうだね、名前は……」

「わっちが決めておごんすか」

突然、思案の隙をついて、凜とした女声が割り入った。

何の前触れの無い介入。彼女は声の主を求めて、階段の上へと目を泳がせた。

そして、息をするより先に目を見張る。

そこにいたのは、紛れも無い。
女だ。

第六話「ひばり」

「ちょうど禿がほしいとこじゃった」

「つか佐」

三船ととらいちが同時に名を呼んだ。つか佐と呼ばれた人物は、ふわふわとした体重を感じさせない足取りで階段を降りてくる。それを見、彼女の心は吸い込まれた。

天女が降りてきた。

衣装は目を見張る、藤色。金系の胡蝶が舞う。

白粉をはたいた肌はよく擦った陶器人形のように。眉目はきりりとしていて、涼しげな面容に似合う。

姿勢はよく丹精込めて育てられた百合を思わせ、しかし艶めかく肩や腰をくねらせる様が確かな肉の柔らかさを感じさせた。

鬚に乱れひとつも無い。耳の大きな黒猫に似ていて、おびただしい量の簪やら櫛笄が色を添える。

裸足の足の先まで化粧がされていて、朱に塗られた爪は妖しげである。

それらはつか佐という人物に人間離れた麗しさを与えていた。神々しいばかりの、美。

妖蟲は祝福を受け、下界に降り立つ。

彼女は逡巡していた。一週間ほど前の、とらいちの言葉。

さつき、母親のことを話しただろう。あれも、女じゃない。

「とらいち、わっちが貰っても良いでしょう?」
「そのつもりだ」

「じゃあ、ひばり」
嬉しそくに、なにより妖しげに、つか佐は目尻を上げた。

「あんたは、ひばり。良く売れるようにね」
「……ひばり?」
投げやられた微笑に彼女は、鞭にでも打ち据えられたように肩を震わせた。

「利取る、利取るとよくお鳴き。馬子にもなんとやら、それなりのおべべは用意してやるよ」
「つか佐」
「なんだい」

とらいちは柵から足を落とすと、小さな銭袋を懷から出し、つか佐に投げやる。
「こいつに、めりやす足袋を買ってくれないか。足袋じゃなく、めりやす足袋を」

とらいちの発言に、三船が彼女の足を見やる。
「酷いね。一体、どれくらい歩かしたんだ。治るのに時間がかかるよ」

「朋輩に軽石で擦らせよう。いいよ、めりやす足袋だね。革靴はいかい?」
「いらん。骨が崩れる。後は、まかせたぞ」
とらいちは無愛想に顔も合わせず告げると、後ろ手に木戸を押す。

「何処へ行くつもりだい」

「何処へでも。日を改めて、来る。それまでに金を用意しておいてくれ」

言い捨て、とらいちは流れるような動作で木戸の向こうへと身を翻した。

慌てて追いかける、彼女。

「ひばり」

だが、ひばりという名が、彼女の心臓を鷲掴んだ。その衝撃によるめきながら、振り返る。

そこにいるは、女。幻惑的な薫香を振りまく、妖婦。

女は、ひと舐めた飴玉のような艶をもった唇を微動させると、
「くさいね」と顔を顰めた。

その動作が人間らしくて、少しだけ安堵する。

「つか佐にそのまま任せると匂いが移りそうだね。お富士。お富士はいるかい」

「はあい」

三船の一声に、階段の上から一人の少女がひょっこりと顔を覗かせた。おかつぱに赤い着物を纏った少女は頬をほころばせる。

とたたたと、子鼠のような足音をたてて階段を降りる。

「三船おかあさんに姉さんもお揃いで。なあに。あら、その子はなあに」

「あんたの妹分だ。風呂に入れて、軽石で足をよく擦ってやり」

少女はふうんと鼻を鳴らすと、

「お目めが可愛い、あんた。よろしくね、あたいはお富士」

目尻が柔らかく垂れた、右の涙黒子が可愛い少女。少しだけ意地悪そうなのだが嫌いにはなれなさそうな雰囲気がある。

お富士が笑ったのを見て、一寸だけ、彼女は考えた。

ひばり。それが今日からの自分の名前ならば、受け入れなければならぬだろう。そうしなければ、生きてはいけないのならば。

彼女は漠然とした決心が自身の瘦躯に広がっていくのを感じた。全ては浩然としていた。

ひばりとして、生きる。

少しずつ、自分がどうなっていくのかを悟る。売られたのだ、女郎屋に。吉原という場所が何なのかは知らないが、とらいちば鳥籠だといった。

ならば自分は、

「ひばりだ。おらは、ひばり」

お富士に案内されて、ひばりは湯入った。ただっぴろい風呂で二人、足を丁寧に擦ってから出ると、浅黄色に蝶の刺繍を刻んだ着物が用意されていた。

「まだつか佐姉さんは着物の買いに出てないはずだから、きつと亡八の娘のだ」

ひばりが問うと、

「三船おかあさんのことを、亡八っていうんだよ。亡八ってのは、この楼閣で一番偉い主人のこと」

「ふうん」

「あたしはあんたの朋輩^{ほうはい}。朋輩は、分かる？ 同じ姉さんに仕える禿^{かむろ}ってこと」

「かむろ？」

「禿^{かむろ}っていうのは……。あつは、教えなきゃいけないの、いっぱいだね」

お富士はうきうきと楽しそうに目を細め、一方で意地悪そうに口角を上げると、ひばりのでこを指で突いた。

風呂に次いで、案内を受けながら楼閣を散策する。

吉原という場所は、故郷とは何もかも違うようだといばりは知り始めていた。発声の抑揚も違うし、そもそも飛び交う言葉からして、耳に馴染みのないものばかりだ。

異国に来たみたいだ、というと、お富士は腹を抱えこんで、
「異国なんてとんでもない。あんなに大きいまらを持った客はこないよ」

と、ひばりにはますますよく分からないことを言った。

「こつちが、客間になるよ。むこうが座敷で三階建て、上のほうから金も高い。一番上につか佐姉さんの部屋があるよ」

狭い敷地の中を広く使うためか複雑な構造を持った屋敷である。それに、無数の蠟燭が立てられ、色鮮やかな布がしかれ、花が生けてある様は、まるで人を惑わすために組まれた迷宮だ。

匂いはもう、慣れてしまったようで、田舎の空気と変わらないように思え始めた。

その時だ。

庭に面した廊下を渡っていると、客間のひとつから怒声が響いてきた。

お富士が好奇心に顔を躍らせながら振り返り、走る。

「殺してやる！」

罵声が轟き、お富士のすぐ脇にある障子が大業な音をあげて弾けとんだ。

第七話「大立ち回り」

間一髪、というか偶然にも、障子はお富士の背中をすり抜けて、庭まで吹っ飛び、池に落ちる。障子という薄壁が剥がれて、よりいっそう喧騒が激しさを増した。

「斬り殺してやろうか、あいつを出せ、あいつを出すんだ！ わざわざ、あの女に会いに来たんだぞ！」

罵詈雑言が周囲の優美さを罅裂させる。あまりのことに力を失って尻餅をついていると、ふいに一陣の風が眼前を掠めた。

「あいすいません。どうなされましたか？」

丸いふたつのガラス、眼鏡をかけた小柄な男がぴゅんと飛び出て、激しさを増す部屋へと入っていく。

「どうか落ち着かれて下さいよ、そんなに騒がれちゃ、人間きが悪いです。そうでしょう？」

「なにを言う、三回目だっというのに、部屋から出てこん。どうなっているんだ、この見世は！ 俺はそこらの客とはわけが違っぞ！」

「いやはや。そいつあ珍しい。きっとお代官の男っぷりに、女郎が照れてしまっているんでしょう。」

天ノ岩戸じゃございませんが、女を出すには大声じゃあいきやあせん。踊って飲んで騒いで歌ってえでねえと。

ええ是非、落ち着いて」

ひよいと眼鏡の男が廊下へと顔を出し、お富士に声をかける。

「お富士、亡八を」

「はあい」

「えつと……、てめえ誰だ、まあいいや、ちょっと」

手招きを受けて、ひばりは恐る恐る中へと足を踏み入れる。入った途端、ぎよつとした。

ずいぶんと悲惨な状態であつた。

あたり一面に食事やら酒やらが転がっていて、口をつけないまま台ごと蹴られて転がされたのである。料理の数々は男に踏み潰されて粉々である。

隅には、小太鼓や三味線を持った者たちが身を丸め、客人と眼鏡の様子を怯えながら覗っている。

なんとも嫌な光景に、ひばりは気まずく唾液を嚥下させた。

「特に何もしなくて良い。女たちが来るまでに、片して回ってくれ」

眼鏡の男に耳打ちされて、ひばりは周囲に散ったお椀や料理を手でかき集めた。

皿や米を集めていくうちに状況も掬い取られてくる。どうやら客人は、呼んだ女がなかなか来ないので癪癪を起こしたらしい。

この時まだひばりは知らないが、遊郭での帯刀は基本的に許されていない。

本来は玄関先で預かり刀箱にしまうものを帯に締めているあたり、よほど頑固か、傍若無人な男なのだろう。

冷静に何が起こったのかわかってくると、どうにも滑稽で、腹立たしいことのように思えてきた。

耳を敬てているうちに、ひばりの指先がだんだんと震えていく。幼い身体に膨れ上がる怒り。食事を粗末にするなんて、なんて輩だろう。

ちらりと横目でみやると、眼鏡の男とそう変わらない背丈の男が、下品なだみ声であだこうだと文句を言っている。

着込んだものや手に握り締めた刀は雅な飾りで、金持ちなのだと一目で分かる。

しかし、金を持っていれば飯を粗末にしている道理など、無いだろう。

「何を、見ている」

ひばりの犀利な目に気付いて、男が睨めつける。凄む。

小柄とはいえ、幼少のひばりよりは頭ひとつ分大きい男は、ついでにむき出しの日本刀を握り締めている。

しかしながらひばりには、その男が怖いものには思われなかった。不思議なことに、ひばりには、猿山で喚く猿に等しかった。

幼い瘦躯が生まれ育った苦界。

離農も出来ず慢性的な飢饉に窮する人々、その人々が子どもたちに行うことに比べれば、男は恐怖でもなんでもなかった。

刀など、どこが怖いものか。じわりじわりと絞められ狂っていくしかない貧しさと空腹と比べれば、一瞬で殺してくれる刀はとても優しい。

そしてなにより、

「とらいちの方が、おつがねえ」

「は？」

「おめえさんより、とらいちの方がおつがねえのよ！」

気風よく、ひばりは立ち上がると、一気にまくし立てた。

「刀っこ振り回す、めんこいもんでさあ！」

そげなごとより、なんなのこれは！ おめえいぐづよ！ 飯ぐらい座つてぐう、べこっこにも出来ることよ、のらだつてこんなに食い散らかさんでしょ。

なんと思ってるんだべが。あんだのために、おらのおつとうやおつかあはみでえな農民は、米耕してるんじゃないんだあよ、めぐさい、この、罰当たりなわらずっこが！」

勢いにのって、そのまま足を踏み鳴らす。

ひばりの威勢に、それまでの喧騒が嘘かのように、静まり返った。皆、水揚げされた魚のような表情で、仁王立ちするひばりを見やる。

ひばりはというと、なんともなれと腕を組んだ。唾を吐きつけるなり、切りかかるなり、どうにでもしろと。

ぐつと、腹を括る。殺すなら殺せ。どうせ死んでいたはずの命だ。

覚悟を決めたひばり。しかし、次に起こったのは、そんな彼女をざつくりと裏切るものだった。

「ひつどい訛り！」

指をさして男はぼろりと刀を畳に落とすと、ついで腹を抱えて自身も畳に転がった。

それを機に、次々と哄笑が湧き上がる。男も、芸舞妓も、小柄な眼鏡の男も、皆が皆、部屋にいる者全員、腹を抱えて目に涙を浮かべて笑い始めた。

肩を揺らして、膝からくず折れて、止まらぬ笑いに身を任す。

あまりのことに面を食らって、ひばりは身体を硬直させた。皆総じて指をこちらにさし、呼吸がとまるんじゃないかという勢いで笑っている。

「おらあ……、変、ですかあ？」

カッと顔が赤くなる。怒りではなく、恥である。何が何だかさっぱりだが、笑われた！

耳まで真っ赤に染めながら、ひばりは人々の笑傲を一身に浴びたのだった。

第八話「夜の生き物たち」

「ひばりにはまず、訛り隠しの里言葉を教えないと駄目だね」

月夜を背に、三船がキセルをふかす。

「あーあ、あたいもその場にいたかった」

残念そうに肩を揺らすお富士の横で、しょんぼりとひばりは頂垂れていた。

「だが、今回ばかりは助けられたね。お陰様で客人にていよく塩を撒けそうだ。大門の連中に言っだし、帳簿にも書いたから、あの男が次から見世に来ることはないよ。安心おし」

その一言に僅かばかり胸を下ろし、しかしながら笑ってくれたのには楼館の者もいるのだと思い出し、ひばりはますます首を垂れる。

三船はひばりの様子に皺のある頬に笑窪をつくると、漆塗りの収納小箱から何かをつまみ出した。

白っぽく、足袋に似ているが、足首がやけに長い。ぽいと投げられて、ひばりはそれを受け取った。

「めりやす足袋だよ。異国の足袋だね。まあ、足に履いてみな」

ひばりは腰をあげると足袋を脱ぎ、片足ずつ慎重にめりやす足袋を履いた。

足袋よりきつくなく、足首までをすっぽりと包むめりやす足袋…

…、靴下は、今までに無い感触を持っている。

居心地が悪い。しかし、足が柔らかくなりそうな品ではある。

「せいぜい、大事にするんだね」

三船になんとか叱られずに済んで、ひばりとお富士は床に着いた。どつぷりと夜の帳が下りたというのに、吉原は活気のある夜を灯る。格子窓から漏れてくる街の光と音は、まだまだ賑やかで、街のどこもかしこも未だ華やいていることを呈す。

せんべい布団にお富士と二人して身を包ませながら、

「ここは、眠らねえんだが」と呟く。

お富士は起きていたらしく、

「姉さんたちは客が帰る夜八つ時まで眠りやせん」と、寝返りをうった。

夜八つ、午前二時。ひばりの故郷では、ますます馴染みの薄い時間だ。そんな時間まで起きるのは、年越しにだってしない。

想像しきれず、ひばりは大あくびを噛んだ。宵の夜九つ、午後十二時。この時間に自分が起きていることが、ひばりには信じられないことだというのに。

「おらもいつか、そんな日を暮らすのだろうか」

お富士はついに夢路へ旅立つたらしく、ただ静けさだけがひばりの言葉を聞いていた。

ああ、眠れない。

身体がどうにも熱っぽかった。着物の間から割って手のひらを忍ばせ、胸をまさぐってみる。

指先に触れた、どく、どく、と小さく跳ね回る場所。

心の臓。そこが妙にざわめいて、街のやかましさなど比ではないほどざわめいて、仕方が無い。昼間のことを思い浮かべると、興奮と恥じらいが留めどめなく溢れてきて、溺れてしまいそうになる。

故郷とは何から何まで違う刺激的な世界、今までにない空間の喜び。

窒息するほどの、戸惑い。

それに加えて何故か、とらいちの顔が浮かんた。げきを飛ばした時についつい名を使ってしまったことへの罪悪感からだろうか……。

思い出す。

最後にとらいちと触れた、あの硬いようで弾力のある、温かい背中。の感触が胸と腹とを燦す。やがてそれは歪な不安と疑問になる。

自分を両親から買って、吉原へと売ったあの男は、いま何処へいるのだろうか。自分が客に噛み付いて、田舎ものと笑われたのを知ったら、あの無口で無愛想な男も笑ってくれるのだろうか。

めりやす足袋を履いている姿を見たら、どんな顔をしてくれる？ 考えれば考えるほど、睡郷は遠ざかっていく。

もう完璧に覚醒してしまい、あくびさえ出なくなると、今度は股が疼いた。意識してしまうと、どうにもモゾモゾしてしまうものだ。

手水はもうお富士が案内してくれたから、一人でも行ける。

思い立つとひばりは、半纏に腕を通して、布団からこっそりと抜け出した。

ししを終えて廊下を渡る。

闇夜には、上弦の月がだいぶん傾き始めていた。真夜中を過ぎればいずれ消えていくだろう。

それでも、吉原は明るくともり続けるだろうことは、惜しげも無く壁にかけられた燭台や灯籠から分かる。

ひばりは立ち止まった。

「おらもいつか……」

とらいちとは自分を、女の素だといった。いつか、つか佐のようになって、女になってしまつて、夜が当たり前になってしまつて。

「夜の生き物になつてしまふんだろうか」

考え、思い、想像し……。しかしそれらは形骸を保つことが出来ず、ひばりの身体をすり抜けていく。

農家の末っ子として育ち、鋤を握り、鎌を握り生きてきたひばりの、だが、小さくて細い五指に余つて零れていく。

そのくせ、売られたのだからいつか夜の生き物にはなるのだという達観はある。とらえどころの無いもの。肉を持たぬ、魂だけの実感が。

「夜はどんな風なんだろう……」

ふいに、上へ繋がる階段が目にと止まった。お富士が、夜には行かないようにと言つていた道筋が心を引っかいた。

楼閣は牛の角のように、相対するよう建てられている。客間の向こう、渡り廊下の先、階段を上れば女郎たちの座敷だという。

てっぺんの三階には、姉女郎のつか佐が誰かと夜を過ごしている。この先で。

不透明な腕に導かれ、夢遊病のようにひばりは歩みを踏みしめる。音は密やかに、誰にも気付かれぬように。

進みゆくうちに、ひばりは雅楽とも小唄ともちがう音を拾った。それは呻きのようなだった。

誰かが苛められているのだろうか。

心を好奇に満ちた憶測がよぎり、足取りはより慎重になる。

二階。暗い廊下を囲むように、光を湛えた障子が並んでいる。

障子の向こうから、恐ろしげに聞こえる呻き。それは断続的で、人間の言葉を成していない。

何がここで起こっているのだろうか。首を傾げつつ、しかしひばりは更に階段を上がった。

興味はあったが、知りたいのはあくまで、つか佐の夜だった。

鳥籠に飼われるという意味を、夜の生き物になる意味を、ひばりは知りたい。

飼育されているという意味、自分が売られた場所の全貌を、この吉原で初めて見た女という生き物を通して知りたい。

ひばりは昇った。つか佐のいる、三階へと。

第九話「交尾と性交」

三階には呻きらしきものは少なかった。代わりに、激しく布が擦れるような音に吐息が絡み、障子紙を僅かに揺らしている。

ひばりは、魚が跳ねている、と思った。

障子の向こうに、水面を感じる。とても小さな水面。ちょうど人の両手のひらほどの。

ひばりは左右にそれらの存在を感じながら奥へと進み、つか佐を探す。

深く閉じられた障子は中の様子を隠していた。薄く影を格子に納めるものもあつたが、殆どが奥へと引っ込んでいるらしく、ただの提灯と化している。

部屋にかけられた札を読んで、なんとかつか佐の部屋を求めていると、少しずつ行き止まりの壁が迫ってきた。

つか佐の部屋は、一番奥にあつた。

影は見えない。となると、部屋の奥にいるのだろうか。ひばりは障子に触れると、ゆつくりと右へ引いた。躊躇いがちに、隙間が出来て、中の輝きがひばりを照らす。

酒の席の跡、誰もいない。松枝を啜えた鶴の舞う屏風がある。その向こうに気配がある。

「そこ……」

ふいにつか佐の声が耳を噛んだ。ひばりは自身の存在が出来るだけ周囲に悟られないように忍んで進むと、そつと屏風の陰からのぞき込む。

思ったとおり、つか佐はいた。しかしながら、そこにいるつか佐は、ひばりが知っているつか佐とは、何かが違った。

男の上に跨っている。

つか佐は額に少し汗を浮かべて、頬を僅かに紅潮させていた。厚い白粉の上からでも、風呂あがりのように茹っているのが分かった。

上半身は開き、白く弾力のありそうな瑞々しい肌が露出している。くず折れた着物が腰を隠し、その下に、全裸の男が横たわり、蠕動していた。

男の鼻息は荒かった。巧妙に歯車を組んだ人形のように、一定の動きで腰を揺らし、つか佐に擦り付けているようだった。

つか佐により近づく度に、肉と肉がぶつかる音が響く。それに粘着質な音が続いた。

性交を、している。

ひばりの脊髄を雷が貫いた。

まぐわいを見るのは初めてだった。熱を孕んだ違和感が腹の辺りを弄って、感情を脅かす。

ひばりは動揺した。だが、目を逸らすことは出来なかった。強い吸引力を持って、行為はひばりの手首を掴む。

ひばりは凝視した。初めての光景に。

……いや、違う。

ひばりは既視に目が眩んだ。初めてではないような覚えがある。思い出そうと心が働いて、頭の隅に身を縮めていた小箱が、埃をたてて口を開ける。

森でのことだ。貧しい田舎に菓子などはあるはずも無く、ひばりは兄達について行って菓子代わりのアケビを頬張っていた。

その道の帰りで、妙に茂みが揺れている場所があつて、何事だと覗いてみると、鹿が交尾をしていた。

鹿も鳴くのだ、と思った。鶏の首を捻る時に出る声と似ていた。雌鹿を全身で押さえつけ激しく腰を打ち付ける雄鹿。雄鹿の太いものを受け入れながら鳴く雌鹿。

二匹の、栗毛色の表皮に覆われた筋肉は、見事に盛り上がり躍動し、森の木漏れ日のなか美しく輝いていた。

が、ひばりにはその光景が堪らなく恐ろしかった。いつも森を軽やかに駆けている鹿とは異質のものに思えた。

鹿ではなく、まるでその行為のためだけに生まれた不気味な存在に感ぜられ、ひばりは口を押さえて吐き気を覚えながら後じさった。

しかし兄達は逆に、一步も身じろがなかった。

むしろ魅せられているようで、呆然と、しかしはつきり興奮しているようだった。

大きく開かれ脈を走らせた彼らの眼球は、てらてらと魚の腹のような光をたたえ、ひばりの様子など気付いてすらない。

鹿と、兄達。とても不気味だった。

そうだ、これを、おらは見たことがある。

つか佐が、ふいに息を漏らす。艶っぽく、影のある吐息。

男の手が、つか佐の乳房に触れていた。白々と膨らむ乳は男の手から僅かにこぼれて、先の突起は赤く湿っている。

でも今日は、大丈夫だ。

鹿の交尾に似ているのに、目を離したいとは思えなかった。ひばりには、過去にあった嫌悪感が全くなく、そのかわり根を張ったような足があった。

鹿の交尾を覗いたあの日と何が違うというのか、ひばりは疑問を浮かべながらも、魅入る。

変わったのは獣か人か、ひばりが七つか十かの違いだけ。本質は変わっていないように思える。

自分の何が変わって、受け入れてしまっているのか分からないまま、ひばりは屏風から更に身体を乗り出した。

男の動きが激しくなって、つか佐もまた、動き出す。

潤んだ目を閉じ、舌で唇をなぞってから、つか佐は膝をあげて足の裏を布団に沈めた。

そして両の手で男の頬を包んで、蛇のように身体をくねらす。

僅かに上へ、下へ。上へ、下へ。男女が身震いする度に、上気する肌から汗が滴りゆく。

「つか佐、中が痺れている」

男が唇を歪ませ、差し出された乳首に吸い付く。唇を離しては指先で先端を突き、甘く噛む。

つか佐は男の愛撫に更なる腰使いで応じた。激しく肩が揺れ、瑞々しい乳房の弛みは兎のように跳ね、着物がざわざわと音をたてる。布が邪魔になったのか、動作をとめることなく二人して腰に落ちた着物を剥いで、つか佐はついに全てを晒す。

つか佐が腰をあげると、男女の結合が垣間にあつた。赤黒いそれは太く立ちのびて、跨る遊女を苛めぬく。今までに無い、一突き。

耐えかねて、つか佐の表情が苦しげに曲がった。

「お前はなかなか声を出さないな」

男はつか佐が快楽に喘いだのを無論見過ごさず、にたりと笑うと、彼女の柔らかな腰を持って、高く掲げた。

体位が変わる。

下から上へ、上から下へ。

男はつか佐を布団に押し付け、その尻を持ち上げて、後ろから貫いた。堪らずつか佐が今一度、唸る。

「だが、それが可愛いよ」

つか佐はいじらしく小さく首を振り、唇を結ぶ。まるで声を漏らさんと意地になっているようだ。

しかしながらよく濡れた彼女の中は男の激しい動きを拒むことな

く、受けいれてしまい、静かな抵抗は困難なことに思える。

男はつか佐にぴったりと身体を押し付けると左右の手で持って彼女の乳房と股とを弄んだ。

同時に、熱をあげて己の杭で穿ち続ける。

ついに気高い遊女は音をあげたのか、布団を五指で掴むと、甲高く啼いた。

途切れ途切れのそれは収束し、やがてひとつの絶叫となって長くたち伸びる。身体が強張り、荒く硬直し、享樂に堕ちる。

糸が切れたように、つか佐は布団に身体を埋めた。

未だ膝をつけ高く上がった尻から髓へと、液が伝う。怪しげな光を含んだ白濁色の体液はゆっくりと瑞々しい太ももを味わうと、ついと敷布団に潜んでいった。

その時だった。

不意に。まったく不意に、つか佐が視線をずらす。

予期せぬ偶然。
目が、合った。

ひばりは息を呑んだが、隠れるには時間が足りなかった。つか佐の瞳がひばりを捉え、一瞬だけ停止する。

叫び声をあげられるかと思った。覗いていたことを責められるかと。

しかしながら女は、声どころか驚く様子ひとつなく、……微笑んだ。

動揺したのは、むしろひばりの方だった。

ひばりは反射的に立ち上がると、後退し、脱兎の勢いで部屋を飛び出した。

俊足で階段を下り、廊下を渡り、息をするのも忘れて寝室へ、そして布団の中へと転がり込む。

「ひばりちゃん？」

乱雑な気配に起こされてか、お富士がひばりの布団を揺らした。が、ひばりは何も言わずに布団にくるまるだけで、その夜はもう、身を出すようなことはなかった。

第十話「金平糖と鬼」

吉原には夜の顔のほかに昼の顔がある。女郎屋を見世というが、昼にも四時間ほど開くのだ。

太陽が天中を仰ぐ真昼時、その少し前から、見世は活気付く。

遊女の見習いである禿の仕事は様々だが、姉女郎に用を願われる以外は、基本として掃除や炊事の手伝いを任されていた。

雑巾で廊下に水拭きをする。

単調な作業ではあるが、天気も良いので気分も良いし、飽きることはない。戸板や障子を外して全開にしたので、冬らしい冷涼な微風が絶え間なく吹くのも、また気分を爽快にさせてくれる。

吉原は鷹揚としていた。

あまりにも夜とは違う感覚に、昨日のことは夢だったのではないだろうか、ひばりは思った。

夜に見た、不気味で、だが惹きつけられてやまないあの光景。思えば思うほど、現実のことではないような気がする。酔狂で幻惑な悪夢を、啄んだだけのような。

春を驚ぐ……、自分があんなことをするのだろうかという、思案のまどろみがある。確信にはまだ遠い。

想起しながらひばりは、それを打ち消すように蒼穹へと背を伸ばし、大あくびをした。

「うふふ、寝不足なの？」

朋輩のお富士が床を擦る手をとめる。

「ししに出て、迷子になっただ」

「起こしてくれたら良いのに」

本当のことなど言えるはずがない。内心はびくびくしていた。まだばれてはいないが、つか佐が後々何かを言ってくるかもしれない。

「この人たちは、怒ると怖いべか」

「怖い？」

お富士はケタケタと笑うと立ち上がった。

「怖いなんてもんじゃないよ。郭の折檻は鬼だって泣くんだから」

鬼だって、という言葉に、ひばりは耳を疑う。

信じられなくて、懷に手を入れた。そこには、掃除のためにと脱いでいためりやす足袋が隠してあった。

めりやす足袋の柔らかな感触を指先で弄んで、ひばりはますます分からなくなった。こんな立派なものをくれる人たちが、鬼さえ泣かすようなことをするんだろうか。

考えていると、後ろから肩を叩かれた。

「よう」

振り向くと、昨日の眼鏡の男であった。

茶色い縞の着物を纏う小男は、謙るような猫背はなく、昨日と比べて僅かに背が高い。それでも、ひばりより頭ひとつくらいしか変わらないのだが。

「仁平」

お富士がぴよんと跳ねた。仁平という名らしい。

「おうよ。お富士に、えーと……」

仁平は審美を光らせる骨董商のようににひばりを凝視する。

「この子はひばりよ」

「へえ、ひばり。よろしくな」

眼鏡をちよいと人差し指で上げてから、仁平はひばりに手をのばした。おずおずと握手をする。

「不寝番の仁平だ」

「不寝番？」

「まあ、仲裁とか火の用心とか、見世番もしねえ雑用をしてんのよ。目につけてんのは、眼鏡つつつてな、目が悪いとつける」

そう言いながら、仁平は眼鏡を摘んで少しだけ前方へと動かした。それとともに目玉が肥大して映って、思わずお富士とひばりは吹き出す。

「まあ、こんな風に笑わせてみたりね。いやあ、昨日は助かった。

ああも事が擦れるとね、てめえ、笑わすのも空回り、下手したら斬られちまう。こりゃあ用心棒でも呼ばんかと思ったよ。

それとも、斬られたら良いのかねって」

仁平は調子のよさそうな口ぶりで言つと、

「そうだそうだ、これ、くえ」

袂から照る照る坊主の形に捻った和紙を取り出して、二人に握ら

せた。

開いてみると、奇妙な形をした小さな粒であつた。促され口に投げ入れてみる。

口に広がったのは、未体験の甘味。

「うわぁ！」

あまりに強い甘味に感嘆の声を漏らすひばりへ、お富士が耳打ちした。

「金平糖よ。お砂糖のお菓子」

「お砂糖？ そんな高いもの、ええだろか」

目を丸めるひばりの頭を、上機嫌な仁平はぐしゃぐしゃに撫でた。

「なあに。蘭医や用心棒に払う金よりかは安いから、受け取れよ。

他の禿には言うなよ、取られんぞ。盗まれんぞ」

ひばりは嬉しさのあまりもう一粒口に投げ込むと、丁寧に懐へとしまった。大事なものは懐なのだ。

「ところでめえ、先日のは、なんて言つたんだ？」

ふいに訊ねられ、ひばりは口に充満する唾液を飲み込んでから、正直に答えた。

「どれが訛つどおるか分からんから、言えん」

「じゃあ、めんこいつて何だ？ ベこつこは？」

「めんこいと、ベこつこ、方言だべが」

「方言だべ」

お富士が真似をしたので、すばるは少し照れながらも、
「めんこいは、可愛い。べこっこは、ほら、もおって、鳴く」

「……牛か！」

「そうそう、牛だあ！」

「なるほど、じゃあ……。うっは、ひでえな。もしお富士だったら
ザツクリ、だな」

と、仁平が侍の真似をし、

「それどういうことよお」

と、お富士が仁平の背中を叩いたので、思わずひばりは腹を抱えた。

三人の笑い声が弾け、廊下を満たす。昨日の夜が本当に、嘘のようだ。とてもからりとした気分が、ひばりを満たす。

ひとしきり笑ってから、仁平はひらりと踵を返すと、諭すような物言いではばりに告げた。

「ひばり。お前は少しかり威勢が良すぎるな。気をつけろよ。威勢が良いってことは、大変なことだからな」

「大変なこと？」

「いずれ分かるさ」

そんな意味深な一言を付け加えて。

第十一話「折檻」

ひばりが売られた見世、大海屋はつか佐のほかに八人の遊女を抱えていた。殆どが座敷持ちだったが、禿をもつものは少し減って、八人のうちの四人だけだった。

中でも多くの禿をもつのは小島という、二番手人気である。遊女は禿に衣食住を与えなければならぬ。その銭は勿論すべて彼女たちの持ちである。

なぜ禿をもつのか。それは彼女たちの矜持や意地に寄るところが大きい。将来の女郎を育てることは見世や吉原の者に対する礼にもなるし、なにより他の遊女たちへの見栄としても良い。

禿持ちの遊女が文の使いに禿をやることは、太夫の位がなくなつた江戸後期、傾城の証のひとつであった。

「じゃあ、あたいは使いに行つてくるから。もし他に訊きたいことがあつたら、後にね」

夜見世の始まる暮れ六つ、午後六時より少し前、とはいっても霜月だからか、日はもうどつぷりと暮れていた。文に提灯をもつて、お富士が闇夜に吸い込まれるのを見届けてから、ひばりは見世に入つた。

さて、どうすつて。

つか佐にはお富士について回れといわれたが、お富士には待つていろといわれた。となると自分には、仕事がないではないか。

仕事を探して、ふらふらと彷徨う。

道すがら、女郎たちや芸舞妓たちが鳥のような足取りで宛がわれた座敷へと向かうのに頭を下げる。

少しずつ見慣れてきたが、女たちが通るたびに居心地の悪い緊張がひばりをつまんだ。

とらいちが故郷の母を女ではないと言い放った意味を、ひばりはつか佐との出会いで理解している。確かに母は、あくまでも母であり、女としては色が足りなかったように思う。

そして田舎にいた女たちも、吉原の女たちを見てしまえば、女とは言いがたいものだった。

田舎の娘たち。皺と汗と、寒さに凍えた赤い頬を化粧としていた彼女たちと吉原の女は、何もかもが違う。

同じ人間なのかと身震いするほどに、色も、匂いも、立ち振る舞いも違うのだ。

そして、どちらに女という言葉当てはめるかと問われれば、間違いなく故郷ではなく吉原を選ぶ。

とらいちに言われたからではなく、これはひばりの中から生まれた判断だ。

「おんな……」

単調な語感。

しかしながらその三文字に潜むのは、淫靡で艶やかな夢想。どこで覚えたか分からない、もしかして本能からの定めなのかもしれない。

そして女の中の女として、ひばりが脳裡に描くのはつか佐であった。

彼女を抱くには最低、五両は必要だとお富士は言っていた。引き手茶屋で部屋を借りて一目、二目も同じ、楼閣に上がるは三合目。それまでに大抵、五両の金をばら撒く。

町人や侍風情では抱けまい。金のない者は一目で抱ける女を求めて安い下見世へ行く。

昔は茶屋を使って三合の引き合わせをする見世は多かったらしいが、今はここくらいのものなのだという。

五両払ってもいい女。

女。

禿を持つ遊女はそれほど多くない。ひばりは、つか佐が姉女郎だということが、誇らしいことのように思えた。

女の中の女が自分を禿として置き、衣食住を与えていること、その意味に応えなければならぬのではないか。

気合を腹に込めると、ひばりは子犬のように駆け出した。

お富士に教わったので、大体の間取りは把握している。どんな人が働いていて、どんな仕事をしているのかも知った。

見世を暇そうにぶらぶらして、配膳を忙しくしている者たちに声をかけてみて、茶屋も覗いてみて、表に立って呼び込みをする見

世番の周りで、同じく呼び込みのまねをする。

が。

「ああ、ひばりだっけ。お前は可愛いから座つときなさい」
ていよくあしらわれた。

田舎から出てきたばかりの禿に仕事を与えようなんて輩はいないらしい。

猫の手も借りたいほど皆忙しそうなのに、猫の手以下のひばりは、致し方なく、すごすごと戻ると金魚で目を遊ばせることにした。

一階の玄関口から裏手まで、ぐるりと回る細長い硝子の溝。初めてそれを踏んだときは、心臓が飛び跳ねたものだ。

あの日から、もう三日が経っていた。

「とらいちは、いつくんだろう……」

自分で口にしたとらいちという名に、ひばりは忽然と心を蝕まれた。その名は重たく、ひばりを何故だか不安にさせる。

風呂場での一件のせいか、売られたという事実からか。理由は分からないが、瞬く間にひばりの心を形容しがたいもので埋め尽くしてしまうのだ。

とらいちは、三船と賭けのようなことをしていた。

そいつを、女にしてやろう。

とらいちは確かにそう言ったのだ。

この言葉の意味することは、ひばりに何かをするということだ。それは、風呂場での手ほどのきのようなものだろうか。それとも、全く違うものだろうか。

「おらも、つか佐のようになれるだろうか」

世のものとは思えない匂いを纏い、豪奢な着物に負けぬ色合い、優美に咲く冷涼な女。あのような、生き物に。

夜の生き物に。

劣情に身をほだしていた、あの時のつか佐を思い出す。いつか自分も、あんなことをするのだろうか。女になるために、あれは必要なのだろうか。

とらいちも、あんなことをするのだろうか。

……女に。

水の中をひらひらと戯れていた金魚の群れが、ふいに飛散した。顔をあげると、廊下の奥を三船が歩いていくところだった。

三船なら、仕事をくれるかもしれない。

ひばりは立ち上がると、三船の後を追った。三船は裏を通っていく。ちょうど塀と建物に挟まれて湿っぽく翳っているところだ。

声をかけるにも時宜^{ときじ}を得られず、無言のままひばりはついていく。三船が角を曲がった。ひばりも曲がろうとして、踏みとどまった。息をのんだ。

反射的に、思わず壁に背中をくつつける。三船に見つからないよ

うにと祈りながら、顔だけで窺った。

やはり。

そこには、恐ろしげな光景があった。

遊女だ、遊女が松の木に逆さで吊られている。

質素な布切れを身体に巻いた半裸の遊女。

腕やら胸やら足やらをはだけ、縄で全身を縛られ、宙に浮かんでいる。苦悶を浮かべる顔は、あの世とこの世を行き来するように時折、痙攣する。

口の端はてらてらと鈍い光をたたえていた。

そんな遊女を、三船は平然と見上げている。

「気分はどうだい、美佐」

心配をするでなく、愉快さを含めた声色だった。

「足抜けっていうのはね、遊女の恥だよ。分かるかい。ええ」

木の脇に置かれた桶を手にとると、三船は中身を遊女にぶちまけた。飛沫をあげるそれは冷水のようだった。

雪はまだ降っていないものの、木枯らしの吹く季節の、夜中である。当然ながら遊女は寒さに身を震わせると、静かに目を瞬いた。肉の丘陵を冷たい滴が這っていき、先で滴る。

「起きたか。美佐。どうだい、生き恥をさらす気分は」

濡れそぼる女を眼前に、三船は懷から小刀を出すと、縄にかけ、ゆっくりと切り目を入れた。

やがて縄は傷と重みに耐えられず悲鳴をあげ、遊女を落つことし

た。顔から地面にぶつかって、遊女が低いうめき声をあげる。

「死なれちゃあ困るよ。あんたは切見世にでも売ってやろうと思うんだ、そうすりゃあ、客だって納得するだろう」

美佐と呼ばれた遊女は息も絶え絶えに、胡乱な瞳を空へ投げやる。彼女を縛る縄はきつく、少し浅黒い肌に容赦なく食い込む。濡れた肌は苦しみのためか絶え間なく震え、疼痛を訴えている。

虫の息の彼女に対し、

「よくお聞き。あんたの穴を誰が埋めたと思う？ ひばりという、青つちろい禿に、あんたより格上の小島だよ。

もし用心棒だなんだのの騒ぎになっていたら、間違はなくあんたを差し出して、斬り殺させてやったところだ」

三船は冷淡にも彼女を蹴り上げ、仰向けにさせる。そしてその股間に、足をねじ込んだ。

女が悲鳴を上げ、背をそらす。衣が剥がれ、身体を隠すものが縄だけとなり、あられもない姿となる。

豊満な乳房がしなやかにたわみ外気に晒され、ぷくりと立ち上がった。

逃げようにも、縄が女を強く束縛しているため、容赦の無い行為はより凄惨さを帯びた。

三船の外履きのための二本歯の下駄は遊女の陰部に食い込み、更に茂みを掻き分け陰部を貫く。

痛みに身をきしませる遊女は、もう抵抗する力を失っているようである。しかし意識を断つには、その刺激は強すぎた。

遊女を足蹴にしながら、三船が袂からなにかを取り出す。見やるとそれは、一本の針のようだった。手馴れた様子で、遊女の足を掴む。

これから何をするのか、ひばりは戦慄を覚えながら想像し、眩暈を覚えた。

まさか、まさか……。

刹那、女郎が大きく痙攣し、蛙のような悲鳴をあげた。ひばりは目を閉じようとしたが、目蓋の端から三船の凶行を見てしまった。

針を、遊女の足の爪の間に刺しこんだのだ。

「死んだほうがマシだと、思っかね。ええ？」
抉るように抜き、間髪入れず突き刺す。

無力な遊女は、三船の腕を振り払えず、悶絶する。

弱りきって絶叫も出来ない遊女を、痛め続ける三船。これがあの、三船だろうか？

キセルをくゆらせ、主人として見世に立つ姿は雅で、ひばりは好きだった。しかしここにいる三船は、闇に紛れて粘着質な拷問を楽しむ、正に鬼のようである。

これが郭の、折檻。

すばるは青ざめて動こうとしない足を叱咤すると、逃げるようにその場を後にした。

第十二話「痛みを塞いで」

自分の叫びに驚いて、目が覚めた。

「どうしたの、ひばりちゃん」

心配そうにお富士が布団から身を出す。

ひばりは、なんでもないと首を振ると、布団を剥いだ。

身体中、汗でぐっしょりと濡れそぼっている。それは冷え冷えと
していて、腹の底まで凍えるようだ。

三船の折檻を見てからというものの、安眠というものをしていない。
夢の中での折檻が繰り返され、すばるはいつも恐怖するのだ。

その上、夢の中では三船が振り向き、

「見たな」と迫ってくる。

すばるは逃れられず、三船の針で全身を刺される。

足抜けと切見世のことを、お富士に訊いた。

足抜けとは吉原から逃げ出そうとすること。切見世とは吉原の端
にある、安い花代だけで次々と男の相手をしなければならぬ、程
度の低い見世だという。

遊女の足抜けは見世の恥じであり、捕まれば激しい折檻を受ける
という。ひばりが見た折檻は、吉原では最も重い罰なのだ。

それでもひばりには、自分もいつかあんなことをされるのではな
いかという、底知れない不安があった。拭いきれず、悪夢に魘され

る。

眠いが、眠りたくない。

ひばりはぼうつとした頭で昼見世前の掃除に励んでは、じっと空を仰いだ。

今日の空は冬らしく灰色に曇っていて、ほのかに雪の匂いがする。冷え込んだら、雪が降るかもしれない。霜月ももうすぐ終わる。師走がくれば、あっという間に正月がくるかもしれない。そうすれば、十一になる。

時の流れは歳を取れば取るほど、早くなるのだという。時間が、この不安を埋めていくだろうか。せめて雪が降れば良いのに。

「ひばり」

呼ばれて振り向くと、つか佐女郎がいた。まだ化粧をしていない素肌もまた色白で美しく、涼やかだ。

夜の一件については詮索する様子はなく、いつもどおりひばりは、畏まった。

「どうしました、花魁」

「今日から座敷にあがるかい」

青天の霹靂、それは喜ばしいことだった。

買われたばかりだからと座敷を締め出されていたひばりは、働けないことに僅かながらの居心地の悪さを覚えていた。

「え、ええんだべか？」

「訛っているよ」

「えと、……よろしいでしょうか」

「お富士について、あんたは座っていればいい。後は、とらいちにでも聞きな」

心臓が飛び跳ねる。

「とらいち？」

「ああ。今日、三船から金をふんどりに来てる。三船の部屋にいるから、行ってみな」

ひばりは素直に頷くと、静々と三船の部屋へ向かった。

とらいちという名は、不思議と胸をざわめかせるもので、足取りは軽やかではなかった。それでもさほど広くもない楼閣、あつという間に三船の部屋についてしまった。

「ようござんすか」

「……お前か」

久々の重低音に心臓が疼いた。

「ひばりです」

「入れ」

膝をつき、丁重に襖を開けると、キセルの匂いと紫煙が舞った。中にはとらいちしかおらず、一人キセルをふかしている。相変わらずの仏頂面がそこにはあった。

「三船……おかあさんは？」

「客が来たみたいだ」

「とらいちは客ではないの」

「俺はこの連中とは古くてね」

ふうんと鼻を鳴らしつつ、距離をとって正座する。

とらいちハキセルの灰を鉢に捨ていれると、視線を宙に浮かせる。まるでひばりなどいないかのように。

その素っ気無い横顔は、意外にも丹精だ。

思えばとらいちハ、随分と整った顔立ちをしている。傷さえこさえず身なりもまともにすれば、色男として通るんじゃないかと、ひばりと思う。

「三船から聞いた。早速、利取る利取ると鳴いたみたいだな。お陰で今年は大丈夫そうだ」

話を振られて、ひばりは押し黙った。金回りの話は、よく分からなかった。自分の価値なのに、金の巡りは自分の外にある。そのことに改めて気付き、ひばりは言葉に窮した。

静寂が薄く場を覆おうとして、とらいちがまた口を開いた。

「……めりやす足袋、使っているな」
「うん」

「温かいか」
「うん」

「良かった」

やはりというかなんというか。いまいち、会話が続かない。まるで故郷からの二人の旅路を思い出され、ひばりの胸はますます苦しく、萎む。

このまま適当に逃げ出すことも出来たが、意を決してひばりは、ずっと訊ねたかったことを口にした。

「……あの」

「なんだ」

「おらは、女になれるだろうか」

「女になりたいか」

「……怖い」

ひばりは嘘がつけなかった。

先ほどまで空を弄んでいたとらいちの目はひばりをしっかり捉えていて、無駄な言葉や感情を根こそぎ剥いでしまう。

とらいちのせいで、酷く赤裸々な動物になる。

「ひばりもそのうち、男に抱かれたり、折檻されたり、する？」

気付けば、涙声になっていた。どうしてだろう。ただ物事を訊ねているだけなのに感情が高ぶり、泣きたくもないのに胸がつかえる。

震えるひばりに、ふと寡黙な男の手が伸びた。

甘えるかと叩かれるかと思って目を瞑ったが、与えられたのは意外にも優しい感触。瞼を開くと、とらいちは、ひばりを撫でていた。

「ああ、あるだろうな。だが少なくとも出来る。苦しいことも辛いことも、賢くあれば、お前をそれほど襲わない。その術は、俺が教えてやる」

とらいちの手がひばりの頬を覆い、その親指が、滲む涙を拭う。

「お前は子どもだから、言われたことには素直に従っているんだ。歯向かうのはほどほどに、腹がたつても、一呼吸置くんだけ。そしてよく働け」

風貌からは想像しがたいほど優しい口調に心が解れ、一方で戸惑う。

これは同情なのだろうか。

いや、とらいちは人買いなのだ。そして散々、ひばりを歩かせ、吉原に売った。しかも賭けをしている。

そんな人間が、今更同情するだろうか。

しかしながら、とらいちがひばりに心を傾けているのは、拳動から確かなようであつた。

そしてひばりは、それが心地よく感ぜられる。先ほどまで、とらいちによって不安だつた心は、とらいちによって癒されている。

次第に、目蓋が重くなってきた。

三船の一件からの睡眠不足が、こんなときに疲れとして出てきたらしい。不意に気が抜ける。

と、突然、とらいちがひばりの腕を掴んだ。

あつという間に、とらいちの胡坐の中に、ひばりがすっぽりと包まれる。後頭部にとらいちの腹の温もりを感じながら、何事かとひばりは仰いだ。

「寝ておけ。昼見世前になったら、起こしてやる。今日は、耳半分でいいから、訊いておくんだ」

とらいちはひばりの目蓋に手を置いて、静かに語り始めた。縷々

（るる）とした、迷いの無い声色。

ひばりは素直に安堵し、目を閉じ、身体の力を抜いた。

「もうひとつ、働くことで大切なのは、覚えることだ。どんな些細なことでも、反芻して覚えろ、身体に叩き込め。

知識や芸だけでなく、とにかく知れ。見て考え、よく悟れ。そして感づき、覚えろ。

そのために五感を常に動かしておけ、分かったな」

脱力しながらも、頷いた。

「ところで、折檻を見たのか」

「うん、三船が」

ほんのひとはく間が開いて、

「楼主というのは、折檻はやらないんだ。そういうのは、別の下っ端がやるんだよ。なんにせよ、三船の言うことを一番に聞くんだ」

また、頷いた。このまま眠ってしまおうとして、ひばりはなんとかなしに、もうひとつだけ気になることを訊ねてみた。

「おら、とらいちのせいで、不安になったり、大丈夫になったりする」

心を表現するのは難しい。上手く語る自身はなかったが、それにしても拙い言葉に恥じた。伝わったろうか……。

静かに、自分の鼓動を数えていると、答えはやってきた。

「主従、なんだろうな」

低く穏やかな喉、気のせいか少し寂寥を帯びて、
「安心しろ。親からお前を買ったのは、俺だ。お前は俺を、飼い主
かなんかだと服ろうているだけだ。そのうち、違う者を慕う。主従
など、そんなものだ」

「え？」

「お前は俺の言葉だけを信じていろ、それだけでいい」

今度は頷かず、意識を深く落とした。

運命に揉まれた幼い瘦躯は、眠りの深淵へと落ちていく。
しかし悪夢を見るのではないかという心配はもう、欠片もなかつ
た。

揺り籠のような温もりとともに、少女は夢郷へと沈んだ。

第十三話「どぶの中の秘密」

顔が妙に火照っている。火鉢の傍での胡坐枕で、身体に熱が籠もってしまつたらしい。

手水を済ませ、かじかむ手で頬を包みながら、ひばりは部屋へと戻った。

部屋には既にお富士がいて、白粉をはたき、下唇に紅を引き終わっていた。

お富士の髪を結わえているのは仁平だった。この男は、意外にも手先が器用なのだ。

「ひばりちゃん、もう湯じまいになるよ。どこいったの」

「三船の部屋にいた」

正確にはとらいちの膝に寝っころがっていたのだが、まあ間違ではない。

ひばりはお富士の隣にすぐごと座ると、髪結いを見つめた。あつという間に髪は結われて油で固められ、拳ほどの大きな赤い櫛がおでこの上に飾られる。

「お富士ちゃん、可愛いね」

「あは、ありがと。次はひばりちゃんの番ね。」

仁平、この子はまだ私よりふたつも下だから、櫛や簪よりも、花をつけてみたらどうだろう」

「わっちも白く塗る？」

ひばりが首を傾げると、

「まあ、お前みたいなのだと、白粉は好かねえな。紅もいらんだろ

う

「お齒黒はつける？」

「お齒黒？」

「おはぐろどぶと聞いたから」

「ありやあ昔の名残だよ。今じゃあ誰も使わねえ。外の連中くらいのもんさ。よし、取り合えず結ってやる」

促され鏡の前に座すると、まず櫛を入られた。油の代わりに水を差し、丁寧に梳いていく。

「髪がお富士より短いからな。剃刀で整えてから、両耳の上で二本に結わえよう。そこに、縮緬の花をつけてやる」

そういうと、手馴れた動きで仁平は素早く髪を切りそろえ、赤い紐で結わえ、花を添えた。

祭りのときでもこんな洒落の効いた格好はしない。ひばりは飛び跳ねるように立ち上がった。

「おらあ、こんなの初めてだあ」

「ひばりちゃん！」

「わっち、こんなの、初めてでありんす。堪忍？」

叱られて訛りを訂正してみるも、お富士は気に入らなかったらしく、頬を膨らます。

お富士の里言葉談義が始まるかとひばりが身構えたところで、
「用意は出来たかい」

つか佐女郎が廊下に立っていた。どうやら、待たせていたらしい。

「まだ着替えが出来てないのか。さつさと支度をし。今日は両替屋の息子が来るんだからね」

隣接する茶屋には、座敷を借りていた。見世には無い大座敷だ。もちろん、ひばりは座敷に入るのは初めてになる。

緊張に飛び出しそうな心臓をなんとか押し込め、平静を装い、姉たちの後につく。

「つか佐でござんす。ええですか」

襖がすつと開けられた。中では既に、琴が静かに鳴らされている。上座に座る初老の男が、料理につけていた箸を置いた。

「久しぶりじゃの。元気そうじゃないか」

「ご隠居さんこそ」

よほどの馴染みなのだろう、気さくな受け答えでつか佐はご隠居の脇に腰を下ろすと、酒を進める。

昼見世で女を抱きにくる客は少ない。琴の音色に混じって、子どもと女らが楽しげにじゃれあっている声が聞こえる。

いつもならば、ひばりもその中にいる。

しかしひばりには、その声が気にならなかった。つか佐の一挙一動を吸い込もうと、無意識に集中していた。

どんな些細なことでも覚えるという、とらいちの教えが、眠りのうちに染み込んでいたらしい。

あんまりにじっと見つめていたので、ひばりは自身に近づく影に気付かなかった。

「君が、北国の子？」

突然視界に若い男の顔がどんと現れて、ひばりは思わず仰天した。

「あはははは、仁平から聞いたとおりだ。不思議な目をしている。めんこい、めんこい」

「ななな、なんですかあ」

思わず田舎言葉が出てしまい、

「なんでござんしょう」

と言い直す。

「なんだ、田舎言葉はやめるのか。めんこいのに」

「八尋、禿を困らせるんじゃない」

ご隠居に諭されて、八尋と呼ばれた男は畏まり、ひばりの前に座した。

「失礼。私は木下八尋と言います。あなたが啖呵を切る羽目になった馬鹿な男の弟ですよ。その節は、兄がお世話になりました」

丁稚ていぢかと思いきや、ご隠居が、

「愚息どもは女の扱いが下手だな。すまんの、つか佐よ」

ひばりは平伏しながら、この間の不逞の輩を思い出す。なるほど、両替屋の息子。生まれに自信がありそうであったが、両替屋となると納得がいった。

両替屋は、両替をするばかりの店ではない。金の貸し借りをするほか、為替を発行するなど、江戸時代では銀行の役割をしていた。

八尋はどうやら、ひばりに用があるらしい。どういった見か察しかねるが、つか佐の言いつけでは、黙って座っていなければならぬ。

ちらりとひばりは、つか佐を窺う。姉女郎は目線をご隠居に定めたまま会釈をしていて、こちらに気をやる様子は無い。

ひばりの心中を察してか、或いはまったく配慮するつもりがないのか、八尋は一方的に話し始めた。

「仁平を知っているだろう。私は仁平とは気が合う仲でね。あいつに聞いたんだよ。

いやあ、痛快だった。溜飲が下がるとは、このことだろう。あの兄は、牛みたいでね、寝ては食べ寝ては食べ、役立たずでね。

乳が出る分、まだ牛のほうがましだ。最近じゃあ、牛は鍋にもなる。

牛より使えないとなると、田舎ではなんと言ったい」

ひばりは返事をせぬまま、ぼんやりと思考の糸を手繰った。そうして、ある言葉が浮かぶのを、しかし口を閉ざしたままであったので、飲んだ。

押し黙るひばり、ひばりを待つ八尋。

しばしして、分け入ったのはご隠居だった。

「わしも知りたい」

つか佐を見やる。つか佐は今度こそひばりに目を配り、頷く。

「……河童じゃ」

一言だけ、ひばりは告いだ。

「どついう意味だ」

「泣いて飯を食べると河童になると言う。鍬も持てん童子のことではないんす」

「ほう、河童か」

それ以上、八尋は問わなかった。何を思つてひばりに声をかけたのか分からぬほど、喋らない。ただ一人で宙に視線を漂わせ、考えに耽り、そのまま飯も食べずに過ごしていた。

昼見世は昼七つ時まで。もう日没は近づいていた。

早めの夕餉をとつたら、女郎たちは座敷へと上がらねばならない。つか佐のような売れ筋の娼妓は息つく暇も無い。禿も同じこと。

四つ時、帰る客をアイノアイノと見送るまで、ひばりの安堵する時間はなかった。

今日はつか佐の座敷に居続けで揚がる者はいないので、最後の客の背中が人波に消え入ってしまうと、ひばりはこっそりと背伸びをした。

「なんだい、みつともない」

「あいすいません」

ひやりとして、顔を上げる。

つか佐は、特に厳しくいうではないらしく、涼しげな笑みを零していた。かまびすしい送迎の活気の中に、その色香は際立ってみえる。

うつとりしていると、

「とらいちと、何か話したかい」

「へえ、しっかりと一言いつけを守ることと、よく覚えることと申し付けられました」

「わっちのことは、なにか」

尋究だと気付いて、ひばりは僅かに目を瞬いた。つか佐の意図が
知れず、しかし正直に言ってしまうのも躊躇われて、

「……特に、花魁に学べと」

「そう」

探りを入れたわりにはあっさりと、つか佐は身を翻し、見世へと
戻ってしまった。

日頃の挙動から、矜持の誉れ高いことは瞭然の花魁。

その彼女の、日頃とずれた問いかけに、なによりその主たるもの
がとらいちであったことにひばりは立ちすくんだ。

なんで、とらいちのこと。

愕然として去りゆくつか佐の背を見やっていると、怖気たつ感觸
がうなじを舐めた。

はっとして空を仰ぐと、淀んだ墨汁色の暗黒に月はなく、かわり
に牡丹雪がちらりちらりと踊っていた。

水を含みすぎた雪は地面にあたりすぐに身をほぐしてしまう。里
とは質の違う雪に興ざめしながら、ひばりは、自分が随分と遠い
ところに来てしまったのだと思い起こした。

連れてきたのは、とらいちだ。

つか佐花魁はとらいちに懸想しているのだろうか。

思い、それは静かな見定めとなる。白子といえ、自分のように歳
のある禿を養うなど可笑しな話なのだ。禿を置くということは衣食

住を与えるということ、多くの銭を食う。

とらいちは知っていて、この見世を選んだのかもしれない。

知識や芸だけでなく、とにかく知れ。見て考え、よく悟れ。そして感づき、覚える。そのために五感を常に動かしておけ。

あの時とらいちが口にした言葉は、人の心までも意味を孕んでいたのだろうか。

分からない、そのうち、分かってしまうかもしれない。

雪は積もることを知らず、地面をしつとりと濡らしていく。吐息は白み、手はかじかむ。震える。齒の奥を凍えさせてひばりは呟いた。

「なんて、冷たいんだろう」

なにがため、だれがために雪は降るのか。

幼い瘦躯に果てない夢想がよぎり、ひばりは、ただ厳威なる冬の夜を仰ぐばかりであった。

第十四話「身体は刻む」… 1860夏

親兄弟たちは、自分を売った金で、ひもじい思いをせずに済んでいるだろうか。

ふいにそのことを思ったのは、蝉時雨の煩さに外を見やっただけの瞬間であつた。天から落ちるようにその思いはやってきて、息を詰めていると、手に持った筆から墨汁が滴った。

「あつ」

慌ててみるも時既に遅し。紙に墨汁は大きな点を作ってしまった、じわりじわりと滲んでいく。

「これ、ひばり」

習字のお師匠さんに扇子でおでこを叩かれて、ひばりは小さく呻いた。

お稽古の帰り道、自分がそれほど親兄弟たちのことを考えていなかったのだと今更に思う。忘れたわけではない。

昼には掃除、文使い、やれ読み書きだとてんやわんや、夜には座敷で姉女郎と客の掛け合いに手練手管を見て学ぶ。

目まぐるしい時の中で、故郷に見捨てられた傷はいつしか癒えていたのだ。

不思議なものだ。意識せずとも自分は、籠の中の生き物になっている。売られてきた頃にあつた不安や恐怖は、朱に交わって消え入ってしまった。

今はただ、姉たちを鏡に身を育て、しきたりに背筋を伸ばし、いつか女になるのだらうという思いがある。諦念か観念か、それとも

全く違うものなのか。

どうせなるのなら、つか佐のようでありたい。

今宵は花魁道中がある。つか佐は仲の町大海屋の遊女として、先陣をきつて見世を出す。

暖簾を掲げた花魁、百年ほど前に使われた言葉で表すなら天神、太夫である。

かつては、客の待つ茶屋への道筋を花魁道中といった。時代に流され茶屋を僅かばかりとした今日の吉原では、見世が自慢の花魁を外に見せる、いわば行進、凱旋のことを差す。

当然のことながら、見世は威信をかけていた。その花魁道中に、つか佐が選ばれたのだ。

道中を、外八文字という独特の歩みで悠然と進む花魁。目を瞑り頭に浮かべ、ひばりは自分が花魁にでもなったかのように一歩を踏み出した。

が、外八文字とは優美である一方で実に難しい歩き方なのだった。三年の修行を要するとは露知らぬひばり、ついには釣合いが取れず、豪快に前からすっ転んだ。あたりにお稽古道具が散らばり、可愛らしい音を立てる。

あたりからくすくすというあざ笑いが聞こえて、ひばりは顔を真っ赤にさせながらも道具をかき集め、一気に立ち上がった。

しかしながら、どこかおかしい。まじまじと見やると、悲しいかな、下駄の底が欠けていたのであった。

不寝番という、酒の席の仲裁や火の用心を主にやる男衆がいる。そのうちの仁平は、眼鏡をかけた小男なのだが、この仁平、とにかく手先が器用で、床几やら箆笥やらは作るし鬘も結うし布物の解れもちよよいと直してしまう。

そのため、よく修理事を任されていた。

「仁平」

裏に回ると、いつもの通り仁平は巧みに手先を動かしているようだった。真夏らしく上半身を晒し、鬘の上に手ぬぐいを被せていて、嬉しいことに何十という下駄や草履に囲まれていた。

「ひばり、てめえまさかまた下駄ぶっこわしたんじゃないだろうなあ」

「えへへ」

「あー、もう、貸せ」

仁平はひばりの手の内から下駄をぶんどると、ひっくり返す。

「……ひつでえな。乱暴なてめえの気性が丸分かりだ」

「わっちはそんな乱暴もんじゃありません」

「里言葉やら芸事ばかり上達しても花魁にはなれんぜ。こんな外八文字じゃあ、話にならん」

「ど、どうして分かったんだあ！」

心臓が喉から飛び出しそうになって喉下を押さえたひばりに、仁平は鼻高そうににやりと笑うと、

「簡単だ。履物っつーもんはな、てめえの歩き方を教えてくれんのよ。下駄の齒、草履の藁の削れ具合と泥のつき方でよ、簡単に分か

「うちまう。」

それだけじゃねえ、お医者みてえに体のどこがわりいとか、分かつちまう。人の生き様ってもんが履物ひとつで分かるのよ」

仁平は地に臥せっていた草履のひとつを手にとると、

「これは右だけが削れてんだろ、こいつは左足に古傷が奉公人のできあ。庇って歩いてんのよ。女と惚れた腫れたでぶすつと、やられちまったのよ」

一呼吸おき、

「こんな風にな。人の生き様つつもんは、身体の形だ姿勢だなんだのって、出てくんのよ。それを一番に刻むのは、履物ってえわけ。てめえはじゃじゃ馬よ」

「じゃじゃ馬でなにが悪いっぺが。それはそおと、わっちにも分かるかいな。教えてくなんせ？」

手のひらを返して、ひばりは首を傾げながら手を合わせた。

「てめえはいつもそうだな。教える教えるって、こんな身につけても花魁になれんのやぞ」

「だって、とらいちが、なんでも学べって言ったんだあ」

「とらいちとらいちって、あんなの何処がいいってんだ」

「とらいちは、おらがどうすれば良いか教えてくれるし、たまに芸や世間様のことも教えてくれる。歌もうまいし、将棋だって強いよ」

「強いだあ？ ああいうでかいのに限って、ナニは弱くて小さいんだぞ！」

「ナニって、何？」

「てめえ、そりゃあ……」

「ほんと、咳をひとつで二人の掛け合いに割り入る恰幅のよい女。いつの間にやら、二人の横、内輪を片手にした三船がいた。」

「良い話を聞いたね。人の生き様は身体に出るっていうのは、ためになるねえ。だけど、最後のほうは、真昼間には少しえげつないことないかい、センス」

「すんまへん」

仁平が頭を欠いて詫びるのに呆れたような顔をしてから、三船はひばりに向き直った。

「ひばり、この忙しいときに何を道草くってるんだい。あんたはつか佐の禿なんだよ。花魁道中の後ろっていったってね、準備ってもんがあるだろう」

「すんません、三船おかあさん」

「まったく、外八文字なんかあんたには早いよ」

「一体いつから聞き耳をたてていたのだろう、そう思いながらひばりは、三船の後についていった。」

第十五話「闇の上に立つ光」

見世は瑞気伴う喧騒の最中にいた。慌しく四方八方と動く奉公人たちはみな緊張の色を隠せずに顔を強張らせている。

身支度を終えたひばりは、糸を張ったような空気を襖の外に感じながらも、手玉を投げて遊んでいた。暑いこともあって妙に汗ばむ手は、器用に三つの手玉を空に躍らせる。

「ひばりちゃん、緊張してないの」

お富士に問われ、首を左右に振った。

「気持ちはずき立つけど……お祭りみてえだ。おら、さんさっていつて、祭りじゃあよく踊ってたもんよ」

「暑さで頭が参っちまったの間違いだろう」

きゅうつと後ろから耳を抓られて、ひばりは身を捻った。

本日の主役、つか佐女郎である。簡素な小袖姿で髪結いを待っているのだ。その涼しげな顔色は、季節に関係はないらしい。

「晴れ舞台なんだ。緩みのないように頼むよ。転んだら、殺すからね」

その手には貸し本屋から借りた春画本が開かれている。江戸で流りの、男女のまぐわいを描いた露骨な画集だ。

そちらの方こそと刃向かいたい理不尽な話であるが、姉には逆らえぬ。

「あい……」

耳を押さえながら涙目で相槌し、なんとか解放してもらうと、だしぬけに、襖を乱暴に開くような音が響いた。

何事かと見やる。

そこには、すさまじい形相をした遊女が髪を振り乱し立ち尽くしていた。

激情に歪んだ顔だったため、一瞬誰か分からなかった。

つか佐の、小島姉さん、という呟きに、大海屋二番手と名高い遊女だと思に至る。

優雅な遊女は今、鬼気迫る面容でつか佐と視線を交わすと、驚くべき行動に乗り出した。

手をつき膝をつき、なんと頭を垂れたのだ。

普段は匂いたつ矜持と凜とした振る舞い、なにより常に穏やかである様子から多くの客の寵愛を受ける大人物。そしてつか佐にとっては姉女郎でもある。

当然のことながら、部屋の空気が一気に静まり返った。

「小島姉さん、なにをしなんす。顔をあげてくんさい。今宵はめでたい道中でござんしょう」

つか佐は、周囲の動揺よりも僅かに落ち着いた様子で膝を折ると、小島の肩に手を置いた。その細い手首を、小島がぐっと掴む。

「その道中、わっちに下さらんか」

さすがのつか佐も眉を顰め、里言葉を忘れた。

「姉さん、どういうこつてえで」

「訊かんで。どうか、どうか……」

畳にひたいを擦りつけ、ひたすら懇願するだけの小島を、つか佐はなんとか剥がしにかかる。

しかし小島は畳にしがみつくと身体を曲げて、尚も懇願した。
「堪忍、堪忍じゃ。どうかどうか」

そこで不意に感づいて、つか佐は力を抜いた。
「どなたかに操をたてちまっただんですか」

崩れる小島は口を閉ざす。その沈黙が首肯となる。

「身上がりとは病気でなくて、操ですかい。ついに首が回らんくなつて来たんですかい」

身上がりとは、自分で花料を払って休みに入ること。続けばすぐに、禿の飯代も勘定出来なくなる。それこそ、小島は四人もの禿を抱えている。

凶星だったのだろう、

「あんたは、若いじゃないの。いくらだって、道中を歩ける。わっちはもうすぐ三十路、もう墮ちるだけでしょう。最後の晴れ舞台と思つて、どうか、どうか慈悲を頂戴よ」

小島が顔を上げた。

絶望に打ちひしがれたものの顔がそこにあり、ひばりは俯く。それはかつて故郷で味わった慢性的な飢饉と、それに苦しみ喘ぐ者たちを彷彿とさせた。

古くから吉原にいて、禿たちを養ってきた姉女郎。手を差し伸べてやりたいものだが、

「姉さん、それは道理にもとるってえもんだ。わっちはさておき、大海屋はどうなりやすか。三船のかあさんはどうなりやすか」

つか佐の言葉は全くの正論である。無論それは、小島も承知の

上。拒まれた遊女は幽霊のように力なく立ち上がると、

「そうね。そうね」

と呟き、もたれかかるように襖を開けて、

「忘れて頂戴、少しだけ、具合が悪いの」

そのまま滑るように立ち去っていった。

まるで夢でも見たかのように呆然としてみると、つか佐は腰をあ
げて開け放たれていた襖を閉め、

「誰にも言っんじゃないよ」とだけ、言った。

人垣がざっくりと割れる。

つか佐が外八文字で歩き出す。

島田に結わえた髻に二十の金簪と拳ほどの紅色の櫛を挿し、左耳
の上に絹を赤に染めた鬘かすらおび帯を巻く。

蔓に合わせて同系色の着物で纏めた。

十貫も重ねて着ているので、赤子をひとりふたり背負うより重い。
それでもつか佐の足取りは軽やかだ。

外八文字。京の島原では歩幅の小さい内八文字だというが、吉原
は違う。

歩幅は大きく、派手に。いったん内に向けたつま先をついと外側
に向けて、八の字を練るように描き、地を踏みしだく。

江戸前らしく豪快で、しかしながら色香を失わぬ歩き方。

これを身につけるに、三年を要する。

背を僅かにそらせ遠く一点を見つめ、しず、しずと三枚齒の高下

駄がゆく様は、人のものとは思えぬ品格を放つ。

大海屋の紋で赤く染め抜かれた傘をかざす男衆と、細かい細工によつて紫色に燃える提灯を持った引舟女郎が脇を固め、後ろに六人の禿がつき、さらにそれらを奉公人が囲む大行列だ。

真夏とはいえ肌寒い夜に、ただならぬ熱気がとる。

辻は見物客で溢れていたが、すぐさまそれはふたつに分かれ、静まった。

感嘆と囁きが凪いた海のようにささやかに木霊する。皆が皆、倏倏に魂の抜けたような顔をして花魁道中を遠巻きに見つめている。

ひばりは、自分の姉女郎の偉大さをひしひしと感じ、その傍にいられるということがどれほど誇らしいことなのかということ进行知っていた。六人の禿の中央から仰ぐつか佐の背中は最初の頃に抱いたものと変わらない。

日々の中でどれだけ人間臭さを知っていても、その美しさは天女そのものだ。

惚けていると、刹那、つか佐の歩みが鈍った。
やにわに。

それは天女が不意に羽衣を落としかけて、掬うような動作だった。

花魁の機微に、誰も気付いていないようである。知る者のいない、つか佐の心を惑わす存在。

ひばりは、ひばりだけが知っていた。

とらいち。

顔の向きを変えず、ひばりは視線を走らせ、人ごみの遙か遠くに目を留めた。大柄の、顔に傷をつくった長髪の男は、微笑むでなく、いつもどおりの仏頂面でそこにいた。

花魁道中はつか佐の晴れ舞台であるが、同様にひばりの、初めての晴れ舞台である。

亡八と賭けをしながら育てている禿がしくじらないか、或いは、直すべき点はないか見定めるのは、当然のことのようにも思われた。

しかしながらその目は、監視というには優しく、穏やかなものにひばりは思える。

名を聞くだけで不安になり、傍にいと温かくなる、本当の飼い主。とらいちの目の片隅にでもいられることが、なんだか嬉しい。

くちべらしで殺されず生きて、つか佐ととらいちに出会えたこと。この巡り会いが堪らなく幸運に思えて、ひばりは気付かれないように打ち震えた。

……けれど。

同時に、二人の仲が少し気になった。

女と男、男と女。恋慕の情を傾けて、時に身体を重ねる存在。幾ばくの思いと戯れる内に、先ほどの騒動も思い出す。

小島。矜持を抱き遊女として恥じぬ生き方をしてきた彼女が、操を立てて吉原のしきたりを踏み外す。愛染のなかへと堕ちてゆく。

秘める恋と秘めぬ恋。

人はどちらが、狂うのだろう。

第十五話「闇の上に立つ光」（後書き）

【オマケ】

こんにちは、「汗ばむ鳥籠」をお手にとって頂き、ありがとうございます。

ここまで読んで下さったお礼として、今後の後書きでは用語の解説などをチマチマしていきたいなと思います。

よろしければ、ご覧下さい。

【見返り柳】

吉原の出入り口には柳が植えられていたそうです。通称、見返り柳といわれていて、今でも少しだけ残っています。

客は去り際に、この柳の木を名残惜しんで見たそう。客の気持ちを歌った「きぬぎぬの 後ろ髪ひく柳かな 見返れば 意見か柳 顔をうち」という詩があります。

【吉原の男たち】

吉原にはもちろん、男も働いていました。番頭、妓夫、見世番、二階番など、遊郭には仕事が多岐にわたったようです。

彼らは吉原を離れ外で暮らすこともありましたが、しかし、吉原で働いていたことで見下され、仕事が無く、吉原に戻る者も多かったそうです。

第十六話「初花」

生ぬるい湯煙が肌につきまとして、産毛に小さな玉が浮く。

つか佐は、風呂でじつと丸まっていた。

無駄な肉のない少女のような脚を折り曲げ、両の手でそれを抱き、膝に顔を埋める。鬘を結わず油も引いてない髪は長く彼女の白い背中に張り付く。

後ろの木戸が開けられ、何者かが入ってきた。重苦しい気配がつか佐に近づき、遊女の可憐な肩を掴み、ぐっと引く張る。

拍子に尻をつき、四肢が投げ出され、無垢な姿が風呂場の床に晒された。

流線型を描くならかな体軀には線をひいたような眉と鼻筋には冷えた美麗さがある。

くつきりと主張する鎖骨、乳房は大きく膨らんでいて先は紅色に熟れ、少し窺える肋骨や骨盤は可愛らしく、臍の小さいくびれた腹、薄い茂みと流れる。

風呂に侵入した者は、つか佐に覆いかぶさる。蒸れながら絡み合うふたつの身体。

つか佐はふふふと妖しく微笑むと、上半を軽く起こし、自身に覆いかぶさる何者かの顎を、無邪気な唇で吸った。剃刀で剃って幾日か経った無精ひげを愛おしそうに舐めると、ちらりと目線を進める。

組み敷く者の肉体は焼けていて張りがあり、猛々しかった。

腕は太く熱を流す血脈が走り、均整の取れた胸板は、はちきれんばかりに逞しい。腹は六つに割れていた。

遊女の小さく貪欲な舌が唇からちろりと現れ、屈強な肉体を、上から下へとゆっくり這う。

顎から喉仏まで、耳の後ろから鎖骨の中央へと出た筋を、胸を、小さな乳首を舐め甘く噛み、腹へと、鍛えられた腹筋をねぶりゆく。

そして更なる秘所へと愛撫を加えようとしたところで、頭を撫でられ、止められた。

「もう良い、……ひばり」

心臓が飛び跳ねて、淫らな空想がぶっ飛んだ。

目の前にお富士がいて、心配そうにひばりの手を掴み、揺さぶっている。

「もう良いよ、ひばりちゃん。ちゃん。どうしてその襦の取ってだけさつきから拭いているの」

指摘されて、雑巾を持った手を襦から離れた。先ほどまで執拗に拭いていたらしい取っ手は顔が映りそうなくらい汚れが落ちていた。

「すまねえ。ちょっと、夢ば見とった！ えっと、あ、魑魅魍魎が出てくる夢！」

なんとか誤魔化そうとして声を上擦らせるひばりにお富士は、

「ひばりちゃん、真昼間に夢見るの？」

「……おら、そういう、病気なんだ、きつと」 無体な空気がにわかに二人を漂う。ひばりは困りかね、急に思い立ったように手を叩

いた。

「ああ、しし！ おししが出たくなった、行ってくるよ！」

訝しげな表情を保ったままのお富士を背に、ひばりはその場を後にする。廊下を渡りながらひばりは自分を叱責した。

掃除をしていて、なぜ白昼夢を見るのだろっ。しかもよりによって、あんなに卑猥なものを。

顔を真っ赤にさせながらひばりは手水へとひた走り、飛び入った。木戸を閉め、ずるずると腰をおろし、大騒ぎな心臓を落ち着かせるべく深く息を吸い、吐いた。

「どうして、あんなもの……」

姉女郎の懸想の深さに気付いたためか、それにしてもとんでもない白昼夢である。

齢十一、男女の秘め事に興味がないわけではないが、それにしてもあてがう組み合わせが悪かろう。

せめて見知らぬ美男美女で揃えば良いものを、何を血迷って、つか佐ととらいちなのか。

慙愧に襲われる。恥ずかしくて情けなくて、ひばりはついに泣きだしてしまった。

膝に顔を押し付けて涙を塞ごうとするのに、留め止めなく湧いてくる。なんとか止めたくて、腹に力をこめた。

すると。

「……あれ」

ふいに滲んだ違和感に、ひばりは立ち上がった。尿を少し漏らしてしまったような不快が股にある。

恐る恐る彼女は足元をめぐり上げると、隙間から手を忍び込ませた。指に、ぬるりとなにかがついて、尿ではないと知る。

何かと指先を見やって、仰天した。視界が反転する。あり得ぬ事態に目眩を覚え、その場でひばりは意識を失った。

次に目覚めると、ひばりは布団に寝かされていた。何が起こったのか整理し、次に誰の部屋かと目を動かすと、脇で三船が帳簿を観覧している。

「おや。気がついたかい」

外から三味線と子どもらの楽しげな声が聞こえる。

「三船おかあさん、もう昼見世時……？」

「寝ておきな。つか佐には言っておいたから」

穏やかな笑みを向けられ、ひばりは起き上がろうとする四肢の力を抜いた。と同時に、あのことが不安として忍び寄ってきて、腹をかき乱していく。

「……どうしよう、病気かもしれんす」

廁で彼女が自身の股間から拭ったものは、茶色い、唾液の混ざった泥のようなものであった。

あれは恐ろしい病の前兆かもしれない。

未知の恐怖から目をぎゅうつと瞑って肩をかき抱くと、ふいに冷たい感触が額を覆った。

三船だった。

「大丈夫、初花だよ」

「初花？」

「お馬のことさ。身体が、少しずつ女に変わってる証拠だよ。十一か、あんたの年を考えると、少し早いかもね」

花が落ちる。

年頃になると月に一度、血が出るようになることは、ひばりも知っていた。自分の身体が少しずつ変化していることは分かっていた。平坦な乳房は少しずつ膨らんでいて、触ると痛みを訴える。股も時折濡れるようになっていたし、毛も僅かながら生えてきている。

それでも初花は啓示のような驚きをひばりに与えていた。

女になるのだとは思ってはいたが、いざ女になるのだと思うとたまらなく心は荒立つ。

「そんな、おら……」

それ以上は言葉にならなかった。

声にしようとして、心の影がひばりの喉を絞めた。

そんなひばりを三船は優しい表情のまま撫でる。まるで、本当の母親が子をあやすように。

「ひばり、月厄の過ごし方を教えてやるから。良いかい、よくお聞き」

薄い賭け布団をきちんとかけてやってから、

「お馬っていうのは、鞍のように折った綿入りの布を股にあてがうからそういうんだよ。越中褌できちんと巻けばね、身体を動かすこ

とは平気だよ。

だけどね、綿入りは何度か取り替えなくちゃあならない。腹も痛くなる。

だから月厄になると、姉さん方は二日の暇をとるだろう。あれはそういうわけさ」

「……姉さん、御簾紙、使った」

「ああ、女は男とまぐわうと子どもが出来る。子の種を入れないようにね、勤めが終わったら、御簾紙に油引きの紙を巻いて中に入れておくんだよ。それで、水でよく洗うのさ」

「そうすれば、出来ない？」

「出来ないというわけではないね」

三船は少しだけ寂しげに眉を曲げると、開け放たれた格子窓の外を見やった。

思うところがあるのだろうか。

普段は仲の町大見世の楼主として勝気にいる三船が、田舎でよく話したお隣の老婦人のようにか弱く感ぜられる。

「出来たら、どうするの」

御船はほんの少し躊躇いがちに、

「……流すんだよ。」

中条流に来てもらってね、ほおずき鬼灯を入れるのさ。そうすると、毒が腹に回って、子どもは流れていく。

水銀を飲むこともあるね」

「それでも出来たら」

「大抵は生まれながらの病気持ちでね、長生きは出来ないのさ。健やかなのは見世で育てて使うこともあるけれど、外にやるのが殆どだね」

御船の説明に、ひばりの頭の中で、様々の歳の子が流れていった。彼らを抱くのは故郷にある大きな河だ。

奥州を伊達まで流れていく北上川。

その豊かで穏やかな流れに乗って、子どもたちは流れていく。彼らもまた、河童なのだろうか。

「仁平がいるだろう。あれはね、元々はそれなりに売っていた女郎の息子なんだよ。」

親は産んだときに死んで、情けもあつて見世で育てたんだ。

生まれつき目が悪くてね、今じゃあとんと目が見えてないんだよ」

「本当に？」

「そうさ。物の姿形がぼんやりと見えるくらいのもんだとよ。器用だから分らないだろう。」

けどね、殆どめしいているのは本当のことさ。だから不寝番なんだよ。五体の満足じゃない人間相手だとね、あつちは馬鹿にするもので、仲裁には良いんだよ。」

自分からね、不寝番になるって言ったんだよ」

格子窓の外で、ひぐらしが遠く鳴いていた。

空には海の青を奪ったような空があつて、でっぴりと肥えた入道雲が風に流されていく。

夏のおいが切なげに香る。

ふと、三船にも子どもがいるのだろうか、と思った。

心なしか、ひばりの額に添えられた三船の手は僅かにわなないて
いるようだ。これは、慈愛をもつ者の痺れではないだろうか。

そういえばひばりが見世にやってきた時、亡八の娘のものと着
物を与えられた。お富士の言うことが確かなら、三船には一人の娘
がいるはずなのだ。

しかしひばりには、それを訊ねることは出来なかった。自分の身
体の変化に対する戸惑いだけでなく、三船の思わぬ一面を垣間見て、
言葉を失っていた。

粹な三船、折檻のときの鬼のような三船、そして。

「三船おかあさんは、優しい」

「なんだい、突然」

「わっち、優しいおかあさんが、大好きだよ？」

それを聞いて、三船がまた、少しだけ寂しげに笑い、
「仁平と話をしていたろ。生き様が身体に出ると」

ひばりの額に置いていた手のひらを翳す。

その手の無名指は、奇妙に骨がずれている。その部分を、撫で。

「本当のこったろうね」

そしてそのまま、口をつぐんでしまった。

第十六話「初花」(後書き)

【背景補足】

今回は少し男性には苦手な小話。本編と同じく、女性の月経について、補足いたします。

昔、生理用品というものはありませんでした。

生理の時にどうするべきかという知恵は、女性と女性の口伝によりました。それは、月のものが忌み嫌われていたためです。これに加えて私は、恥ずかしいことという意識があつたのでは、と考えています。

ともあれ、そのようなわけで生理の時にどうしていたかという資料はあまりなく、かなりの想像を加えています。越中禪の下りは史実としてあるようですが、綿をいれた布という下りは祖母から聞いた話を広げたものです。

昔、山道を通っていたときに突然きてしまって、困窮していたところにお坊さんが綿を差し出してくれて助かったという経験が祖母にはあり、その話を一度だけ聞いたのです。

祖母はそれ以上語りませんで。

今はかなり開けつひろげですね。生理用品のCMなんて昔は考えられなかったのではないでしょうが。

コンビニでバイトをしていたときに生理用品を紙袋で包もうとして、必要ないとお客さんに言われたことがあります。

時代とともに意識は変わっていく。忌み嫌われ恥でもあつた月経への意識もどんどん変化している。

もしかしたら未来の人たちは、この時代の生理を描くの楽かもし

れません。

以上、とりとめのないですが補足とさせて下さい。
読んで頂き有難うございました。

第十七話「狂気」

季節の流れというものは、遅い遅いと感じるくせに、過ぎてみれば一日だけのことではなかったのかと惑うほど早い。

夏は少しずつを落ち着き、斜陽さえ温もりがなくなって、いつの間にもやら蟬の声も消えている。

ひぐらしだなんだの声色も鳴りをひそめてしまつと、今度は不穏な囁きがよく聞こえるようになっていた。

「小島、また払いをしぶっているらしいよ」

「ああ、禿どもなど腹を空かせて、他の姉女郎の顔色ばかり窺っているそうじゃないか」

「馴染みの大見世のご隠居と二人も縁切りで、そしたらなんだい、閑古鳥だろ。」

あれだけ売れに売れた小島太夫も、こうなると名折れだね。操なんてたてても、食べやしないのに」

大海屋を叩いたらあちらこちらから小島の話題が出てきそうな有様で、それが妙な陰気となって、廊下をいつも湿っぽくしているような気がする。

「お姉さん方、ここはお井戸じゃありません！」

廊下の真ん中で雑談に耽る奉公人どもを一言で押しやると、ひばりはずんずんとその場を後にした。

陰口というものはどうにも好かない。他人をそしるのはどんな瓦版より楽しからう。

しかしその楽しさはやがて嫌悪を周囲に植え付け、渦中の人物をこれ以上なく貶める。そういう陰気さが、嫌いだ。

同じ見世に腰を据えるものなら尚更だ。むしろ馴染みの少なくなった女郎の評判をたてて、少しでも苦境を掃おうとするのが仲間というものではないのか。

吉原では素見千人、客百人、間夫が十人、地色一人という。外には冷やかしが殆どで、馴染みを捕まえるというのは実に苦労を要するものだ。

遊女が一人で愛想良くしていて客が来るというのは少なく、大抵は世間様にとりざたされなければお話にならない。

この夏の花魁道中を想起する。

あの夜、小島はつか佐にとんでもない懇願をした。姉女郎が妹女郎に頭を下げる、それだけで大事であるのに、なんと道中をやらせてくれと言ったのだ。

きつぱりと断られた後の小島は、すぐに不義を詫びたもの、その佇まいは人のものと思えない寂寥と、そしてなにより狂気があった。年季がじわりじわりと増えていく絶望感、人の魂を蝕み、魍魎のようにしてしまうのだろうか。

なんとも悔しい気分になっていると、ふいに袖を引っ張られた。見やると、自分より四つ下の禿がいた。

「ひばりー、おいらに菓子あるー？」

「ひとつだったらあげようか。ひとつだけだったら、おかあさんに叱られなくて良いからね」

小島の、一番末の禿だ。道中の夜からどうにも気になってしまい、ついつい情から菓子分けてからというものの、こうして甘えてくるようになった。

ひばりは花魁の禿であり、たまに菓子を座敷で頂くが、その量は多いとはいえないものだ。

それでも、小島の禿の境遇を思うと菓子用の巾着は紐を緩ませる。

部屋に戻って饅頭をひとつ与えると、禿は目を星のように輝かせて饅頭を頬張った。

「今日は晩も飯、食わしてもらえそうかい」

「わからん」。

あんねえ、でも上の姉さんは食べさしてもらえるのよ」

「どうして。悪いことしたか」

「んーん、放爪するから」

放爪という言葉に、さっと血の気が引いた。

上等の遊女となると、口先で思うように客の心を操る。

それは口説であり、相手を落とすための術なのだ。落とさねば、馴染みにせねば、食っていかれない。

しかし

「拍子木までが嘘を言い」と、遊女を冷やかす話があるように、大抵の男は遊びだと信じない。

もし懸想をし、操をたてるならば、熊野神社の血判やら髪やらを文につけて相手を信用させる。

放爪とは、爪を剥ぎ送ること。

爪のない遊女など仕事にならぬ。それ故に、妹分の爪を剥ごうというのだ。

「なんて……」

それが手練手管であることは分かる。しかし、己の惚れた腫れたで禿を飢えさせ、更に苦痛を強いるとは何事だろう。

ひばりは暫く青ざめていたが、ぐつと腹に気合を込めて部屋を後にした。

上申しよう。自分には小島への強味がある。道中の夜の失態を、自分は知っているのだ。

気分のよい方法ではないが、そのことを仄めかせば、禿に架している行為をなんとか抑えることが出来るかもしれない。

ひばりは腹を決め、小島の部屋へと向かった。
が、その足を予期せぬ喧騒が止めた。

昨晚の雨の影響で靄がかかる裏庭で、奉公人が悶着している。視界が悪くて探りにくいが、布を被せた戸板を囲んで、いくつかの見知らぬ顔と見世番と対峙しているようだ。

「何事かいの」

飛び込んで、声をかけた。

「何事もないよ。こいつらが、美佐が死んだからと切見世から死体を担いできたんでえ」

覚えのある名前。美佐というのは、足抜けに失敗して切見世に流された遊女のものである。そしてなにより、三船に激しい折檻を受

けていた、あの名である。

戸板に被せられた布は人の大きさに膨らんでいる。様子进行と思ひ屈もつとして、しかし、嘔せ返るような臭氣に阻まれた。

酷い悪臭である。肉の腐つたような据えた匂いは重たく、瞬く間に肺を侵す。

ひばりは反射的に手で口を押さえ、吐き氣を飲み込んだ。

「足抜けの遊女なんぞ、そのまま浄閑寺に投げ込んで畜生道に落とすのが筋つてもんだらう。どうしてうちに持つてきたんでえ！」

見世番が食つて掛かると、切見世の奉公人らしき者達は口を揃えた。

「だからよ、小島つて女郎に頼まれたんだ。死んだらすぐに持つてこいと言われて」

「馬鹿やろう、どうしてこうして、うちの小島が女郎の死體を欲しがらつてえんだ」

埒のあかない押し問答。それもそのはず、両者には引けない理由がある。

あちらは、頼みごとを終わらせて金でも貰うつもりなのだらう。こちらはそれを受け入れるわけにはいかない。死體を貰うなど、大海屋の沽券に関わることだ。

騒ぎに気付いて、徐々に奉公人が集まつてきた。その中に、渦中の人物の影があつた。

小島はいつものように着飾り、靄の中で浮き立つようだった。しばらく何事かを見物人よろしく佇んでいたが、ふと戸板に氣がついて、猛烈な勢いで駆け寄り、縋り付いた。

「美佐だね、ああ、ああ……」

死臭など感じてさえいないように、小島は涙を浮かべて戸板に顔をこすり付けると、布を払った。美佐の死体は獣のそれを捨てるときと同様に、荒薦あらいしんで巻まかれている。

さめざめと泣きながらも小島は、荒薦を剥くと、形骸を晒してゆく。ひばりは目を逸らしたかったが、かつて大見世にいた姉さんであるという思いから堪え、視線を固定した。

現れたものに美佐の面影はない。がりがりに痩せていた。あの夜ふつくらとしていた弾力のある肌は粉をふくほど乾き、どす黒い。髪の色も艶はなく苦労の白が混じり、なにより、深く沈黙した面容はろくな死に方ではなかったのだと一目で分かるほど醜く歪んでいた。

穢れそのものとなった美佐を、それでも小島はいとおしげに見つめる。

ひばりはその姿に、小島と美佐は仲が良かったのだろうか、と思った。

美佐が畜生道に落とされる前に死に目が見たくて頼んだのか。

嘆き悲しむ小島。自分が感じているより、義理人情に厚い人なのかもしれない。

ひばりがそう思って胸を下ろした束の間。

突然、小島が胸元から何かを取り出した。小刀だ。続けざまに小島は、なんと美佐の小指に突き刺した。

小島の凶行に、最初に悲鳴をあげたのは、小島に付き添う禿であった。それを合図に周囲が痼癢を起こしたようにざわめいた。

そんな騒然さを気にも留めず、いや寧ろ世に己と骸しかないかのように、小島は小刀の刃を捻りこむ。一心不乱に、骨を断つために体重をかける。

やがて鈍い音が四散し、戸板からぼとりと小指が落ちた。

「やった、やった……」

肩で息をしながら小島は小指を摘むと、胸元から錢袋を取り出し、中身をばら撒いた。

啞然としていた切見世の奉公人たちが、錢の擦れる音に我へ返って群がる。

凶行を終えた遊女は、恍惚の笑みを卑しく含ませ、美佐を背にする。

鬼だ。霧の中に佇む、鬼。

小島の禿は皆、戦慄していた。互いの身体を寄せ合い、がたがたと震え、嗚咽を剥き出しにしている。彼女たちにとって、美佐の指切りは他人事ではないのだ。

このまま見過ごしては禿たちの身が危ない。

ひばりは小島を呼びとめようと手を伸ばした。

「小島！」

しかし、ひばりより一寸早く動いた人物がいた。大海屋女主人。三船は小島の真横に走り寄ると、身の振り迷わず

その腰に蹴りを入れた。

いきなりのこと、受身もとれぬ小島は壁に身を打ちつけ、くず折れる。小指が地面に転がり、小島は手を伸ばす。

その上に、三船は下駄を穿いた自身の足を振り下ろした。

「ぎゃあああああ！」

絶叫が耳を切り裂く。ひばりは反射的に三船に抱きついた。

「三船おかあさん、どうか、どうか落ち着かれて！」

しかし、どつしりとした風貌の大人の力に敵うはずもない。ひばりは一振りで払われて地面に尻をついた。

阿修羅のような顔、逆上した三船の怒りはおさまらない。身体を浮かせて小島の手のひらに立つと、その顔面に蹴りを入れた。三枚歯の下駄が整った小島の美貌に噛み付き、肉をえぐり、血反吐が舞う。

「お前は！ お前という奴は！ この大海屋を汚すとは何事だ！」

罵声と共に食い込む下駄。小島は抵抗するばかりか自身の身体を庇うことも出来ない。血と唾液が飛沫となってあたりを汚す。

「おかあさん、死んでしまう！」

ひばりが再び止めに入る。

「死ねば良い！ こんな下郎死んでしまえば良い！」

「殺してしまいます、殺してしまう！」

制止するひばりの頭を美佐の死に顔が流れていく。
たくさんの死に顔が。飢えた子どもらが。罹災と空腹の果てに子

を殺す親の顔が。

泣くに泣けぬ者たちの慟哭が。

次の瞬間、ひばりは三船の足に飛びついた。

激しい動きに抱きつき、振り落とされないよう全身を強ばらせる。足が引きずられ皮がめくれ、擦り傷から血が膨らみ出る。

しかしけして離さなかった。離すわけにはいかなかった。

しがみつかながらついに、ひばりは叫んだ。

「あんたは大事な人を亡くしたことがないのか！」

ありとある声が喉から絞り出された刹那、びくりと三船が身体を痙攣させた。

重苦しい静寂が世を潰す。騒々しさが瓦解する。

三船は、その足を、止めた。

「……もう、良い」

すとなんとかが抜けてしまったように三船は呟くと、優しくひばりの肩に手を置いた。

ひばりはゆっくりと腕を放す。がっちりと抱きついたために全身が痺れていた。

「おかあさん？」

ひばりの擦れた問いかけに、黙然と身を翻し、三船はその場を後にした。

第十八話「秋空」

小島は吉原の近くにある箕輪という場所の、保養所に移された。切見世に回されなかったのは三船の情けか、それとも何か目算があつてのことなのか。

ともあれ、枯れ草の舞う季節、大海屋は少しずつ平穩さを取り戻しつつあつた。

三船に止めに入つたことへお咎めは無かつた。そればかりか、読み書き算盤だけでなく芸事の習いの許可も下りるだろうと、仁平から聞いた。となると、禿でなく引つ込み禿ということになるのだろうか。

引つ込み禿は琴や三味線から舞の稽古までする。将来を約束されている。

「認められているのだろうか」

昼見世時、中庭の掃き掃除をしながら、言葉にする。

実感は湧かなかつた。引つ込みになったら新造になれる、ゆくゆくは遊女になる。女になつてみたいとは思ふ。だとしたら、花魁になつてみたいということ、だろうか。

帰趨きすうはいずこにありにけり。惑つても、日々は移ろいゆく。

「あれ、君は、めんこい」

さつと、見覚えのある姿が視界の端に映つた。

「……木下の若旦那」

「どうしたの、こんなところで」

「ただの掃除ざんす。若旦那こそ、まだ昼見世ではございませんが」
「仁平に用事で。君に会えるとは思わなかった」
「そいですか」

適当にあしらいながら、この男は変人だと、ひばりは呆氣にとられる。君だのめんこいだのと、まるでおぼこ娘を冷やかす女たらしではないか。

爽やかそんな優男なのに、どうしてか、昼見世の度につか佐を差し置いて自分で遊ぼうとする。ご隠居がつか佐を寵愛している間、やれ将棋を指そうとか、やれ歌留多をしようとか、誘ってくるのだ。楽しいには楽しいが、相手が違うのではいつも思う。

ひばりは田舎育ちのおぼこに見えるかも知れない。しかし、娘と呼べる年齢ではまだない、つか佐に比べれば未熟なごぼう童子だ。

「今度、引つ込み禿になるんだろう？」
「まだ先のことでありんしょう」

「ご謙遜を。ひばりがやっと引つ込みになると外では話題だよ。楽しみだな。いずれ、新造になって、見世に出て……」

どうしたことが、八尋の軽口が徐々に擦れていく。どうしたことかと、ひばりは首を傾げた。

「どうなさった、若旦那」
「ひばりが客を取るのは、すこし寂しいなって、思ったんだよ」
本当に変なことを言う男だ。

「若旦那も、お客さんでしょう」

「それもそうなんだが、きつと気軽に遊べなくなるのだろうな。きつと君は、花魁になる」

花魁。八尋が花魁などと口にするとは思っていなかったひばりは、少しばかり驚き、目を瞬いた。

「そんな大それたこと。わっちは田舎生まれのおばこで、禿になったのも遅れて十のこと。御戯れも程ほどになんせ」

「君は気付いていないの」

素っ頓狂な声をあげて、八尋はひばりに皿のような目を向けた。思わずたじろぐひばりに、

「将棋だなんだのでは十も二十も先のことを読むほど賢しいのに、自分のことは知りもしないんだね」

「何を」

「君が心配だ。つか佐に焦がれるばかりに、己を見失っていると、誰かの掘る穴にも気付かないよ」

八尋の真摯な瞳と嘘偽りの匂いのない口ぶりが、ひばりを動揺させる。不安にさせる。いつも飄々としている男が放つ警告は、存外にも重たかった。

「……御免。言いすぎた」

押し黙るひばりに罪悪を覚えたのか、八尋は急に顔を背けると、
「君はまだ十一だもんな、忘れて良い。ただ、覚えていてくれ。その、損は……ないと思う」

八尋のたどたどしい繕いにひばりは素直に頷いた。
恐ろしげな内容ではあるが、役にたつような気がする。大人がひ

ばりにこういった話を振るとき、そこには必ず意味があった。無意味な助言など、ひとつもないのだ。

「有難う」

「どういたしまして」

感謝と笑顔で互いの空気を解す。あっという間にさきほどの重苦しい空気は飛んでいき、いつものひばり、いつもの八尋に戻る。

それとほぼ同時刻、まるで時宜を見計らったように、風呂じまいの声が屋敷に響いた。奉公人がどやどやと廊下を渡り、部屋中に昼見世の準備を促す。

「今日のご隠居といらっしゃる？」

「いいや。また今度だ。次はもっと、良い話を持ってくるよ」

すっきりとした清秋の天空、背の高い蒼に薄く雲が千切れている。その下に八尋がいる。八尋は空に似ていると思う。爽快で、掴めなくて……。

けれどひばりは、口にはしなかった。そのまま心に仕舞い込み、八尋の背中を見送った。

第十九話「カルマの指」

その日は憂えているような空だった。どんよりと重たげな雨雲は今にも泣き出しそうで、ひばりは急いで物干し竿から衣を取り外していた。

「ひばり」

だから、その声をもう少しで聞き漏らすところであつた。呼ばれたような気がして振り返ると、三船が廊下から庭先の物干し場へと視線を落としていた。

「どうしたんです、三船おかあさん」

無意識に喉が強張る。先日夜の一件から三船と会っていなかったひばりは、お咎めがないものと思い込んでいたが、そうではないのだろうか。

身構えていると、

「話があるから、おいで」

「お話ですか？」

「そうだよ」

三船の生気のない物言いに、自然と力が抜ける。ひばりは布団を廊下へ上げ終わると、三船の部屋へとついていった。久しぶりの三船の部屋、キセルの匂いがひばりを軽く酔わせる。

まるで将棋でも指すように二人、座布団の上に対峙すると、三船がキセルに種をつめて、火をつけた。緩やかな紫煙と濃厚な煙草の香りが部屋にくゆる。

ひばりは煙など気にせず、ひたすら背骨を緊張させ、汗ばむ拳を握りこんだ。

一体、話とはなんなのか。やはり、自分が止めに入ったことが気に食わなかったのか。

冷や汗が体中から滲む。がちがちに固まりながらキセルで一息つける三船の動向を見やっていると、

「話だが」

ふいに三船が口を割った。

「三島が死んだ」

一瞬のうちに耳を疑い、ひばりは呼吸をするのを忘れた。三船が死んだ、しかも自殺だという。一体、どういうことなのか。三船が殺したのか。

「私を、酷い女だと、思うかね」

しかし、続く三船の言葉があまりにも寂漠としていて、責めやる感情が奪われる。

「自殺だった。梁に帯を巻いてね、首を吊ったんだよ」

「自殺……」

「養生に入ると、その間に必要な金は全部年季に回るんだよ。それに加えて、馴染みの男が江戸から消えたらしい。元々矜持の高い子だったからね、もう、生きるには辛すぎたんだろうよ」

私を酷い女と思うかい、と、三船は付け加えた。

普段の貫禄ある三船とは明らかに違う。あの夜、ひばりの制止に小島への怒りを失い、部屋へと帰っていった三島のまま。

そればかりか、力尽きたような三船は更に陰鬱と感ぜられる。まるで一日で十年も年老いてしまったかのように。

三島の折檻は異常だと思った、しかしながら小島の行動に非がなかったかと言えなければそうではない。

そればかりか、小島も鬼のようだった。操を立てて金回りに窮し、禿に苦を強い、最後には昔の朋輩である美佐の指を切り落としたのである。正気の沙汰ではない。

「そんなことはない、三船おかあさんが怒るのも、無理はありんせん」

応えたひばりに、

「小島がああなったのは、この大海屋にいたからだ。もし町の娘なら、ごく並みの恋慕をかけられただろうよ」

三島はキセルを火鉢に引っ掛けると、両の手を広げた。右の手の五本目、細く短い無名指が僅かに振れ、曲がっている。

「この間、お前は仁平と話していただろう。生き様が身体に出るとみてご覧、この指を。これはね、本当は、真っ直ぐだったんだよ。だけど曲がった。ろくな生き方をしてないからさ。女を困って、子どもを流して、しまいにや借金地獄に落とす酷い女なのさ。

仏さんも、見捨てちゃう」

少しばかり節の目立ち始めた手がわななないで、畳を小刻みに叩く。あまりにも儚い、まるで死の淵にたつ者の手のような、三船の手。

ひばりは反射的に、その右手を、幼い両手で包み込んだ。
そしてきつぱりと、言い切った。

「そんなことない、三船おかあさんは、わっちを看病したろう」

なにがそうさせたのか。突き上げる戸惑いがそうさせたのか。ただただひばりは、三船の手を握った。そうしなければ、三船が消えてなくなってしまうような気がした。

迷子にならないよう親の手を必死で掴む子どものように、ひばりはついには、腕ごと胸に抱き寄せる。

どくり、どくりと三船の脈が静かに鳴っている。
懸命に、すがりつく。

やがて、

「……娘がいたんだよ。ちょうど、お前くらいの」

三船が口を開いた。

「だけどね、地震で死んだ」

箆笥に萎えた背をもたせかけ、

「仄そくぶん聞いたことはあるだろう。四年前の大地震だよ」

ためらいがちに、呟く。

朴訥と己を振り返る。

「安政の、神無月。夜だった。夜見世の、半ばくらいだったろうか……」。

娘を寝かしつけようと思ってね、二人で横になっていた。予兆な
んざなかったね。

忽然と、床がなくなった」

胡乱な目がついと天を泳ぎ、

「ああ、地震だと思ってね、怖かった。上も下もなくって、真っ暗
闇さ。建物が潰れちまった。

娘は泣いてね、だけど身体が動かなくなつてね。声だけで慰めてい
たら、手を探つてね、無名指だけぎゅっと、握つてきた。
そうして二人して、助けを待った」

自身の無名指を、左手で握る。

「そのうち、悲鳴と焦げ臭い匂いがあった。

ああ、死ぬんだなと思って、でも、娘だけは死なせたくなくてね、
叫んでいたら、娘が熱いと泣き出した。火鉢の火が、そっちに回っ
たんだろう。

ぎゅっと指を掴んできてね。千切れるかというぐらいの力で握つ
て、あついあついと泣くんだよ。

そのうち煙も回ってきてね、声が小さくなってきてね。指を握る
手もゆるくなつてきて、……脈もとまった」

指を掴む左手が徐々に締まる。

「そしたら、仁平の声がして、急に身体が軽くなった。
びつくりしたよ。梁が下に落ちていた。私は箆笥に下敷きになっ
ていて、あの子の腕だけ梁の間からぬっと出た。

一面が火の海だね、奉公人のやつら、私だけ引きずっていくんだ
よ」

三船は慟哭を内に閉じ込めたように、おののく。

「どうしてと思う、どうしようもなかったとも思う。分からない。でも私あ、あの子の指から離れてしまった」

深く瞑る。

閉じすぎた瞼に堪えている悲壮に、それでも涙は滲み、吉原大見世大海屋主人はか細い川をつくる。

川は記憶から後悔を紡いでゆく。

「……次にあの子に会えたのは、夢中だった。

骨を拾おうとはしたんだけど、小さくて見つからなかった。夢の中でね、どんだん空に上っていつちまった」

なおも、無名指を捻る力は緩まず。

「きっと、私の所業にお怒りになって、仏さんがつれてつちまったんだ。

だってそうだろう、私には勿体無いくらいの、いい子だったんだよ。死んだ旦那の忘れ形見でね、そりゃあ、いい子だったんだ。

死ぬわきゃあ、なかったんだよ」

白み、拭れていく。

「どうしてだろう。こんな女の命を奪っていいけにいいのに。私を殺せばいいのに。

業というものなんだろう。水子ばかり見てきた、業なんだろう。か。

今じゃあ鬼と違わないさ。腹いせに遊女をいたぶるんだ、恐ろしい、だから指が戻らない。あの日から、どんだん曲がっていく。

汚い、汚い……」

ついに指は、くの字を描いて血を失い、歪んでいた。
しかし三船は自身の痛みなど分からぬように力を注ぎ続ける。ど
んどん、どんどん……。

ひばりは溜まらず、三船の両手を離そうと手を突き出した。
渾身の力をもって、三船の腕を掴み、制止する。手と手、指と指
の間に力を滑り込ませ、引き離すために顔を紅潮させる。

「私は汚いんだ、汚い、汚い！」
抵抗する三船の力は頑なだった。幼いひばりにはあまりにも強靱
であった。しかしここで、引き下がるわけにはいかなかった。意を
決して、ひばりは行動に出た。

「……おかあさん！」
無我夢中、遮二無二に無名指を摘むと、その指に甘噛みをした。

予想だにしていなかったのだろう。三船は刹那にひるみ、ひばり
はそれを見逃さず、右の無名指を腕ごと抱き寄せる。

「あがねえ！」
擦れた指に優しく頬を寄せ、きつと三船を睨む。いつの間にか、
ひばりは目に涙を浮かべていた。

「そんなことありやせん。おかあさん、あがねえ、それはあがねえ
よ……」
ひばりはしゃくりあげながら、三船を見つめた。

「ええですか、おかあさん。わっちの生まれ故郷では、畑ばかり耕

すもんで、みんな手が年寄りのようだったよ。

だけどね、それを汚いなど思ったことはないです。手が曲がっていて、なんなんですよ。それくらい、どうってことありやせん。

神さんが曲げたんではない」

頭を振ってから、更に頬を摺り寄せ、

「ええそうでしょう。確かに、おかあさんは沢山、赤ん坊を流したかもしれん。仏さんはお怒りかしんねえ。

だけど、吉原で生きる者の、それが生きるための術でしょう。それくらい、娘さんだって分かるべ。

子どもだって、そんぐれえのこと」

ひばりの心の中には、三船と三船の娘。そして村の姿があつた。

とても厳格な冬、苦界といつてもまだ足りぬ寂しい土地。そこに生まれ、生きる運命を背負った者たちの姿。生き様。

疲れきり老いた手、痛みに捻じ曲がつた指。

一体、なにを恥じることがあるだろう。

「この手は、一生懸命、生まれた土地で生きた手でしょう。吉原で生きてきた手でしょう。遊女や禿らを守ってきた手でしょう。娘さんの最後を看取った手でしょう。

この手の、この指の、何が汚いべか！

汚いことなど、あるものか！」

幼い一喝が部屋を打ち、沈みゆく。

「おかあさん、おらはこの手が好きだ。

だから寂しいこといわんでくなせえ。悲しいこといわんでくなせ

え。そんなこと言ったら、おらは、ひばりは……」

それ以上の叱咤は、高ぶった感情が堰きとめてしまった。悲しみは細く小さい肩を微動させ、華奢なうなじまで赤くする。

三船は打ちひしがれたように、顔の皺を解いた。

そうして、自分の腕に絡みつく幼い熱、ひばりに視線をこぼした。親に捨てられ売られてきた少女が、見世の主人のために泣いているという情景。いや、主人という概念を越えて心をぶつけている光景。

それらが三船の潤んだ目に、ゆつくりと、染み込んでゆく。

しばらくしてから三船は、右の無名指でついと眉間をなぞり、皺をほぐすようにひとしきり揉んだ。その動作は疲れているというよりも穏やかな気持ちから生まれたもののようで、どこか優美だ。

「ごめんよ。弱気になっていたみたいだよ」

眉間から、ひばりの髪へと指が移る。柔らかく芯のある黒髪を撫でる。

「なんでだろうね。ただ、小島が死んだことを伝えたかったのにね。悪い話をしたよ」

三船の様子にに応じて、ひばりは顔をあげた。

黒の眼に緑の眼に、長い睫毛が水に濡れた蝶となって瞬き、ぱちちりと開く。

「そんな。おかあさん、わっちは有難いよ。なんだかこうして二人きり、本当のおかあさんみたいだ。

おかあさんみたい。おうちで、二人で……」

安堵したのか、ひばりは笑みを漏らした。激情で固まっていた頬を緩め、花のように笑う。

そうしてひばりは、再び三船の手に頬を添えた。

第二十話「恋の無駄」

どんな人間も誰も知らぬ思いを秘めている。業を背負っている。従順と私淑がひばりに与えたものは人の生き様そのものなのかもしれない。

様々な命があり、道があり、故^{ゆえ}がある。それを知っていくたびにひばりは、自分がどうあれば良いのかを少しずつ学んでいるような気がした。

思想から五感、五感から肢体へと己の何かが変わっていくような予感が。

そんな日々の中、膨らんでいく疑問がひとつあった。とらいちのことだ。

彼もまた、業を背負っているのだろうか、ひばりは不意に考え込むようになっていた。

顔に刻まれた醜い傷はどうして生まれたのか、その傷の裏にはなにがあるのか。

しかし、訊ねられはしない。

とらいちには嫌われたくないという思いが、ひばりの心のどこかにあった。会い合うとその気持ちはより強くなるのだ。

「そうか、初花がきたか」
「うん」

いつもの通り、昼下がりの密談。

ひばりはとらいちと二人、部屋の中で座していた。

時折、とらいちにこうして日々の報告をする。とらいちはひばりから話を聞いて、助言を施し、必要ならば芸や遊び、立ち振る舞いを教える。

主従であり、師徒である。この関係は崩れることなく、もう二年が経とうとしている。

ひばりの話を聞き終わり、とらいちは床に置いていた肩袋を引き寄せ、胡坐のまま中を探った。お守りのようなものを取り出すと、ひばりの手の内に握らせる。

「これはなあに？」

「桃仁だ。月厄に効く。腹が痛んだら、飲め」

ひばりは袋をつつつきながら、

「とらいちはなんでも知ってるね」

「俺はあまり知らん。蘭医に頼まれて売り歩いているだけだ」

知悉な男の思いがけない勤めごとに、ひばりは刮目した。

「薬売りなの」

「言っていなかったか」

「なにも知らない」

とらいちのことは、なんにも知らない。改めてそのことを自覚して、ひばりは心が僅かに波を打つを感じた。

些細な動揺。とらいちは気に留めもしない。

胸が疼く。喉まで痛む。とらいちへの興味と畏怖がもつれあって膨張する。

けれど好奇心をむき出しにするわけにはいかなかった。近づくと、つるりと離れていくような気がする。

とても寡黙な男だ。愛想笑いの出来ない、遁世しきった、つれな
い人。

そのくせ繊細な表情をつくるとらいちには、無闇に触れてはいけないと、ひばりの直感が訴えている。

駄目だ、知ってはならない。自分はただ、知られる側であればいい。

ひばりは自分の突き上げる欲求を殺したくて、慌てて話題を探した。なにか、いつか疑問に思ったことを。

「……恋」
はたと閃く。

「秘める恋と、秘めぬ恋。どっちが、狂う？」

ひばりはとらいちの顔を横目に尋ねた。

雑談を舌で転がす風を装う。取り留めないものと無心して、あまりにもとらいちの琴線を弾かないものを選んでしまったように、ひばりは恥じた。これでは子ども同士のお喋りだ。

しかし、
「何の話だ」

面を食らったようなとらいちの顔。予想外にも無視されず、ひばりは言い淀んだ。

「その、えつと、操」

「操？」

「お客に操をたてたお姉さんがいて、その」

「小島か」

「そう」

大馬鹿をした。語るべき内容ではない。小島は自殺したのだ。自分のしくじりに、胸襟で臍を噛む。

ひばりはなんとか話を誤魔化そうとして、

「恋が羨ましいか」

挫かれた。

「……分らない」

「狂うとは？」

「それは、どっちが狂うんだろうって。つらいんだろうって」

口にしてみると不思議だ、重みを増す。

そこでひばりは途端に、それが単に結んだ与太ではないことに、隠れた妄執からもたらされた必然的な問いだと感づいた。

「でもきつと、秘める恋の方が楽。秘めぬ恋は、死んでしまうもの。殺されてしまうもの。だからきつと、秘めていた方が良い」

結果を口走る。さつとこの話題を終わらせてしまいたい。とても嫌な気分だ。不気味な廃墟に立ち入ってしまったような。

この話は、いけない。

「きつとそう、だから！」

「どちらの恋も、するな」

ずしりと、心臓がひしゃげた。

「いいか。恋などするもんじゃない。恋など、無意味だ」
とらいちの鋭利な目が、重たい声色が、石のように腹にたまる。
喉を詰める。

「お前は素直に、女になって男を騙していれば良い。本気にはなるな」

石に押されて、頭に血が上りゆく。

「どうして。そんな無体なことを、そんなことは」

「無駄だ」

「どうして」

ひばりは立ち上がり、堰を切ったように訴えた。

「なして無駄だと言うの？ とらいちは恋をしたことがないか。姉さんたちの気持ちかわからんか。ああも狂う思いをしたことがないからそんなこと言えるんだろう。姉さんたちを馬鹿にしないで……」

抑えてはいるものの、身体の内では憤怒が激しく燃え盛り、流動していた。溶岩が肉体を巡っているよう。烈火の熱が瘦躯を巡っている。

そんなひばりを、正反対に、無愛想な眼差しが捉えた。

「冷静になれ。ここはどこだ」

「吉原だ！」

「そう、吉原だ」

きつぱり言い放ち、とらいちは腰を上げた。長身が塀のように立

ちはだかり、幼い禿を威圧する。

負けじとひばりは拳を握り締めた。殴りかかってやってもいいという意地があつた。姉たちのためにも引き下がるわけにはいかないと、ひばりは腹を括った。

しかし、とらいちの切り返しはひばりの頑固な怒りを両断した。

「吉原では、恋は出来ない」

すっぱりと、切られる。有無も言わせぬ気迫に、ひばりは瞬く間にひるんだ。いや、当惑した。

とらいちの目に、声に、嘲りの色がひとつもない。漆黒の、硝子球のような瞳。

ひばりの中で遠い日が急速に蘇る。とらいちと一緒に湯を浴びたあの日。乱暴にひばりの身体を晒したあの日。

「鳥籠では報われない。鳥は卵を産めても、その中には何も無い」

淡々と語るとらいちの目に、光はない。泥のように、闇のように、深い海のような瞳。

救われない迷宮に閉ざされた者の色。

ひばりの、両親の色。

「冷静に考えてみるんだな。恋など、無駄だ」

ひばりを置き去りに、とらいちは襖を開けて外に出る。

「また来る。それまでに忘れておけ」
言い捨て、乱暴に襖が壁となる。

ひばりは一人、立ち尽くした。触れてはならないと肝に銘じていたはずなのにと、溺れる。

己の浅はかさに悔いて、悔いて、悔いて。

どうすれば良いか分からず、立ち尽くした。

第二十話「恋の無駄」（後書き）

書くべきか迷いましたが……、三船についてお話ししたいなと思ひまして、よろしければおつき合い下さい。

このエピソードは実体験から生まれました。自分は療養病院に実習生として行ったことがあります。その際に、ある患者様から「あなたの手は綺麗。私と違うね」と言われました。

自分は、「さんの手も綺麗」と答えました。すると患者様は「私の小指は曲がってる」と悲しげに指をさすりしました。

「私はひどかったから」生きざまが指に出るんだと。

その患者様は裕福な方で、九十を越えて元気で、だからそんな風に悔いている姿に驚きました。

自分は昔、絵ばかり描いていて、沢山筆を握ったせいで右薬指にタコができて爪が真っ直ぐ生えていません。

「私も曲がっているんだよ」と見せると、「あなたのは綺麗。曲がってる、私のは曲がってる」と言って呟き続けました。

その患者様にそんなことは無いと訴えても、患者様は指を見て何かを恥じているようでした。その方はご病気で耳や目がよくありません。記憶も保つことが難しい。だからずっと指を撫で続けてしまします。

患者様に恥じることはないと伝えたくて、けれど術が見つかりませんでした。

患者様が自分の小説を読むことはないと思いますが、あるとき伝えられなかったことを残したくて、物語に少し加えました。

でも、たった一言の難しさに、何万文字も使ってもまだ足りそう

にないと、最近思います。

第二十一話「お富士とひばり」

太陽が照らすと江戸は起きるが、吉原は太陽が落ちて漸く目を覚ます。

昼間から遊ぶ客などは切見世に行くのだ。大見世で昼間から遊ぶのはご隠居くらいのもので、大海屋の禿や遊女の多くにとって、昼見世時はひとときの休息となる。

しかしながら、引っ込み、つまり遊女の見習いとして上がったひばりは、お稽古ごとに勤しむのが日課となっていた。

今まであった習字や算盤とは違う、琴や三味線。芸事のための慣れない稽古を身体に叩き込み、くたくたになつて岐路につく。

毎日が、がむしゃらだ。

見世では、禿たちが蹴鞠でかいた汗を手ぬぐいで拭っていた。それを羨ましいとは思わない。お稽古をさせてもらうことは幸運なことなのだ。

ひばり、十一歳。見世に来て約一年、異例の扱いである。見世が期待しているのならば、三船が気をかけてくれるのならば、彼女は全力で応える。それが筋であり、生きる術だ。

にしては少々無理をしているようでもあるのは、とらいちとの一件のせいだった。

数日前にとらいちと悶着して以来、そのことを考えたくなくて、一心不乱になつてしまっている。許されたいという思いなのか、見返したいという思いなのか、漠としているけれど。

部屋へと戻ると、すれ違いざまにお富士が出て行くところだった。

「お富士ちゃん、ただいま」

「あ、ひばりちゃんっ、おかえり……」

ひばりが部屋に帰ってくると思っていなかったのか、お富士は目を丸くすると、そそくさと行ってしまった。

「お富士ちゃん？」

普段は明るいお富士の、なにか気まずいものを隠すような態度。僅かな引っ掛かりを覚えてみるも、それほど気にせず、ひばりは部屋に入って夜見世の準備を始めた。

朝からずつと、今日の夜見世はめりやす足袋を穿いていこうと考えていた。ひとつめのめりやす足袋に穴が開いてしまい、一月ほど前に新しいものを見世から貰ったのだ。つか佐から分けてもらった麝香じやこうの匂い袋に包んでいるので、素晴らしい薫香が染み付いている頃合い。

ひばりは頬を紅潮させながら、筆筭を引いた。

「あれ……」

しかし、あるはずのめりやす足袋がそこにはなかった。

目を疑って、筆筭の中を探る。たちまち、その動作に、強烈なはずの麝香の香りは消えてしまった。

めりやす足袋も、匂い袋もない。そんなはずはないのに。

下の段から上の段へ、次々と筆筭の中を確認するも、やはり足袋はない。

ひばりは慌てて部屋を探した。しかしめりやす足袋は見当たらない。

い。

しばし呆然として、次第に激しい焦燥が沸き立ってきた。

「どうしよう。どうしよう……」

めりやす足袋は、匂い袋は、ひばりにとって大切な宝物なのだ。それだけではない、大人たちがひばりに与えてくれたものをなくしてしまうのは、信用を失うのと同様である。

ひばりは再度、部屋の隅々まで確かめると、廊下へと飛び出した。通りかかる大人たちに聞いて回る。洗濯場と風呂と、あるはずはないと分かっている、一縷の可能性にかけて巡る。

庭先で遊びつかれて座り込む禿たちに尋ねるも、彼らは知らないらしく、首を左右に振った。

「ええ、ひばりちゃん、つか佐姉さんから貰いものをなくしたんすか」

事情を話すと、一人の禿が大げさに両の手をあげた。その軽い振る舞いが驚くほど胸を刺す。

「わつちら、知りやせん。めりやす足袋など、とんと見てないよ」

「おおかた麝香の匂いがきつくって、逃げちまったのでないの」

けらけらと笑われて、動揺しきっていたひばりは目が燃えるように熱を出すを感じた。

人前で泣くわけにはいかず、人目のない裏手へと回り、座りこむ。そこでぐっと、涙を堪えた。

泣くわけにはいかなかった。泣いて探し物が見つかるわけでもない。目を腫らして夜見世に出るわけにもいかない。

物がなくなるなど、それこそあるはずがないのだ。きっと誰かが持っていてに違いない。

誰か。

冷静に考えて、真っ先にお富士の顔が浮かんだ。筆筭を共有しているのはお富士だ。

彼女に訊いてみよう。もしかしたら間違って持っていたことはないだろうか。

ひばりは再び、遊郭を右往左往、お富士を探した。

手水の手前。ようやく目の端にお富士を捉え、呼びかけようと口を開く。が、躊躇がそれを踏み止めさせた。

お富士が廁の板戸から、怪しげに目を配っている。思わずひばりは物陰に隠れ、彼女の瞥見から逃れた。

何をしているのだろう。お富士の行動は不審だ。いつもは可憐で性根の良い朋輩が、打って変わって、まるで人の目を警戒する猫のようである。

お富士は人がいないことを確かめ終わると、ぴゅんと反対方向へと廊下を渡っていった。

鉢合わせしないで済み、なんとなしに胸を撫でる。しかしお富士の行動は疑惑をひばりに残した。

「さっきから、お富士ちゃん、変だ……」

一体、彼女は何をしていたんだろう。真相を知りたくて、ひばりは厠の戸板を引いて中へ足を踏み入れた。

ふいに、手水独特の臭気に混じって、甘い匂いが鼻腔を突いた。覚えのある、珍しい匂い……麝香だ。

怖気たつ嫌な予感が、ひばりの全身を引っかく。

床下に置かれた、便所の蓋。それをまじまじと見下ろしてから、ひばりは指先で摘んだ。人の糞尿を閉じ込めているそれを、一氣にずらす。

悪臭と共に、麝香が舞った。

間違いない。更に奥まで視線を落とし、そこに香り以上の証拠を認めて、ひばりは今度こそ、涙を止められなくなった。

激しい熱が瞬く間に彼女の肺を満たして、感情の堰が崩壊する。ひばりは手水を駆け足で出ると、廊下に蹲った。

一体誰が、誰がこんなこと。

考えてすぐ、誰かは検討がついた。彼女しかない。彼女しかない。彼女しかない。

「どうして、どうして、お富士ちゃん……」

ひばりは嗚咽に溺れながら、人目も憚らず号泣した。

第二十一話「お富士とひばり」（後書き）

作品を手にとっただき有り難うございます。春エロス参加のにあんまりエロスがなくてすみません……。もうすぐ後半なのでがんばりたいです。

えと、オマケ小話です。

【過酷な環境？】

激しい折檻と性病、少ない食事などによって遊女の平均寿命はとても低かったというのが通説ありますが、それは誤りでないかという考えもあるようです。

昼見世は殆ど暇であった、肉体的な仕事は殆どなかった、病気になると思者に見せてもらえたなど、それなりに余裕があったのではないかとされています。

また、遊女は死ぬと寺に投げ込まれてるくに供養されなかったという話も、足抜け（脱走）などの罪をした一部の遊女だけのものだけだったと分かりました。

吉原は最新のファッションなどを発信していました。上流階級の女性たちの中には遊女独特の言い回し、ありんす言葉を真似する人もいたそうです（ドラえもんのスネ夫ママがザマスって言うアレです）。

調べるうちに個人的な疑問として、過酷な環境に置かれ売春を主な仕事とする遊女たちに憧れる人がいたかどうかと思いました。

吉原での生活は意外にも過酷ではなかったのでは……。汗ばむ

鳥籠」は大見世であるという設定を用いて、出きるだけ吉原を明るく描くことにしました。

第二十二話「己を見る」

「どうしたんだい、その目は」

夜見世の鐘がなる六つ時、ひばりは腫らした目を晒し、つか佐を仰いでいた。泣きすぎて疲れきった頭と喉はすっかり使い物にならず、居然とするしかない。

「つか佐姉さん、あまり怒らんで。ひばりちゃんのめりやす足袋と匂い袋、厠に落とされたんじゃ」

お富士が間に入り、事の説明をする。

あの後、ひばりの号泣を聞きつけてお富士が飛んできた。そして厠から部屋へと、ひばりを慰め連れ添った。そのため、お富士は事の詳細をその場で知ったことになっている。

もし足袋と匂い袋を捨てたのがお富士だったら。考えるだけで眩暈を覚えることだが、あらゆる状況がその可能性を弾いている。

笑顔で、何も知らないふりをして、朋輩を傷つけるための罠を張っているのだとしたら。狂言だったとしたら。

これ以上のことはない。

「ひばりっ」

叱責されて、お富士へと横目にしていた視線を正面に戻す。たちまち、頬をびしゃりと叩かれた。一度で終わらず、二度、両の頬に痛みが爆ぜる。

眼前に立つは、威風にみちた姉女郎。

「よくお聞き、人から貰ったものはね、盗まれようとあなたの落ち度だよ。恨めしくお富士を睨むんじゃない」

睨んでいないと強く否定しようとして、出来なかった。ひばりの内に生じた疑心は、間違いなくお富士に向けられている。

「ちがう」

なんとか小さな声で呟くも、

「なにが違うんだい。あんたはね、甘いんだよ。自分の甘さを他人の恨みで誤魔化すんじゃない。頭を冷やしな！」

言い捨て、さっさと夜見世の準備を終えると、つか佐はお富士だけを連れて出ていってしまった。一人残され、ひばりは放心し、箆筥に寄りかかる。

こんな顔では夜見世になど出られない。

三面鏡でちらりと自身の顔を窺って、残されたことの悲しみを癒してみるも、どうにも止まらない。納得がいかない。

何故、つか佐に怒られなければならないのか。甘いとは、どういうことなのか。お稽古事に精を出しているのに、これ以上なにをすればいいのか。

悔しくて、そのうえ道理も分からず、ひたすら黒い感情に心臓を潰されながら、ひばりは涙を堪えた。これ以上、泣くわけにもいかない。冷静になるのだ。考える。考えるんだ。

つか佐は、夜見世を潰したことを咎めているのではなかった。ひばりの行いを叱咤していた。

「落ち度……」

一体、どこが甘いのか。心を落ち着け、身に降りかかったことを整理する。

もしお富士が自分を苛めているのなら、一体どうしてそんなことをしたのか。自分とお富士は、どう違う？

禿か引つ込みか。

お富士は引つ込み禿ではない。そのことで、考えうる理由。

「嫉妬……？」

信じられず、ひばりは口元を押さえた。

もしかしてお富士は自分に嫉妬して、あのような凶行に及んだのだろうか。

引つ込み禿は将来を約束されている。禿が全て引つ込みに上げれるということはまずない。大人たちの審美の、ほんの些細なことで弾かれてしまう狭き門だとは、知っている。

自分は一部の大人たちに応えようとするあまり、周囲がどう感じるか気にも留めていなかったのではないか。

慢心はしていないつもりでも、他人の目は己の心まで知ることとは出来ない。他人にとって、傲慢になっていると見えたらば、それが彼らにとってのひばりなのだ。嫉妬して、貶めたい気持ちに駆られるかもしれない。

頭を冷やしてみると、自分は確かに甘い。嫉妬をされるなど思ってもみなかったのだから。

周囲、嫉妬……。

状況に対し静かになることで、次第に、新たな疑問が湧いてきた。引つ込み禿になったこと以外に、お富士の自尊心を傷つけたり、迷惑をかけてしまうことはなかっただろうか。

お富士との日々を回想する。

出会ってから今日までのこと。何も知らない自分に、遊郭の間取りやしきたり、里言葉を教えてくれたこと。

一緒に金平糖を食べたこと。方言を使ってからかわれたこと。

「……本当に、お富士ちゃんだろうか」

唐突に、悟る。自分が知っているお富士という人間は、嫉妬したからといって厠に朋輩の物を捨てたりするだろうか。少し意地悪なところはあるけれど、そんな陰湿なことをする人間だろうか。

ひばりは思考をかちりかちりとまとめて、可能性の高いことから順序だてまとめ、更に自分の置かれている状況と、自分が他人に与えるだろう影響のことを考えた。

ひとつのことを考えるでは甘い。全体を見据えなければ。答えを決めるのではなく、あくまで見据えるのだ。

行動も言葉も煮詰めなければ失敗を引き起こす。

君が心配だ。つか佐に焦がれるばかりに、己を見失っている
と、誰かの掘る穴にも気付かないよ。

ふと、八尋の言葉が頭を過ぎる。あれは、人を知ること
で己を知れという意味だったのだろうか。

きつと、花魁になる。

大人たちは人や己を知ること、未来を知ろうとしているのだろうか。

ひばりはまだ、未来のことは分からない。経験が浅い。無知が道理を知らせない。

だが。

おら、自分のことがちよつと分かった気がする。

涙のせいでまだ身体はひくついている。大切なものを失った悲しみは五臓六腑を絶えず責める。それでも、心は穏やかだ。頭は、すっかり冷えた。

「これから、どうしたらいいだろう」

自分がすべき振る舞い。最悪の事態が二度と起こらないための、布石。

いつだったろうか。とらいちが慰めに言ってくれたことを思い出す。

苦しいことも辛いことも、賢くあれば、お前をそれほど襲わない。その術は、俺が教えてやる。

ひばりは目を伏せる。

とらいちがいたら。この状況に的確な助言をくれるだろうか。

しかし自分とはらいちの触れてはいけない部分に食って掛かったのだ。知らなかったとはいえ、思慮の浅い怒りとらいちはきつと傷ついたに決まっている。

「また来ると言っただけ、とらいちはいつ来るんだろう」

弱弱しい口ぶりで嘆息していると、後ろから物音がした。
誰だろうとぽんやり振り向いて、度肝を抜かれる。

「呼んだか」

そこにはいつもの、変わらぬ仏頂面。

第二十三話「逆転」

「怒ってないの？」

「何のことだ」

とらいちはむつつりとしたまま、視線を上にはずらすと、

「お前は気にするか」

ひばりは無言のまま首を振り、否定をの意をしるす。自分は気にしない。とらいちが忘れるならば。

「よろしい」

とらいちは部屋に入ると傍若無人に格子窓を引いた。窓に腰をひっかけ、ぞんざいに左足を右ひざに引っ掛ける。

「なんで見世に出てない」

「なんでここにいるの」

二人は同時に口火を切った。お互い、呆氣にとられる。すぐさま紛らわすように、とらいちは横を向いた。ひばりは見過ごさなかった。その目が、ほんの僅かに細く伸びたのを。

それだけのことが、なんて嬉しい。

「三船に金を払いに来た。お前の所作が酷いというんでね」

「嘘……！」

「嘘だ」

挨拶代わりにぺろりと欺き、

「引っ込みになったらいいな」

とらいちは視線を戻す。今度はひばりが顔を逸らす番だった。

自分を取り囲む状況は好ましくない。報告するには、少しばかり心苦しい内容だ。

「うん。だけどそのせいで、ちょっと困っていた」

「……話してみる」

ひばりは真剣にとらいちと向き合つと、深く呼吸をし、言葉を選び始めた。

翌朝の昼見世時。

お稽古から帰ってきたひばりは真っ直ぐ部屋に退いて、夜見世の準備を始めた。

「おかえり、ひばりちゃん」

背後からお富士に声をかけられ、正面を切つて、
「ただいま、お富士ちゃん」
にこやかに破顔すると、お富士は目をみはった。

「ふうん、すっかり元気になったね。お稽古は楽しかった？」
「楽しいばかりでありんせん」

いいか。まず、凜としている。そして朗らかであれ。弱みなど、堂々とすれば相手の目から隠れてしまふ。

とらいちの口添えを反芻し、ひばりは背筋を正す。

「お富士ちゃん、夜見世に着てくもの準備しやした。七つ時だし、お召しあがりはどうしなす」
「うん。いきやしょうか」

二人して、部屋を出て食事所へと足を進める。夕餉は夜見世の時間前に禿から遊女まで一緒くたに取る。そうして、夜を過ごすのだ。

「今日は昼見世に続いて厚谷の若旦那がいらっしやるって」
「つてえと、今夜は派手じゃ」

たわいもない話を交わしつつ廊下を渡っていると、はっとお富士が歩みを止めた。どうしたのと訊ねようとして、ひばりは唇を結ぶ。

ひそひそと、廊下をじゃれる囁き。その中に含まれる名に、ひばりは耳をそばだてた。

「……ひばりどんは昨日泣いとったらしい」

「ざまあない」

「未熟なくせに、引っ込みだと好い気になるからじゃ」

廊下を曲がった先にいるだろう。声色で誰のものは当てられる。小島の禿たちだ。三人が集まり、あしざまに言っている。

今は別々の遊女たちの下にいる彼らどうしてと、にわか信じがたい思いに駆られ、一方で、納得する。

小島の振る舞いによって、彼らは引っ込みの道から遠ざかった。その当てつけに、ひばりをあげつらっているのだろう。

下らない、なんて下らない。いくら陰口を叩いたとして、彼らに得はない。一時的な優越感を満たすだけで、その行為は彼らを高めはしない。引っ込みにしてはくれない。

空しくなつて、同時に、ひばりを怒りが襲う。しかしひばりはそれに耐えるべく数をかぞえた。感情を無闇に発露させるのは危険だと知ったから。

ひい、ふう、みい。そして顔を高くあげ、周囲を見渡す。障子に、庭に、池に。気持ちを落ち着かせる術はとらいちから学んでいた。

大丈夫。……そう、ひばりが平静を取り戻すも。

「あんたたちでしょう!」

唐突に飛び出した影。驚くことに、お富士であつた。彼女はさつと廊下を曲がると、庭を横切り、蜂の巣を叩いたように逃げる禿たちの前に立ちふさがつた。

「ひばりちゃんの大切なもの廁に落として! あんたたちも落つことしてやる!」

はんなりとした振る舞いが常行のお富士、その豹変にしばし啞然とし、

「おふ、お富士ちゃんっ」
ひばりも闖入する。

慌てたのは禿たちだつた。

まさかの中傷的が後ろから攻めてきたのだ。彼らはひとつに寄り添うと、悲鳴をあげ、団子虫のようにその場に蹲つた。

「参つたか! うふふふ、あんたたち三人とも、大便まみれの小便まみれよ! わつちらの目から逃れると思うな!」

大手を広げるお富士にまみえ、ひばりは再びとらいちの言葉を聞いた。

ひばり、いいか。青天の霹靂など、どこにもない。過去も未来も今も、全てが繋がっている。

もしかして、お富士は。

「お富士ちゃん！」

身体が弾む。ひばりはお富士へと首を左右に振った。

「堪忍です。この子らをせめんで」

「何を言うの、ひばりちゃん。懲らしめてやるう」

「わっちは、どうってことありやせん。へいちゃらです。未熟なんは、本当。」

だから毎日、てんてこ舞い踊ってるんじや。本当のことを話して、懲らしめるはないでしょう。

もしお富士ちゃんの気が良いのなら、ねえ……」

自分には味方がいる。その喜びが、出来ぬかもしれないと迷っていた最後の助言の扉を開く。

出る釘は打たれる。だがな、出すぎた杭はなかなか打たれん。いいか、全てのことを考えるんだ。大きくあるんだ。

ひばりは怯える禿たちに近づくと、膝を折って、立ち上がるようにうながした。大切な術を忘れずに。

笑え。

許し、受け入れる。爛漫に微笑む。
それが術、身を守る賢しさ。

朗々と許して回れ。それが
“あしらい”だ。

第二十三話「逆転」（後書き）

いつも作品を読んで下さりありがとうございます。

春エロス2008企画では投票や一言感想を下さる方までいらっしやり、とても励みになっております。心からの感謝を。

一言感想については企画サイト管理人様に確認をとりまして、後日返信を考えています。

次の更新についてですが、少々ミスを発見致しまして、次話は来週とさせて頂きます。ご了承下さいませ。

それでは、失礼します。よろしければまた、次話にて……。

第二十四話「いぢわるな仲直り」

薄明かりの中で布団を引き終わって、ひばりは格子窓に手をかけた。

客は殆どいなくなり、遊女たちも僅かな睡眠を楽しむ時。吉原はひっそりと静まり返っており、夜警を勤める鉄棒引きの鉄輪の音だけ、じゃらじゃらと辻から響いてくる。

「ひばりちゃん」

お富士は行灯の傍であぶらさしを片手にしている。

「油、さす？」

「ううん。もうわっちは寝るよ」

「じゃあ、ええね」

油皿に蓋をして火を消すと、お富士は布団の中に身体を滑り込ませた。

ひばりも格子窓をしっかりと閉じると、横に揃えた布団へと横たわる。

暗がりに目が慣れて、少しずつ闇が輪郭を持つ。部屋の隙間から漏れる外の光が帯を作り、その中に埃が泳ぐ。光の帯はお富士の背中に接して、柔らかな影を作っていた。

「お富士ちゃん」

「ん？」

「夕餉のこと」

するりとお富士の身体が寝返りをつつて、面する。

「お富士ちゃん、もしかしてずっと」
「分かったの」

お富士が照れくさそうに舌を出す。

「ひばりちゃんは心配させたくなかったんだけどな。知らぬが仏と言うでしょう」

「いつから、どうして？」

「昼間と、おーんなじ」

細い腕を宙に突き出して、お富士は両の手の五指を広げた。それが光の帯を弄んで、爪が鏡のように輝く。

「少し前からかな、ひばりちゃんの悪口を言っている禿がいて、気になって。ひばりちゃんの大事なものがなくなった日、わっち、箆笥を整理していたから……」

「先に気付いて、探してくれていたの？」

こくりと首肯する様を見て、やはり、とひばりは思った。お富士はけして自分を貶めようと画策などしていない。むしろ知らずに、守ろうとしていたのだ。

「探して、知られる前に元に戻そうと思って」

しかし、それは叶わなかった。何故なら廁の底に落ちていたから。

「お富士ちゃん」

「なあに」

「謝らなければならないことがある」

お富士は分かっているのだらう、光に翳していた手を布団の中に

引っ込めて、布団の中から布団の中へ、ひばりの手に触れてきた。ひばりはそれに応え、指を絡ませる。

「わっち、お富士ちゃんのこと、疑っていた。お富士ちゃんがやったんじゃないかって……ごめんなさい」

「そっかあ」

少しは勘付いてはいただろう。それでも、寂しそうにお富士は眉を下げた。

考え込むように一度だけ目を伏せて……、ぱつと開く。いつもどおり、ちよつとした悪童の表情。

「じゃ、仕返しして」

「えっ」

「大丈夫、ちよつとだけ。ね？」

朋輩に疑われることは悲しい。お富士の気持ちに納まりがつくのなら、ひばりは緊張する気持ちを抑え、相づちした。

「目を瞑って」

何をするつもりだろう。でこを弾くのだろうか。

お富士の手に頬を包まれる。ぎゅつと顔に力を入れる。

その瞬間は、そつとやってきた。

唇に何かが押し付けられ、その意外な柔らかさに身体が弛緩する。目を僅かに開くと、お富士の顔が密着していた。

口付け、だ。

頭がすっかり混乱しきってしまつて、再び目を閉じる。身体をぐるぐると戸惑いが駆け巡る。

お富士は軽い口付けから、更に舌でひばりの強張る唇をなぞり、割って入り込む。

角度を変えて、ゆつくりと深くひばりはお富士が入り込んでくるのを感じた。自分でもそれほど舐めない部分を、お富士の舌の先端が刺激して、くすぐりたい。

思わず舌を引っ込めて、逃さぬようにと絡められる。追い詰められ、翻弄される。

次第に、えも言われぬ心地よい熱が自分の中を弄っていくのを、ひばりは感じた。

胸元、脇の下、太腿の太腿の間、足の裏側。身体の内側を火が炙っていく。

身体がおかしい。

ひばりが今までにない感覚に全身を縮めたとき、お富士の口付けが終わった。舌が離れ、唇が離れ、冷たい外気に晒される。

「お富士ちゃん……なんでえ？」

あまりのことに涙目、耳まで真っ赤にするひばりに、お富士は悪戯をやり終えた悪童そのものの笑みを返す。

「ふふっ、ひばりちゃんの初めて、頂いてしまった。でこぴんなんかより、参ったでしょう」

「お富士ちゃんのいぢわる……」

してやつたりといった表情のまま舌を出して、お富士はぴょんと背中を見せる。

ひばりは恨めしさのあまり、お富士をぼこぼこ叩いた。

「お富士ちゃん、いぢわる。いぢわるいぢわる」

「あー、もう、はいはい」

ぱつと布団を蹴り上げて、お富士は再び直ると、ひばりの布団に侵入し、そのままひばりの顔を自分の胸に押し付けた。

「よしよし、お姉ちゃんが悪かった」

「もつとむごい〜」

年齢など殆ど違うのに、すっかり子ども扱いされて、ひばりはうな垂れた。こんな風に子鬼の角が生えたお富士には、敵わない。

「ねえ、ひばりちゃん」

お富士の唇が頭为天辺に触れる。

「もし何か困ったことがあったら、わっちに言って。わっちは、ひばりちゃんの味方なんだから。ええ？」

少しばかり膨らんだお富士の胸に顔を沈めたまま、ひばりは仰ぐ。

「うん」

「わっちだけでないよ。」

仁平、つか佐姉さん、三船おかあさん、きつとひばりちゃんが困ったとき、手助けしてくれる。

勿論、ちゃんと自分で解決することも、大事だ」

お富士の優しい慰めに、ひばりは嬉しさと同時に不安を覚えた。

自分のような田舎者にそこまでの道理など皆にはない。

そればかりか、ひばりの考えがあたっているならば、お富士は自分を良くは思っていないはず。

「どうして。どうして、そこまでしてくれるの。わっちが憎くない？ その……、お富士ちゃんより先に引っ込みになってしまつて」

直接的すぎる質問であつたが、聞かねばならぬと思つた。自然と、眉が曇る。

しかしお富士は、

「ひばりちゃんが、好きだからよ」

傷ついた様子ひとつなく、ひばりの眉根に指を置いた。

「引っ込みつてのは、十三かそこらになるもんじゃ。わっちは、この冬が明けてから」

「そうなの。どうしてわっちが先に引っ込みになつたんだろう」

「そりゃあ、吉原の生まれじゃあないからよ。そういう子は、早いほうがええの。安心した？」

なるほど。自分の勘違いだったのだ。変わりゆく環境に順応しすぎて、物事の全てに盲目していたのだろうか。なににせよ、疑問が解れて、ひばりは深く安堵する。

お富士は穏やかに身体力を抜くひばりに、続けた。

「でもね。もしわっちが引っ込みになれなくても、ひばりちゃんにいぢわるなんかしないよ」

「え？」

「引っ込みでないことがわっちの仕事ならば、それを受け入れる。遊女か芸舞妓か女中か検討もつかんけど、与えられたことを尽くすだけのこと。」

それがわっちの生き方なの。どうして大好きなひばりちゃんを恨むことができるというの」

深く、たおやかな厚志。お富士がそんなにも清く潔く物事を考えていたことに、ひばりは言葉を失った。

感銘がひばりの頬を、目頭を熱くさせる。

「ひばりちゃん。いつまでもわっちらは、朋輩じゃ」

言い切る、お富士。ひばりは涙を堪えて、

「……うん」

はつきりと答えた。

「じゃあ、おやすみしようか」

「うん、おやすみなさい……」

お富士の肩を軽く掴んで、胸から距離をとる。

自身の布団を正すお富士。ひばりはその様子を見やって、

「寒いから、お布団いっしょでいい？」

ぽつんと呟いた。

姉のように優しくされて、少し甘えたい心が生まれてしまったらしい。幼稚な媚態に、呆れたようにお富士は息をつくと、

「仕方ないなあ」

今度は悪童というより、本当の姉のように白い歯をこぼして、ひばりの布団へと潜り込んだ。

第二十四話「いぢわるな仲直り」（後書き）

作品を手にとっただき有難うございます。失礼ながら、オマケではなく今回はメッセの返信とさせていただきます。

四月五日にメッセを下さったvodafoneの方へ

メッセ有難うございます。サブアドの調子が悪くてどうしても返信出来ませんでした、すみません！

でも、メッセいただいたことが嬉しくて嬉しくて何度も拝読しました。お言葉励みに無理をせず、完結まで頑張りますね！

以上でお返事とさせて頂き下さい。読んでいただけると良いですが……。

こんな長い話に付き合っただけでとても有難いの、メッセ、評価、企画サイトへの投票、一言感想を下さり、本当に嬉しく感じています。

実をいうと、自分は人に楽しんでもらうために話作りを始めました。小学生のときに学級新聞や友達に見せるべく四コマ漫画を描いたのがキツカケだと思っています。

自分のためだけに書くのは昔から苦手です。だからメッセなどで励ましを頂くと、そのまま活力となります。よし頑張るぞって思います。

企画を最後までやり遂げるという気持ちだけでは、もしかしたら作品にここまで真剣になれたらうかと思っています。励ましのひとつひとつが小説の一文一文になっているのでは、と。感謝しても感謝したりないと思います。

恩返しは巧く出来ませんが、小説を少しでも楽しんでいただけ
よう頑張りたいと思います。

ありがとうございます。

頑張ります！

第二十五話「ふたつの“とら”」…1861年春

ああ、もう日が落ちてしまった。

お稽古の帰り道。ひばりは待合の辻から、どつぷりと夜に浸かってしまった吉原を眺めながら、下駄で闊歩していた。

地面は昨日降った雨のせいでぬかるんでいる。

年が明けて一月、二月。もう啓蟄だというのに、名残惜しんだのか牡丹雪が舞った。

しかしそれはもう、最後の雪だろう。春分が来て、昼間だって長くなる。こうして暗い岐路につくのも後どれほどか。

もう少しで夜見世が始まるとあって、見世先にある部屋、格子で囲まれたその座敷に、遊女たちが座っていた。

吉原中央の辻、見世の入り口には惣籬そうまがきが並ぶ。これは非常に細かい格子で、籬が細かいほど、見世としての質が高いことを差しているが、惣籬は最上級を現している。

辻から見れば、まるで女の檻。見物人たちはこうして女たちを選別してゆくのだ。

遊女たちはまったくといってよいほど、動かない。

たまに冷やかす客がきて、いくつか戯言を交わすが、それ以外は正座して、ずっと辻を行く人々を見据えている。

吉原の女は、美女中の美女。目の肥えた女衞たちが選んできた綺

麗どころである。それ故にどこか人間臭さが抜けていて、どこぞの名匠が手がけた人形のようにもある。

凝視していると魂が抜かれそうだ。そのためだろうか、見物人はいくらか遠巻きだ。

少しばかり足をとめて辻の様子を眺めていると、後ろに気配を感じた。ゆつくりと振り返ると、馴染みの人物がひばりに近寄ってくるところだった。

木下八尋。大棚、両替屋の若旦那だ。

「どうしやした、こんなところで。見世はあちらでござんす」
「いや、君を見つけたから」

駆け足で来たのか、白い息を荒く吐き出しながら八尋は告げた。
この男は、妙にひばりを気に入っているらしく、こうしてよく声をかけてくる。嬉しいが、変人だとひばりは思う。

自分はただの引つ込み禿だ。格子の中で佇む女たちとは格が下がる。この男はもしかしたら、童子に対する“け”があるのかもしれない。

じいつと訝しげな瞳を投げやっていると、八尋は照れくさそうに頭を掻いた。

「今日はちゃんと銭を落としていくよ」

ひばりは心臓に寂しい針がちくんと刺すのを感じて、踵を返す。
「銭を落としてほしくて見たんじゃありません。ただ、その、まだ

……」

いつだったか、八尋が秋空の下で語ったことが脳裡に浮かんた。自分を知らないのかという言葉。あのことで、自分の立ち位置を考える術を学ぶことが出来た。

しかし、

「わっちは、自分の価値を知りんせん。だから、若旦那がわっちに声をかけるのが、分からんのじゃ」

「変に思ukai」

訊ねられ、肩越しに視線をやる。

「若旦那は、子どもが好き？」

「え」

八尋は狐に抓まれたような顔で一寸かたまると、

「それは、……参ったなあ」

狼狽しきったのか、今度は胸を掻いた。

「私は、ただその……、君と話していると面白いんだ。子どもがとか、誰がというもんじゃないんだよ」

何度か筆って、胸元が少し赤くなる。だいぶ困らせてしまったらしい。

根はさっぱりとした、素直な人だとはなんとなく分かっている。こういった切り替えしをすればどう反応するかも、分かっていた。

わっち、少しお富士ちゃんに似てきたかも。

自分の行いに少々照れて、ひばりはくると向き直った。

「お話はどうしんす」

「お話？」

「そ、お話。良いお話を持ってくると、ゆったでしょう」

八尋の表情が瞬く間に明るくなる。

素直というか、単純というか。ひばりはその少年のような心に、瑞々しい喜びを感じた。嫌いというわけでは、けしてないのだ。

「そうだなあ、あ、八百善にある田川屋の膳が旨いんだ。あれはねえ、江戸の台屋では一、二を争うだろう。いつか君と食べたい」

「何をお言いなんす。田川屋のお膳は一緒に召し上がったでしょうに。お座敷に出てくるお料理はたまに、田川屋よ」

「そう……」

ふいに、八尋を可愛いと思う。

ひばりに指摘されて残念そうに眉を下げる彼は、とても真摯だ。こんな田舎生まれの引つ込み禿のために、気を使って話題を探す。なんだか嬉しくて、可笑しくて、ひばりは口元を押さえた。

すると八尋は、欠伸でもされていると勘違いをしたのか、うんと短く唸ると、

「いやね、本当の良い話はまだ調べている途中なんだ……、その、河童について調べている」

意外な話を切り出した。

「河童？」

「そう。君の里の河童は、赤いらしい。何故だかはまだ分からないのだけど」

八尋が良い話といていたのは、どうやら河童のことらしい。河童について調べて、里の話題で盛り上がるという魂胆だったのだろう。

ひばりを思った上での優しさだ、しかし。

河童の意味を知るものにとって、それは残酷な話題だった。ひばりの心臓は雪崩れこんだ冷たさに覆われ、顔は悲壮の色に染まった。

「どうしたの？」

瞬く間に意気消沈してしまったひばりに、八尋が問いかける。

「河童は」

仮面の口ぶりで、

「河童は、水子のことでありんす。子どもを殺して、川に捨てること」

ひばりは続ける。

「八尋さん、もう調べねえで。わっちの故郷が、嫌いになってしまっ

どこまでも残酷な冬、恵みのない土地、短すぎる夏。過酷な環境が是とする大人たちの行為。流れていつてしまった同胞たち。流されてしまった自分。

その全てが河童だ。赤いのは燃えるような血、生きている証。故郷では許されない色。

故郷を恨んではない、けして。仕方なかったこと。

そればかりか、あの厳しい場所で、家族や村人たちが健康であるだろうかと思う。

離れてしまった今、冷酷なのに美しく、とても懐かしく、胸を揺さぶる場所。

夢想し、いつの間にかひばりの表情は強張った。驚いたのは八尋である。

「ごめん！」

ひばりの眼前で手を合わせて、八尋は頭を下げた。

「ちゃんと調べるべきだった」

慚悔する八尋にひばりは首を左右に振る。

「そんな。わつちがあのととき、河童なんて言うから。若旦那、顔をあげてくんさい」

ひばりはかじかむ手を擦り合わせてから八尋の手首をとって、さつと開くと、その間から顔を覗かせた。

「ね、見世にいきやしょう。歌留多でもなんでも、お相手しんす」

手格子の中で、ひばりは微笑む。

寒さに震えながらも血色の良い、秀麗な童顔。長い睫毛のその下に、瑠璃と黒曜石の瞳。

行灯の光が彼女を照らし、髪が薄茶色に染まり、蟲惑的に輝く。

吉原にも稀の、傾城の影を持つ生粋の笑み。人の心に吸い付く、哀婉がそこにはあった。

あしらい　、　ひばりが教わった、生きる術。

八尋はひばりのたったひとつの動作に、硬直した。ひばりのあしらいはそれほどまでに神がかったいた。

はたからは、客と禿の愛くるしいじゃれあい。そこに一種の静かな制圧があることに気付く者はいない。

いや、一人だけ。

少しばかり離れたところで、一人の男が二人を啞然と見詰めていた。

歳は五十を過ぎか。小脇に丁稚を数人置いて、男は小走りに二人へと歩み寄る。

ひばりと八尋が同時に、男の気配を察して頭をもたげた。

間髪いれず、男は叫ぶ。

懸命に足を震わせて。ひばりの心を奪い去るあの名前を。

「みとら……！」

立派な身なりをした男がそう叫んだとき、ひばりの身体を激しい熱が貫いた。

み“とら”。

見知らぬ男が愕然とした様子でとらの名を叫んで立ち尽くしてい

る。その意図することが見当つかず、ひばりは反射的に周囲を見渡した。しかしそこには“とら”いちの姿はない。

「……西村屋の旦那。西村屋の旦那ではないですか」

八尋が呆けた声を出した。知り合いだったらしい。

男は八尋とひばりを交互に見やってから、

「ああ、木下のところの」

力をふいに抜いて、でこを擦った。

「すまん、人違いをした。その禿は？」

「ひばりといえます。大海屋の引っ込みですよ。はて、人違いですか。みとらという禿をお探しで？」

「いいや、禿ではないんだ。そうだな、こんなに小さいわけがないんだ」

八尋の問いかけに男は口を閉ざし、視線を地面へと逸らす。

「大海屋か。わしの馴染みは菊乃屋だね。いや、ご迷惑をおかけした」

愛想よく軽い会釈をすると、男はさっさと引き返し、丁稚のもとへと戻っていく。

その背を見送りながら、ひばりはどくりどくりと跳ねる心臓に手を置いていた。心音は激しく、耳の裏まで震わす。

あの男は何者なのか。

自分を見て、とらの名を言った。もしかして、とらいちのことを知っているんだろうか。

自分が知ることの出来ない、とらいちの本当を。

「旦那様！」

高鳴る思いに悶着しきつて、ひばりは呼びかけた。男が勢いよく振り返る。

「みとらを知っているのかね」

その眼光は粘つく、恐ろしげであった。まるで飢えた獣のようである。或いは、食物を前にした男餓鬼のようである。

ひばりは唾液を飲み込んで、
「いいえ、……よろしければ吉原の者にお尋ねしんす」

一歩引いた。

その判断は正しかったか、否か。男は放心したように視線を泳がせてから、ひばりに向き直り、口を開いた。

「みとらは、男児でな、今ならば二十半ば……、わしの那智だ」
なち

瞠若する。

頭の中からつま先まで、男の発言を疑った。

血の気が引いていつて、氷のように冷たくなる。

那智とは竜陽君。竜陽君とは、つまり。

「旦那は男色を嗜んだことがありでしたか」

「もう十年も前の話だよ。湯島にある茶屋からあげたんだがな、どこかへ行ってしまった」

男は遠く目をやってから、はにかむと、

「ひばりとやら、気にしないでくれ。木下の若旦那も。下らぬ未練だ。では、失礼するよ」

再び会釈して、大門の奥へと去っていった。

第二十五話「ふたつの“とら”」……1861年春（後書き）

【吉原は観光地？】

ただ通り過ぎる人が千、お客様になる人が百、愛人が十、本当に愛してしまった人が一。吉原にはそんな言葉が残されていると物語でも語りましたが、吉原へ見物に來たり冷やかに來たりする人は少なくありませんでした。

遊郭の入り口では、吉原遊女たちを格子の外から窺うことが出来て、冷やかして歩く男たちを地回りといっていました。

【遊郭以外の見世】

吉原は遊郭だけでなく、仕出し屋さんもあったそうです。

鰻で有名な江戸川屋、しらたま餅で有名な兵庫屋、うどんと豆腐や山や……といった風に。

遊郭では下女が主な配膳を担当していましたが、仕出し屋さんにも料理を頼むこともあったようです。

【定年】

遊女たちの定年はだいたい二十七歳でした。もちろん例外もあったと思いますが、二十七歳を越える遊女はなかなかお客様がつかないようでした。

定年した遊女たちは、身請けといって誰かに買われたり、年季を終えて吉原の外にでたり、下女として吉原に残ったりしました。

年季は人買いに買われた場合、約十年でした。数えて十七に遊女として売りに出されますから、平均的に十七から二十七まで客をとったのかなと思います。

第二十六話「こそばゆい琴」

那智、竜陽君。

転じて陰間とは、春をひき鬻ぐ男児のこと。それくらいはひばりも知っていた。

みとらがとらいちならば、とらいちはあの旦那に飼われていたのだろうか。

今まで抱いていたとらいちというものから、あまりにも乖離しているように思えて、俄かに信じがたい。飄々として、野良のようなとらいちしか知らないのだから。

そもそも、全く証拠のようなものはない。ただの勘である。

しかしながらそれは、確信のような予感を持っていて、過重なまでにひばりを責める。

喉の奥でころころと、疼いてやまない。

「どうしたんだ、早く弾け」

琴を間に、ひばりはとらいちと面していた。今日は琴がどれだけ弾けるようになったか、按配をみるというので、こうしている。

とらいちはいつもの仏頂面だ。動揺しているのは、ひばりだけ。

ひばりはたどたどしい手つきで、ちゃんと琴線を弾きながら、想像する。もし今、みとらについて訊ねたらどうなるのだろうか。

とらいちと関係がないのならば、それがなんだと、無愛想に言い

放って終わりだろう。しかし、ひばりの直感が正しければ。

あの旦那からとらいちは逃げた、吉原ならば足抜けのようなものだ。だとしたら、とらいちにとっての飼い主は、とらいちにとっての鳥籠は。

居心地が悪い。全身が妙にざわめき、うなじが逆立つような感覚がある。

それは当然のことながら、指にも及ぼした。弾く手が乱れて、調子はずれな音が響く。

「駄目だ」

とらいちの叱咤。

「どうした、前よりおかしいぞ」

そう言って、立ち上がる。ひばりはとらいちの動作に萎縮する。

「いいか、腕の動きをまず教えてやる」

察して、ひばりは強烈に逃れたい感情に襲われた。そんなことをされたら、身体の中にある騒がしいものが皮膚から皮膚へ、とらいちへと伝わってしまうような気がして。

しかし逃れられるわけもなく、ひばりは琴に視線を落としながら、とらいちの気配が後ろへと回るのを認めた。

とらいちはひばりの真後ろに座ると、ぴったりとひばりの身体を包んだ。

「身体で覚えるんだ」

とらいちの重く、穏やかな声が鼓膜を微動させる。吐息が耳たぶを掠めていく。

弾力のある逞しい熱が、ひばりの背中に触れる。冷たい、大らかな手がひばりの手に重ねられる。

その感触に、ひばりは痺れ、汗ばんだ。自分の戸惑いが届かないようにと緊張し、あまりに心臓が高鳴って、火傷してしまいそうだと、鳴くようである。

とらいちの指が、優しく琴へと落ち、小さな音を紡ぐ。なんと玲瓏な音だろう。琴が嬉々としている。もっと触れてほしいと、鳴くようである。

ひばりは触れられたら、耐えられないのに。

「具合が悪そうだな」
いつの間にか、身震いしていた。意識が朦朧としていた。薄く汗を浮かべ、頬を紅潮させていた。

「今日はこれくらいにしよう。夜見世まで眠っていた方がよい」

とらいちがさつと離れる。途端に身体が冷えて、まるで本当に体調を崩したように、骨まで冷える。

身体をかき抱くと、とらいちの匂いがした。胸の底まで簡単に染み込む、不思議な匂い。

「風邪か？ 軽く脱いで、横になれ」

押入れを開けて、とらいちは布団を持ち出し、敷いた。

「どうした、早く脱げ」

「うん……」

ひばりはよたよたと腰をあげると、箆笥から寝巻きを取り出した。

一寸、留まる。

「屏風がないから、ここじゃ着替えられ……」

とらいちは何気ない風に顎をしゃくると、

「丁度良い。服の脱ぎ方を見る。身体も見せろ。歪んでいないか調べる」

平然と言い放つとらいちに、ひばりは再び身体が熱を持つのを感じた。

熱い奔流が腹から心臓から湧き出て、俄かに汗が出る。

反抗する気などない。しかし胸が千切れてしまいそうなくらい張り詰めている。

「分かった……」

ひばりは帯に手をかけて、慣れた手つきで衣服をはいだ。衣桁いこうの傍へ行って、皺が出来ないように丁寧にかける。

「素早いのは良いが、舞と同じ動きを意識しろ。指先を見やって、滑らすように脱げ。……そうだ」

とらいちの真剣な眼光がひばりを刺す。

細かい動作でさえ、とらいちの前では稽古になる。女になるための術に。女の素が花開くための儀式に。

蹴出し腰巻をすつと外して、ひばりはとらいちの前へ一歩でた。右腕で胸を、左腕で腹から股を隠す。

それで納得するとらいちではないことは、百も承知だ。ひばりは

ゆつくりと、腕を外へとずらしていく。

やがて、ひばりの裸体がとらいちに晒された。

今年ようやく、十二になった。不順ながら月厄もくるようになった身体は、少しずつ女の形へと近づいている。来た頃より、頭ひとつ大きくなった。

肌は浮き立つように白い。平坦だった胸は掴めるほどではないが、ふつくらと育ち始めている。揉むことはまだ出来ない。脂肪がつく過程のためか、触れるだけで痛いのだ。

ぽっこりと出ていた腹は少しへこんで、肋骨が薄く浮き、くびれを描いている。女らしい湾曲は形の良い小さな尻へと続く。

小さな臍のたもと、下腹部。股の間には焦げ茶色の毛が揃い始めていた。同年代の娘たちと比べると薄く、割れ目を隠しきれない。

「とらいち」

視線を逸らしながら、か細い声を繋ぐ。

「いつものように、触らなくて良いの」

「具合が悪そうだからな。もう、服を着て寝ろ。身体が冷える」

首肯し、ひばりは言われたとおり寝間着に袖を通すと、布団にもぐりこんだ。

「つか佐と三船に言っておく。辛そうだったら、ちゃんと休むんだ」とらいちは襖に手をかけると、そのまま静かに廊下へと出てしまった。一人ひばりは残されて、ほうと溜息をつく。

病気ではない。ただ、とらいちの昔が気になって仕方ないだけだ

というのに、この有様はなんだろう。

みるみるうちに愁嘆が全身の熱を静めていく。とらいちが去ると、少しばかり気持ちは軽くなる。それでもずきずきと針が刺すように傷むことには変わりないのだけれど。

とらいちはみとらなのだろうか。だとしたら、納得がいくのだ。

高級陰間は芸事に達者だという。そして無論のこと、男を落とす術だつて心得ている。とらいちという人間のことに合点がいく。

だとしたら。

かつて、彼もひばりのように身体を誰かに晒したことがあるのだろうか。

つか佐のように、誰かに抱かれたことがあるのだろうか。

鳥籠に入って、折檻を受けたり、嫉みに泣いたり、恋をしたことがあるのだろうか。

どうして逃げてしまったんだろうか。

とらいちのことが知りたい。

燃えるような欲求は炎のようで、このままでは焼けつくされてしまふ。だけど知るのは、恐ろしい。

ひばりは震えながら、ぎゅうつと己を抱き締めた。

第二十六話「こそばゆい琴」（後書き）

【企画についてのご案内】

この作品は春エロス2008企画に参加していますが、企画ではただいま40作品、完結済みでは20作品が出揃っています。

様々な世界観、エンターテイメント、面白さ、そしてエロス……、
たくさんの方の作者さんが秀作を執筆しています。もしよろしければ、
そちらもご覧下さいませ。

投票や一言感想などもお気軽にどうぞ。特に投票は「良い」と思
うことが基準だそうです。何作でも一票を投じることが出来ますの
で、気に入った作品がありましたら応援にポチッとお願ひします。

各賞投票では、背徳賞や耽美賞、エロエロ賞などユーモア溢れる
賞があります。これにはこれだ、と思いましたら各賞につき三作品
をあげられるので、そちらも楽しんでみて下さいね。

どの作品を読めばよいか分からない場合は、レビューをご参考に
どうぞ。

レビューも誰でも書けますので、おすすめの春エロス参加作品に
出会えたら、書き込みもどうぞ。

四月は桜もよいですが、春エロス2008鑑賞も是非お楽しみみ下
さいませ。

第二十七話「散歩がてらの人質」

とらいちは来ないと訊いた日に、ひばりは少し動くことにした。時が経つほどに好奇心が膨らんで、すっかり芸事に身が入らず、上の空になってしまふ。このままでは吉原には居られないだろう。

些細なことで良い。自分の主の秘密に接することが出来れば、痛みを伴うこの貪欲な気持ちは治まるはずだ。

ひばりはまず、つか佐に話題を振ることにした。

四つ時、風呂から上がって鬘結いまでの気の抜けた時間に、そつと挟む。

「つか佐姉さん」

「後でな」

つか佐はぶつきら棒に呟いた。

意外にも読書家の彼女は、南総里見八犬伝というやたら量の多い史伝物の三十巻ほどを枕に、二十巻ほどを膝にばら撒きながら、土蜘蛛作妖怪図という、まったく別の作家の本を啄んでいる。

だらしない姿であるはずなのに、美貌がそれを芸術たらしめてしまふのだから実に珍妙だ。

あしらわれて渋々、ひばりは他に知っていそうな人物を探して彷徨うことにした。うろろろしてみるものの、見世でとらいちを知っているような人物は皆、急がしそうである。

三船に暇があれば良いのにと、ひばりは遠巻きに三船の部屋を覗

いた。残念ながら三船は、下女たちと話をしていた、捕まりそうにない。

こんな時に限って、いつも工作ばかりで暇そうな仁平もいない。

溜息混じりに、ひばりは見世の外へ出た。散歩でもすれば、少しは気が紛れるかもしれない。

弥生の吉原は、空が霞んでいる。水気をよく含んだ雲は眠たげで、のろりのろりと風に押されている。

どこかで鶯が春の歌を詠んでいる。清い囀りは澄んでいて、仄かに暗い真昼にもよく響く。

仲の町から京町の二丁目の入り口まで小走りでいくと、だいぶ気持ちは晴れてきた。

だが立ち止まれば、雪のようにまた積もっていく。ひばりは振り払うように、再び大地を蹴った。

と、そのとき。

出会い頭に何者かとぶつかって、ひばりは尻餅をついた。

何事かと目を瞬くと、途端に視界がぐんと持ち上がり、耳元で弾けるは、どすのきいた怒声。

「近づくとこの餓鬼ぶつ殺すぞ！」

唾が頬をかすめて飛んでいき、ひばりは吃驚して身を竦めた。

喉下には冷たい感触。小刀だ。

どうやら自分は、男に人質として羽交い絞めにされ、宙ぶらりんになっているらしい。

対峙するは腰巻に羽織と、簡素な格好をした歳若い三枚目。

「往生際が悪いぞ、てめえ！」

「うるせえ！ 羅生門河岸の女に払う銭なんざあるかつ。こっちは鳥屋とやについてしまったんだぞ！」

「粹だなんだと抱いたのはそっちだろうが！ 抜いた分は返してもらうぞ、ごらあ！」

背筋の凍る斜眼で、男は小刀を懷から取り出した。魚の腹のような鈍い光。

ぐつと腰を落として、男は刃を向ける。何度か人を刺したことがあるのか、その動作は流れるようで、無駄がない。

それでも、人質をとった人間に敵うのだろうか。

泡を食いながら、ひばりは頭を回転させた。どうにか方法はないものか。考えに考えて、決めた。賭けに出よう。

「わっちなら、払えるかしらん。おいくらなの」

小娘の戯言に、背後の男が失笑する。

「お嬢、あんたにやあ払えんよ。こちとら一両もツケてるんでえ」

「なあに、お兄さん。たったの一両でいいの？」

その返答に、背後の男は嘲りを止め、食いついた。

「本当か？」

「ええ。わっちの着物、見事でござんしょう。天下の吉原、大海屋の引っ込みよ」

その答えに狼狽し、拘束が緩む。ひばりの首に当てられていた小刀がふいに離れた。

それを対面する男は見逃さなかった。

男の素早い突きがぐさりと、悪人の腕に刺さる。

悲鳴があがり、小刀がこぼれた。ひばりは地面に落とされる。

いつの間にやら、周囲には人垣が出来ていた。人質が解放されたとなつて、血気盛んな野次馬が次々と悪人に覆いかぶさつてゆく。命からがら野次馬の間を縫つて出て、ひばりは漸く胸を撫で下ろした。

「おう、大丈夫か」

見上げると、悪人を刺した男だった。

「えらい目に会わせたな。すまん」

「お兄さんはどなた？」

「羅生門河岸の始末屋よ」

始末屋。ひばりの記憶が確かならば、無銭遊興や勘定不足の客から金をふんだくる岡っ引きの手先である。

大見世では考えられないことであるが、小見世となると出し洩る客がいて、そういった客に対応する始末屋や付け馬屋を、小見世は雇うのだという。

「もしかして、さっきのはお客さん？」

「お客？ ただの盗人よ。だからああして、天誅よ」

肩越しに後ろを見やると、さきほどの男は野次馬たちに滅茶苦茶

に殴られていた。一致団結した私刑である。

「それくらいにしといてくれよ、死なれちゃ錢もとれん」

始末屋はニタニタと片頬を歪めながら一声投げると、その場にしゃがみこんだ。ひばりの着衣についた砂を払う。

「いけねえ、ちょっと切っちゃったな」

言われてみると、小指から血が滴っていた。どうやら囚われていた拍子に切られていたらしい。

着物が汚れないようにと、急いでひばりは指で押さえ込んだ。しかし小さいながら深く切られているらしく、血は滲み続ける。

「おし、お嬢。見世に来い。薬を塗ってもらおう」

「え……っ、あのっ」

「なーに、遠慮するなって！」

始末屋に引っ張られて、ひばりはずるずると引きずられた。何処へと向けられた足の先は東。

吉原は、羅生門河岸。

第二十八話「羅生門河岸」

京町二丁目を通り過ぎる。ここから先、ひばりは足を踏み入れたことがない。ならず者が多いから立ち入るなと強く習っているのだ。

羅生門河岸。吉原では最下級の見世や個人経営の局が軒を連ねている。

栄耀栄華な中央辻とはがらりと変わり、まるで貧乏長屋のような佇まい。酷く陋巷ロウキョウとしていて、端から突けばバタバタと倒れてしまいそうだ。

ここは本当に雅溢れる花街柳巷であろうか。

「お兄さん、わっち大丈夫！」

「いいから、いいから。遠慮するなって」

ずるずると引きずられるままに、ひばりは見世のひとつに入った。華やかな匂いがなく、すえている。光がはいっているというのになどこか陰湿で、心を不安にさせる。

故郷にあつた鳥小屋を髣髴とさせる。失礼だと思いつつ、鳥屋に入るとは見世に入るという意味だろうかと考える。

本当にここは吉原だろうか。

「あれあれあれ！　ずいぶんと可愛いお嬢さんだこと」

始末屋が来たことに気付いて、奥から小袖の女が身を乗り出した。皺の深い、しかし声に高い張りのある女だ。

「どうしたの」

「いやよ、さっきの男がこのお嬢を盾にしゃがって。捕まえたんだけどよ、お嬢が怪我しちまったんだよ」

「あれあれあれ、大変なこと。お嬢ちゃん、こっちおいで」
玄関のすぐ脇にある狭い座敷に女は引つ込むと、ひばりに手をこまねいた。

座敷の畳さえも薄汚れ、たわんでいる。なんだか本当に、田舎のようだ。おぼろげな懐古が胸を暖めた。

ひばりは頷くと、玄関口に腰を下ろした。袖からめりやす足袋を取り出して、素早く穿き、

「お邪魔しんす」と座敷にあがる。

「ええと、切られたのかい」

傷口を見せると、女は目を丸くして、

「あれあれ、大変だ」

右往左往して、水を汲んだ桶を持ってきた。

水で傷口を洗い清める。

切られたところはようやく血が固まっていた。

「薬、塗りやしょう」

今度は箆笥の上から薬箱を下ろした。薬箱にはぎつしりと薬やら草やらが詰まっている。大海屋でもまみえたことのない量だ。

「それにしても、あんた本当に、めんこいね」

女の言葉に目を瞬く。

「お姉さん、奥州の生まれですかい」

「あら、めんこいって分かるの。友達に奥州の子がいるのよ」

「わっち、奥州の生まれなんだあ」

「あらあら、随分と遠くに来ちまったなあ！」

顔を合わせ、相好を崩す。先ほどまであつた不穏な雰囲気、が嘘のようだ。

女は親しげな笑みを浮かべたまま、蛙の絵がついた奇妙な塗り薬を取り出した。蓋が開いた途端に、つんと、かいだことのない匂いが鼻を刺激する。

「くっさいけどね、これがよく効くんだよ。腕をざっくり落とされてもね、これ塗れば熱が出ないんだからね。本当だよ、ここはよく薬を使うんだから」

薬という言葉にひばりは強く反応した。薬をよく使うのなら、とらいちのことを知っているかもしれない。

「お姉さん、とらいちって、知ってる？」

「とらいちって、蘭医の旦那の使いのдар。よく薬を持ってくるね」

薬を塗られながら、ひばりは感嘆した。

なんとという偶然だろう。こんなところで、とらいちのことを知る人物に巡り合えるとは。

「お姉さん！ その、みとらって、知ってる……？」

藁にも縋る思いで、ひばりは勢いづく。

ひばりの様子に瞠目しながらも、女は語り始めた。

「みとらね、みとらっていうのはよく分からないけれどねえ。とらいちのことは知っているよ。もう十年來の付き合いだからね」

十年来。となると、かなり古い馴染みだ。

「とらいちはずっと、薬売りなの？」

「いんや。……そうだね、十年前だね。あの子がふらつと訪ねて来たのは。今は仏頂面で、顔に傷なんかもあるけど、昔のとらいちはね、別嬪だったんだよ。」

信じられないかもしれないね。男に別嬪っていうのも、なんだか変な話だしね。でもさ、仲の町の花魁も目をひんむくくらいだったねえ。」

十年前、とらいちには傷がなかったのだ。ならば一体、いつ傷がついたのだろう。この人物は核心を知っている。自分の毒気を抜くための、とらいちの過去を知っている。

ひばりは身を乗り出して、次を扇いだ。

「それで、……どうして」

「喧嘩だと言っていたね、顔に傷をつくってまた見世に来たときは、薬屋でね。愛想なくなつて、不遜な仏頂面になっていたよ。今じゃあどんどん、人殺しみたいな人相になつちまつて」

人殺しという言葉にひばりは腹を抱えこんだ。

確かにその通りだ。初見ではひばりも、とらいちを熊かなんかの猛獣のようだと思ったものだ。

とらいちの話を他人とする機会はなかなかない。心を躍らせながらひばりは、女の話に耳を傾けた。

とらいちに関する他愛のない話が楽しくて、もつともつと強請ってしまう。いつの間にやら、時間を忘れていた。

「あれ、あんた。もう牛の刻じゃないか？」
はっとして、ひばりは立ち上がった。

「お姉さん、わっち、いかなきゃあ」

「あらあら、やっぱりね。ほらほら急いだ」

「お姉さん、有難う」

深々と頭を下げ、ひばりは大急ぎで玄関口に向かう。

と、そのとき、女がひばりのめりやす足袋に視線を落とした。

「あら。あんたもしかして、お鈴ちゃんの子か？」

「え？」

「やだあ、早く言つとくれよう。そのヘンテコな足袋、お鈴ちゃんが縫ってくれたんだろう？ 前に一度来たとき、お鈴ちゃんが置いていったんだよ、ほら。おばさんとおそろい」

女が足の裾を軽く持ち上げる。女は、つぎはぎだらけではあるが、めりやす足袋を穿いていた。

「とらいちの奴、お鈴ちゃんの話になると照れるんだか貝になっちまうんだよ。むつつりだから」

「あの……お鈴って……」

「へえ？ ああ、お鈴ちゃんの子じゃないの。なあんだ」

女は残念そうに眉を下げると、薬箱をしまおうと腰をあげた。ひばりは座敷に上がりこむと、中腰の女に取りすがる。

「ちよつと、なんだい」

「お鈴！」

ひばりは強い眼差しで、

「お鈴って人は、誰……」

それは懇願だった。女をつかむ幼い手はあまりに懸命で、白んでいる。

女はひばりの様に目を白黒しながら、ゆつくりと口を開いた。

「誰って。そりゃあ、とらいちが身請けした子のことじゃないか」

第二十九話「追求」

お鈴ちゃんをとらいちが買ったのは十年前かね。

突然やってきて、お鈴を貰うって言うてね、五十両をばら撒いて行っただよ。ぞっこんだったんだろうね。

お鈴ちゃんはその後、一回見世に来てくれたつきりだね。今も二人で夫婦をしているんじゃないかね。お鈴ちゃんの傍にいる時は、あの仏頂面、結構な男前なんだよ。

めんこいって方言はね、お鈴ちゃんから聞いたんだよ。なんだか言いやすくて、つつい使っちゃうんだよね。

嗚呼。

頭がおかしくなりそうだ。

ひばりはふらふらと、大海屋に戻った。すっかり青ざめた顔色を見て、最初に飛び出してきたのは、三船だった。

「どうしたんだい」

少し乱れた髪に、服についた土ぼこり、そして小指の傷。三船は仰天して、ひばりを担ぎあげると、つか佐の部屋へと走った。

「三船おかあさん、どうしました」

乱暴に襖を開けた三船に、悠々とくつろいでいたつか佐が頭をもたげる。

「大変だよ、ひばりが」

「ちがう。おかあさん」

狼狽しきる三船に、ひばりが弱弱しく制す。

「なんでもありません。散歩をしていて、転んだだけ」

「転んで指を切るもんかい。お前これ、刀傷だろう！」

「そんなことより」

激昂する三船に冷めた目を送る、ひばり。三船はゆっくりとひばりを下ろすと、よろよろとその場に腰を下ろした。

「三船のおかあさん、ちよいとお尋ねしたいことが」

「なんだい」

「おかしなことをと思うかもしれんが」

「だから、なんだい」

「とらいちのこと」

三船が眉を顰める。

「……とらいちが、どうしたんだ」

「とらいちはもしかして昔、みとらという名だった？」

淡々とした口調だった。三船は何か後ろめたいことでもあるように、視線を逸らす。

「突然、何の話だよ」

「ある旦那さんが、わっちのことを、みとらと言って勘違いを」

みとら、という名に、三船は強く反応した。瞳孔が僅かに細まり、興奮の影が横切る。

ひばりはすかさず、

「とらいちは陰間だったの」
迫った。

幼い声には、強い芯があるようだった。賢しい推測の上にたつ揺るがない訴えを、腹の底に据えた凄みがあった。

三船は、怯えた。

「知ってどうするんだい。お前に、とらいちのことを知って、何か良いことがあるのかい。それより、傷は一体」

ずっと、ひばりが三船の唇に手を置いた。音のない所作。一陣の風のような、あしらい。

「知りたい。知りたくてたまらないの」

黒曜の目が見るものに畏怖を与え、

「わっちは、なんなの？」

瑠璃の目が神秘を与える。

「とらいちの、なんなの？」

人間から遠ざかった、蓮の花のような童子。

ひばりではない何か、妖艶な何かがとり憑いたような、威圧感。

そのくせ澄んだ水のように心を吸う、深淵じみた魅惑。

三船にはもう、欺くことは出来なかった。

「ああ、あんたは、みとらみたいだ……」

絶え入るような声。諦念したような表情で静かに呟き、三船は腰をあげた。襖に、手をかける。

「使いを出して急いでとらいちを呼ばう。今夜は見世に出なくて良い。つか佐、ひばりを借りるよ」

呼ばれて、つか佐はすんなりと頷いた。涼しげな顔は僅かにうろたえているようだったが、事は察している様子である。

「好きにすれば良い。わっただけの禿じゃないようだしね」
そう平素のまま口になると、手にしていた本を投げやった。

第三十話「花むしろ」

居待月を一身に、風に屠られ夜桜が舞う。千切れた花びらは庭にある池に重なり、桃色の筏のように揺れている。

「行灯の焚きすぎだ。桜が、狂っている」

格子の外に顔を向けながら、とらいちは口ずさんだ。

三船の部屋を借りて、ひばりととらいちは膝を向け合っていた。ほんの少し距離を置き、相對するように座っていると、まるでいつもと同じように、自分の近況を報告する時間のように、ひばりには思えた。

しかし今日は、違う。

「とらいち」

「三船から聞いている」

とらいちは視線を真正面に直した。

右のこめかみから鼻先、そして左耳たぶの下へと、走る刀傷。強面に加わる不精髭は、遁世した流浪人のようだ。

過去などないかのような、しかし重みのある面容。

「お鈴のことを知ったと」

「うん。だから、わっちはとらいちに訊きたい。わっちは、一体なんなのか。どうしてとらいちは、人買いの真似事などしたのか」

「教えるつもりはないと、言ったら」

「三船に賭けをやめてもらっ」

すっぱりと、ひばりは言い切った。

「とらいちの代わりに、わっちが賭けをしんす」

三船ととらいちは賭けをしている。ひばりの成長に対して、大金を賭けているのだ。

その賭け事を、自分が三船としても別に問題があるわけではない。例えば、とらいちがひばりは不法の禿であると上に申し付けたとして、損はない。大海屋という看板にただの薬売りが敵うはずもない。戯言と流されるか、逆に不法をはたらいた人買いとして、とらいちが囚われることになるのだ。

それはとらいちも、言わずもなが、分かること。

「何故知りたい」

「知らないことは辛い」

「どうして。大海屋の禿としての矜持か」

「分かん」

何故辛いのか分からない。

ただの好奇心の暴走なのか。それもとらいちの言つとおり、矜持なのか。

お鈴という切見世あがりの女を食べさせるために吉原に売られたということに対して、腹が立っているのだろうか。

分からない、分からないが。

「知りたい。このままではきつと、壊れてしまつ」

率直に真摯に、とらいちだけを捉える。僅かもぶれることはない。ひたすらに、とらいちだけを求める。

男と、少女。主と、僕。^{しもへ}二人は相対し続けた。

どれほどの時間が経ったろう。やがてとらいちは再び、ついと桜を見やった。そして、薄く、唇を割った。

「生まれは京都だった。親の顔は覚えていない。

ただ、京の生まれだと言われて育った。下手な上方の言葉に囲まれて、陰間として仕込まれた。湯島の、今はない高級茶屋だ」

桜が舞う。花びらが風に翻弄されて、枝葉からその身を奪われる。

ひらり、はんなりと。

蒼穹に映える桃色は滑るように宙を泳いで、たおやかに失墜し、大地を埋める。花むしろはまるで絵巻物のよう。

眺望に心奪われていると、後ろから耳たぶを噛まれた。

「どうした、上の空で」

「桜が綺麗だから」

だみ声に、少年は応える。その横顔は整っていて、桜に負けぬほどの色香があった。人を酔わせる、蟲惑的な匂い。

女と見紛う容姿だが、声は幾分低く、おのこだと分かる。低いながら、澄んでいた。

少年の背後から声が離れた。粘着質な音が跳ねる。少年の眉根が僅かに振れる。

「はあ……」

嘆息しながら窓格子を背にし、壁に背をもたせかける少年は、裸だった。

「旦那様は、桜はお嫌い？」

窓格子から漏れる光が瘦躯を愛でていく。華奢で、中性的な少年の身体には、ところどころ花びらを思わせるうっ血があった。

女にはない、だが男にもない妖艶を纏う裸体。それを、だらしなく褌ふんどしを垂らす中年男が掻き抱く。

「桜より、団子より、お前が良い」

「そう」

荒々しい呼吸を隠すこともせず、男が少年の腹に脂ぎった顔を押し付ける。發育途中の中心に、むしゃぶりつく。

「みとらも、旦那様が良い」

男に見えぬようにぺろりと舌を出して、少年は嫣然と微笑んだ。

江戸に残る数少ない、湯島の陰間茶屋。その高級色子であり、質屋大榎西村屋に請け貰われた十四の身空。

与えられた名は西村みとら。

とらいちの、忘れがたい過去だった。

第三十話「花むしろ」（後書き）

これからは、とらいちの過去編に入ります。陰間であるため、人によつてはかなり毒の強い内容となっております。ご了承くださいませ。

【陰間】

江戸時代は舞台に出ていない少年役者や売春をする幼い男児の名称として使用され、本来は男女に通用していました。粋と珍奇を求める町人文化により栄え、有名な場所として湯島や芳町がありました。湯島が文京区にあるのは東京なら知っていらっしゃる方も多いかと思います。

人気の陰間となると花魁をかうより高くついたため、僧侶や金持ち商人といった一部の富裕層に求められたようです。

かなり流行となった商売でしたが、1787年の寛政の改革をきっかけに規制され、どんどん潰されていき、明治にはなくなってしまったそうです。

【男色】

古くから日本には男色の文化がありました。明治初期には陰間茶屋は途絶えましたが、日露戦争の頃、富国強兵のおりに九州から関東の方へと流行の波があつたようです。軍人が美少年をつれさつてしまうという事件もありました。

やがてそれも、江戸で女色の文化が栄えたことやキリスト教の浸透によつて、息を潜めざる終えなくなつたようです。

【局見世】

羅生門河岸の話が出ましたが、羅生門河岸には最下級である切見世の他、個人経営の見世もありました。そういった見世は局や、局

見世と呼ばれました。

第三十一話「お鈴との出会い」

長い髪を下ろしたまま、湯船に口元まで浸かる。ぷかぷかと浮かぶ蜜柑の皮で軽く身体を擦ってから、みとらは風呂からあがった。

湯を滴せながら、脱衣場に置かれた三面鏡の前に立つ。

彼は己の身体の隅々までを見やった。骨は変わっていないか、肉は変わっていないか、背は伸びていないか。湯気に曇る鏡を手のひらで拭いながら、審美し、……その場に蹲る。

「また男に近づいている」

やけくそ気味に言い放つと、布で水気を取って、早々と浴衣に着替える。濡れ髪のまま、紐で縛ることもせずに、湯殿を後にする。

みとらは焦燥していた。日に日に成長する自分の身体が恨めしくて堪らなかった。時の流れに逆らうことは出来ない、幼い陰間はいずれ大人になってしまう。

承知の上のことだ。みとらも、みとらの主人も。その上で、みとらは茶屋から身請けされた。

しかし、承知と理解は全く違う。実際に変貌してしまえば、主人に捨てられても可笑しくはない。

そいう陰間は何人もいる。

「くそつ、くそつ、くそつ」

子犬のうちは可愛からう。だか、大人になるとしたら。

人間など、雑種の犬よりたちが悪い。両親に似ない子どもなどこ

ろごろいる。どう育つのか、仏ですら分かるまい。

腹の煮える思いで、みとらは気まぐれに見世へと出た。

奉公人たちが品を持って銭を持って、町人どもの相手をしている。

身体に価値がなくなったとき、自分も彼らのように雇って貰えるのだろうか。

主人の道を助け、衆道を共にするような生き様が与えられるだろうか。

自分に何が出来るだろう。

算盤は出来る、口はそれなりに巧い。必要があれば、京の言葉でも使えば、看板になる自信はある。主人が求めれば女だって抱く。

だが、見捨てられぬ確証があるわけではない。

何か仕事があるのならば、みとらもこれほど不安にはなるまい。

焦ってしまうのは、日がな一日、何をするわけでなく、ただ愛玩動物よろしく、そこらへんに投げられるから。

願いいれても、主人は溺愛するだけ。奉公人たちに到っては、主人の目を気にしてか、腫れ物でも扱うような態度だ。

だから遠巻きに、見世を見やるしかない。いつか捨てられそうになっても縋り付けるように、そうして少しずつ、どのような仕事があるのか吸収していく。

実に、下らない。

みとらは草履につま先を引っかけて玄関先へと降り、靴箱の上に置かれた招き猫の山から、小さな猫を手にとった。

漆塗りの、厄落としの猫。右手を掲げて、不敵に口元を丸めて、みとらを凝視する。

「お前と俺と、どっちが役にたつ寝子だろう」

みとらは、猫の間に入り込んだ埃を爪で穿りながら、呟いた。誰が聞くわけではないと思って。

しかし。

「めんこい猫ですなあ！」

寸でのところで、みとらは招き猫を落とさずに済んだ。猫を抱きかかえながら振り返ると、地味な身なりをした娘が、玄関先に腰をかけて、にこにこしていた。

「おらも猫、好きだ。犬より飼いやすいし、温かいし」

娘にまじまじと視線を注ぐ。赤ら顔にそばかすの目立つ、野暮ったい醜女だ。

つぎはぎだらけの風呂敷包みを膝にのけている。下級の客か。

「あれえ、別嬪さんだ……」

「男だよ」

「ふん？　へえ！　はあ、こりゃあたまげた！」

大げさに両手をあげての、育ちの悪そうな出方。みとらにはそれがとても新鮮に思えた。

陰間として蝶よ花よと育てられた彼は、平凡な町人とともに話したことがない。彼に話かけるのは見世の者か、花魁を抱くより高い金を払って上がりこんだ僧侶や金持ち商人か。

どちらにせよ、こんなに気軽な口振りをされるのは初めてかもしれない。

「お姉さん、名前なんていうの」

みとらは招き猫を元の位置に引っ込めると、娘の横に座った。娘は急にみとらが近寄ったことに照れ、僅かに腰をずらすと、
「おらは、お鈴」

赤ら顔がますます紅潮する。世間慣れしていないおぼこなのだろう。こめかみに、じんわりと汗が浮かんでいる。

「お鈴さん。さっきの、めんこいつて、何？」

「はあ。めんこいは、方言だべか」

「少なくとも、訊いたことはないな」

お鈴は手の甲でこめかみを拭うと、姿勢を改めた。

「おらの生まれは、奥州なんです」

「奥州……、って、北の？」

「へえ。めんこいは……めんこいつていうのは、なんだべか。

あがねわがねな、頭っこ悪いすから。

えーと、猫でしょ、花でしょ、子犬さ、あがんぼ！」

「あがんぼ？」

お鈴はうんうんと唸ると、思いついたように立ち上がり、招き猫へと駆け寄った。

一番大きなものを手にとって、抱き寄せ、あやす。そして子守唄を歌った。

ぴんときて、

「もしかして、赤ん坊？」

「ああ、そう！　そうでがんす！」

安堵するお鈴に、みとらは続けて頭を動かす。猫、花、子犬、赤ん坊……。

「もしかして、可愛いという意味？」

「ああ、そうだ。可愛い。めんこいは、可愛えってことです」

伝わったのが心底嬉しかったのだろう。お鈴はぴょんと跳ねるとくるくる回った。天真爛漫に白い歯をこぼして、きゅうっと、猫を抱きしめる。

「可愛いは、めんこい」

そう言って猫に頬を摺り寄せるお鈴にみとらは、いつの間にやら、見とれていた。

飾り気のない、ありのままの生娘。

無垢すぎたお世辞にも美しいとはいえない彼女が、前触れもなく重たい心を軽くする。暗澹としていた心を忘れさせる。

素尚の可憐さが肺を満たし、声を奪う。

一瞬のうちに、身体がのぼせた。

惚れた腫れたが生きる術だったみとらにはないものが、そこで花のように咲いていた。

第三十二話「ふいうち」

山稜を描いて、朝日が静かに顔を出す。柔らかな暁光が格子窓をぬつて、みとらの長い睫毛をくるみ、白く染める。

桜は時に流され落ちてしまった。かわりに青々とした緑が目を楽しませるの季節の早朝にも、みとらは絶えることのない激しい劣情に貪られていた。

五臓六腑を押し上げる感覚、それがずるりと抜けていく感覚。魂ごとほだされているようだ。肉体と肉体が摩擦し、苦しいほどの熱が骨と魂とを炙る。筋肉は享楽に痺れて、自分の身体ではなく、ひとつの棒のようである。

みとらという棒を、筒を、隙間なく埋め、削り、貫く。

生理的な涙を流して、身体を痛いほど反らして、みとらは喘いだ。噛んでいた唇はだらしく開いて、不埒な声を生む。外に漏らすまいと布団に顔を押し付けているのは、悦楽の中に残された唯一の羞恥だった。

何かが自分の名前を呼び、激しく進入してくる。蝕み、狂わせる。性的な喜びに陶酔しきつた頭が完全に停止し、肉ばかりとなつて極致に突き上げられたとき、みとらは一気に白へと墜落した。

懸命に呼吸をして、潤んだ瞳で自分を組み敷く男と視線を絡ませる。

男はまだ、動いていた。幾ばくか腰を揺らして、ようやく男が身体を止める。

梅干でも食べているような顔で意味のないものを搾り出す、男。

みとらにはなんだか、滑稽に思えた。

この男は一体、何をしているんだろう。自分は一体、何をしているんだろう。

無様で、空虚で、この行為は一体なにを生むのだろう。

この先は、この意味は。

「……快樂がなかったかといえば、嘘になる」

畳の上に凜と正座しながら、とらいち目は目を閉じていた。

「それでも、虚しかった。そこに喜びはなかった。いつ終わるかしない脆い戯れに思えた。男に抱かれているときは、いつもそうだった。主人の遊びにつきあつて、複数の男に嬲られて酒の肴にされたこともある。おかしいものだ。もう十年も前のことなのに、時折、昨日のことのように思い出す」

とらいち自嘲すると、僅かに開眼した。

その瞳の色は、覚えのある色をしている。嘘偽りなどひとつもない、真正正銘、とらいちの過去なのだろう。例えそれが、今のとらいちと乖離していても、彼の人生の根は、陰間という生き方なのだ。

ひばりの心に衝撃はなかった。ただ静かに受け止めていた。もしかしたら、あまりのことに心が働かないのかもしれないなかった。

漠然たる印象を持った表情で、ひばりは問いかけた。

「とらいち、女の人を抱いたことはある？」

質問に、一拍押し黙る。とらいちが訥々と、

「ああ。抱いた……、ではないな。……抱かれた。初めて女に抱かれたのは、夏だった」

呟いてまた、遠くを見据えた。

みとらは特筆するような勤めがあるわけではない。

一日やることなど、抱かれるために身体を朝と昼と晩、清めるだけだ。主人が仕事に出てしまえば、まるで猫のように暇になる。

晩夏の日が高く、入道雲がいくつも空に座り、くつろいでいる。胸が透くほど深い蒼は、不可思議な高揚をみとらに与える。

足取りは羽のように軽い。

手には先ほど花屋で買った竜胆りんとんを携えていた。笹に似た葉は涼しげで、紫色鐘形の花からは薄く甘い芳香がする。

みとらは老舗の小料理屋の暖簾を訪ねた。そこに彼女がいると知っていた。

「あれえ、とらさま。よういらっしやいました」

勝手ながら裏手に回ると、そこに彼女はいた。

着物を膝上までたくしあげ、あつけらかなとした笑顔で、物干し竿に物や布団を干している。たくさんの干し物に埋もれる彼女を、みとらは逃さなかった。

みとらにとってお鈴を見つけることは、真っ白い雪原から一輪の赤い椿を探すことより容易い。

「お鈴さん」

踊る心を制して駆け寄る。

「お墓参りですか」

「お墓？」

お鈴の視線が竜胆に向けられているのに気付いて、

「ああ。これはね、はい」

みとらはお鈴に花を手渡した。お鈴は驚いて、

「ええ、おらですか？ おらはまだ死にませんよ！」

「何を言っているの。俺があなたを殺すわけがないでしょう。これはその」

説明しようとして、急に恥ずかしくなった。恋にのぼせて女に花を持つてきたということが、自分らしくない気がして、

「見世に花を飾ったら、いいんじゃないかって……」

口ごもる。

「はあ、とらさまは優しい方ですねえ！」

「優しい？」

「ええ、とらさまは優しいなあ。おらね、本当をいうと、とらさまが、ちょっとおっかなかったです」

優しいといったり、怖いといったり。面白い娘だ。

「どういうこと？」

首を傾げてみると、お鈴は困ったように眉を八の字に曲げた。

「怒らんで下さいよ？」

「怒らない」

みとらがはつきりと言ったのをまじまじと確かめて、お鈴は続けた。

「とらさまって、綺麗でしょう。綺麗なひとつて、近寄りがたいもんです。おらみたいな醜女なんかは、とらさま見てたら、心臓がもたねえ」

「心臓が、もたない？」

「どくつどくつてします。だから怖い。でも、今はとらさまが優しいと知っているから平気です」

お鈴はそつと、自分の胸に両手を重ねた。ふつくらとした胸に五指が軽く埋まる。

みとらは途端に、身体の内側が窄まるのを感じた。

花を買ってきて、お鈴に会いに来て、自分の心臓はお鈴の他愛無い所作でも潰れてしまいそうなのに……、平気だと言われたことが存外にも響いた。

「お鈴さん、怖くしてあげようか」

「え？」

悪戯に火がつく。

みとらは竜胆をお鈴の腹に押し付けると、そのまま抱きしめ、唇に唇を重ねた。いくつかの竜胆がこぼれて、二人の足の下で折れる。みとらは開眼したまま、舌をお鈴の唇に挟めようとした。

「とらさまー！」

動転して、お鈴がみとらを両手で押した。しかしみとらは抵抗するお鈴ごと、抱擁する。

「お鈴さん」

お鈴の首下に唇を当てて、囁く。

「俺が怖くなった？」

無意識に、普段の声と格段に低い、男の声になる。みとらの突然の行動に、お鈴は素直にわなないた。

「……怖い」

その声があまりにも小さく、みとらは我にかえって後悔した。

どうかしている。何を焦っているんだろう。

罪悪感と混乱が背筋に渦巻く。みとらはこの状況を繕うために考えを巡らした。

冗談にしてしまえば良いと、決断する。顔を上げる。驚いたかと、笑う。そうすれば。

それを、恋は許さなかった。

「だけど」

お鈴の濡れた目が、みとらを射る。

「嫌ではありません」

第三十三話「雄と雌」

小料理屋の裏庭。幾重にも重なる浴衣や布が、口付けを交わす二人をかるうじて隠していた。

垣根の先には人家があり、小料理屋の壁の向こうには客やお鈴の主人がいる。奉公人だって、お鈴だけではない。

人のざわめきがすぐ傍にある。

「お鈴さん……」

丁寧にお鈴の着るものを崩す。首筋から肩、胸元へと唇を押しつけ、舌で軽く弄る。汗ばむお鈴の身体は熱っぽく、塩気がある。

「しょっぱい」

邪気のない一言。お鈴は返さない。頬を紅潮させ目を潤ませ、片手で軽く顔を覆う。きゅっと噛む唇の意味は恥じらい。そしてなによりの歓喜と期待だということは、みとらには手に取るようだ。

何故なら、自分もまた同じであるから。

みとらは竜胆を完全に捨て去り、お鈴の身体を小料理屋の壁に押し付ける。見世の賑わいが壁を隔てて二人に伝わる。

気にせず、隠されていた女性らしい胸元は開かれる。光が差し込む。

「とらさま、いつも来ているご隠居さんが、珍しく、井物を頼んでいるよ」

みとらは長い五指でお鈴の乳房を片手で持ち上げると、先を啄み、唇に含み、舌で転がした。繊細な舌は彼女の乳の、柔らかい部分をいぢめる。

「大丈夫だべか。残したり、お腹壊したり」

次第にお鈴の乳首は隆起して、小指の爪ほどの大きさになる。甘く噛み、吸った。その形を辿り、先のへこんだところを刺激する。お鈴はいじらしく、耐える。余した左手を、お鈴の太ももに伸ばす。内側を愛撫する。

「あれ、そつかあ。お孫さんと来てる……」

お鈴の声が、不意にくぐもる。初めて彼女は抵抗する。

「そこは」

みとらの左手に、お鈴の手が触れる。

「そこは……」

着衣の間から覗く、柔和な太ももと太もも。夏の光が濃い影をつくり、窺いにくくなっているその場所へ、みとらの左手は忍び込んでいた。

「濡れてる」

みとらは、

「入れても良い？」

お鈴は膨れるみとらの腰を俯瞰し、はっと顔を逸らす。

みとらのものは、雄雄しく漲っていた。それは彼にとって痛く苦しいほどで、激しく疼き、脈を打っている。

大人の男らしく、赤く剥き出している先端。幼い頃、彼は自分の小さなものがこんな風に変貌するとは思ってはいなかった。

大人たちのものを見て、恐ろしくて泣いたことがある。赤黒く脈

を這わせた男の証は不気味で、この世に在らざるものが与えるような恐怖を漂わせていた。

初めて入れられた時は痛くて痛くて、死んでしまえばどれほど楽かと思った。

うまく喋ることさえ出来ないころから小さな張形から始めて幾度となく尻を弄ばれてきたというのに、怒張したものは固く大きく熱く、彼の経験を無下にした。挟られるように中を蹂躪されて絶叫する彼を大人たちは初物らしいと喜んで廻した。

ひい、ふう、みいと数を数え気持ちを落ち着かせる術を、行為のさなかでどれほど使ったろう。何度数えても終わることがなく、絶望したあの夜。一体どれほどの涙を流したろう。

「とらさま？」

お鈴が首を傾げる。

「どうして泣いているの？」

お鈴の両手がみとらの頬を包む。

「怖い……、お鈴さんを傷つけるのが怖い」

過去の奔流が情素から唐突に吹き荒れ、みとらは蒼白になって呟いた。

自分は何をしようとしているのだろう、お鈴を同じように痛めつけてよいのだろうかという葛藤が彼を支配する。

しかしながら、そんな彼をお鈴はそつと、強く抱きしめた。

「大丈夫ですよ。おらは傷つきません。だから……」

お鈴が右手でみとらの頭を撫でる。左手でみとらの腰を擦る。そして自ら軽く股を開いて、みとらのものを導いた。

「おらを女にしてください」

涙を含んだ甘い決心が、二人の間に静かに結ばれる。皮も肉も服もあるはずであるのに、垣根などなく密着しているように思える。

意を決して、みとらはお鈴の尻を両手で支え、腰を落とし、暗がりへと差し込んだ……、が。

「入らない……」

経験のないみとらのものが、濡れそぼったお鈴の表面をつるつると滑る。

懸命に挑んでみるも、情けないほどに巧く入らない。引っかかりもしない。

慌てふためくみとらに、

「一人でしないで」

お鈴は両手を差し伸べた。

みとらの張り詰めたものを手にして、その先端を己の場所へとあてがう恥ずかしさに身を竦め、目を伏せながら、お鈴は声を絞った。

「ここです……」

お鈴の健気な様に、みとらは内心詫びながらも、それ以上の、溢れ突き抜ける思いに震えた。

明るくて、優しく、健気で、愛おしい。好きだ、この人がたまらなく好きだ。

みとらはお鈴にもう一度口付けをすると、ぐっと腰に力を入れた。お鈴の肉の戸がゆっくりと口を開き、みとらの侵入を認める。

中は、とても狭い。

先端が入る前に、お鈴が苦悶の表情に顔を歪めた。

「痛い？」

気遣い、みとらは動きをとめた。

「平気です」

痛みに耐えながら、お鈴は言った。

「とらさまとだから、平気」

力強い優しさに励まされ、みとらは息を詰める。ああ、この人に恋をして良かったと。

「お鈴、ごめん。本当はもう、余裕がないんだ」

みとらは強くお鈴の身体を掴んで、一気に突き入れた。お鈴の身体が硬直し、わななく。

「あっ」

お鈴がひとつだけ、鳴く。

みとらを抑えていた箍たがは、その初音によって外れた。もう、止められなかった。制御しきれない身体は、お鈴を欲してやまない。

激しく、激しくみとらはお鈴の中を掻き回す。

お鈴は破瓜の鈍痛に身悶えながら、みとらの愛に委ねる。

軋む身体に打ち付けられる異物感は裂けんばかりの激痛を与えているはずだ。それでも彼女は、耐えた。

肉と肉がぶつかり合う音。それに、周囲の喧騒が被さる。二人の猛々しい逢瀬はきつと、耳をすませば聞こえてしまうだろう。

客人たちは思ってもみないだろうか。なごやかに食事をしているその席で、壁一枚を隔てて、若い男女がまぐわい、情事に溺れている。想像するものは、いるまいか。

みとらが固いものでお鈴を穿ち、お鈴はみとらの内股を血で汚す。

夏の太陽の下、熾烈に二人は互いを感じあい、奪い合った。

第三十四話「女郎お鈴」

「俺はそうして、お鈴と度々会うようになった。心を傾けた」

淡々と、無表情で語るとらいち。しかし、けしてとらいちに寂寞な思いはないだろうと、ひばりは察していた。とらいちの目はどこか、幸せそうだ。

つんと、喉が痛む。どうしてだろう、ひばりはいつしか沈み込んでいた。泣いてしまいうだった。

とらいちを幸せにする女がいる、その事実がひたすらに苦しい。どうして、どうしてだろう？

「でもその人は、他の男の人に、抱かれたんでしょ」

ひばりが切り返す。とらいちは刹那、口を真一文字にしてから、
「それには、理由がある」

僅かに動揺した、重苦しい口調。

「枯れ草も舞うようになった頃か。俺とお鈴は何度も会った。

勿論、主人には秘密にしていた。主人は江戸の質屋では大きい方だった。手を回せば、お鈴の奉公する見世を潰すことだって出来た」

あの男は、あからさまな嫌悪を噛みしめながら、とらいちは言った。血走る目、感情の発露。だがそれは一瞬のことだった。

すぐにとらいちはあの、深い闇色の瞳に戻って、また抑揚のなく語り始めた。

爪痕のような朧月が暗闇に漂っている。

吉原羅生門河岸は岡本屋の、くびれた、形の悪い看板を確かめながら、みとらは青ざめた。

先ほどまで懸命に足を動かしてきたせいで、息は上がり血が上っていたというのに、嘘のように冷えていく。

「こんな切見世に……？」

信じられない、信じたくないという、虚脱感が湧き上がる。懷疑心が希望を求めて、お鈴の顔を浮かべる。

それは青天の霹靂だった。いつものように花を持って、お鈴の奉公する小料理屋へと足を向けた。
しかしそこに見慣れた暖簾はなく、覚えのない看板が掲げられていて、お鈴ばかりか働いていた奉公人たちは全員、いなかった。

何故こんなことに。

齒がゆい思いに身を焦がしながら、みとらは岡村屋の張見世からお鈴を探した。

張見世は見世先についた格子で囲まれた部屋で、そこには今宵買える遊女が座している。格子が半ばしかない。最安値の見世だ。揚げ代は一分にも満たないだろう。

胸が切り裂かれる。見つけたい、見つけたくない。

涙を堪えながら視線を横へと流していく。遊女たちは殆どが中年で、不恰好な姿をしている。芸を忘れて春を売るようになった転び芸者も混じっているかもしれない。

こんな場所に彼女がいるはずない。

祈るように端まで見やって……、
みとらはどつと安堵した。

お鈴のような若い女はいない。白粉が厚く騙っていても、そればかりは隠せない。お鈴はいない。

胸を撫で下ろし、息をつく。長居は無用だ。

みとらは踵を返そうとして、しかし行く手を阻まれた。

「あんた、女を買いに来たのか」

品もなく顔を歪める、客呼びの男がそこにいた。さっと、みとらは頬かむりで顔を忍ぶ。

「女を捜している」

「吉原で女探しだなんて、稀有なこと。どんな女だ」

「奥州の生まれで、そばかすがある」

さつさと話を切って立ち去りたかったが、誰何された手前、下手に悶着する危険は避けたほうが良い。いるはずがないと思いつつ、みとらは言葉を結んだ。

興味をなくして別の男を掴むかと思いきや、

「ああ、いるよ」

岡本屋の看板を指差された。

「新しいのが売られてきたんだ。二階へあがりな」
再び背筋が凍る。

「嘘だ」

「嘘？　嘘だと思うなら、二階におあがりよ」

男が挑発的に唇をあげる。

みとらは怖気立ちながら、張見世の脇にある入り口を確かめ、足を踏み入れた。

狭い土間から下駄を脱ぎ、階段を上がる。どこもかしこもボロボロで、一段上がるごとに悲鳴をあげる階段は、今にも朽ちてしまいうさだ。

上るうちに、嬌声がねつとりと鼓膜に張り付いてきた。夜見世が始まったばかり。普通の見世ならば、まだ酒を注ぐ時刻だというのに。

つんと酸っぱい匂いが漂っている。

階段を上がりきった先の二階には、目を疑う光景があった。廊下には襖がなく、大部屋がなんの隔てなく開け放たれている。

その中に汚れて破れかかった衝立やら屏風やらが並べられ、狭い区画をつくっていた。

狭い柵の中で、汚い身なりをした男女が恥ずかしげもなく身体を重ねている。

鳥肌が自然とたつ。醜悪で卑しい。まるで家畜小屋だ。雅も芸もなにもない、ただ性欲を満たすための引付部屋。

ここに彼女がいる？

「どうしやした、旦那。若い娘は奥ですよ」

だみ声に背中を押される。苦渋を噛み締めつつ、みとらは一步を

進めた。一步、また一步と。

そうしてあつという間に突き当たって、卑屈な空間を見下ろした。絶望が全身を突き崩す。間違いなく、彼女はそこにいた。

呼ぶための口は動いたが、声は出なかった。彼女もまた同じで、啞然とみとらを見上げ、硬直した。

「御代は後でよろしいです。じゃあ、可愛がってやって下さい」

下賤に背中を押されて、みとらはふらふらと、煎餅布団に膝を下ろした。しばしの間、互いを見つめる。

お鈴の髪は乱れて、着物も乱れて、足は淫らに腿まで露出している。

一体、一晩に何人を相手しているのだろう。何人に股を開いているのだろう。

憤りが身体を縛り、みとらはひたすらに俯き続けた。先に声を繋げたのは、だから、お鈴だった。

「とらさま、どうして……」

声は風邪をひいたように掠れていた。こんなに乱暴に扱われて、こんな劣悪な場所に閉じ込められて。

高ぶる熱は、みとらを突き動かした。お鈴の手を掴み、ぐっと引き寄せる。

「言つな」

思いは残酷なまでに伝わっている。みとらもお鈴も無言であるが、なにを考えているかは手に取るようにわかる。心から、身体の底から怯え、震えている。

見たくなかった、
見られたくなかった。

「料理屋が潰れたと訊いて、探し回った。やっと噂を聞いた。吉原の岡本屋だと。藁にすぎる思いで来た。

言わなくて良い。何も言わないで。お願いだから……」

見世の形を繕うために、どうしてお鈴がこんな目に合わなければならぬのだろう。

彼女は故郷を離れながらも懸命に働いてきた、それなのに、まだこれ以上の不幸を望むのか。

憤怒と悲壮が鬨ぎあい、みとらの身体を食っていく。強烈な怨恨が溶岩流のように燃え、脈という脈を逆流していく。

果てのない激昂の最中。高波にさらわれてしまった心は、翻弄される果てで、ある思惑に触れる。

唐突にその考えが、閃いた。

「お鈴、良いことを思いついた」

傷ついた愛しい人の身体を抱きしめながら、囁く。

「買いに来る。身請けするんだ、俺が」

「とらさま……？」

「金なら、あるんだ」

思いついたのは、正しい道から外れる行為。けしてやってはなら

ないと戒めていた悪行。

「お鈴のためなら……」

主君だって、裏切れる。

第三十五話「駆け、落ちる」

質屋のどこに金庫があり、どこに錠を外すための鍵があるのかは売られたすぐに知っていた。

ただそこから金を拝借することはしてはならないと、いや、するはずがないと思っていた。

主君を愛していないわけでは、けしてなかったから。

五十両を包んだ和紙を懷に、西村屋を後にした。罪悪感はない。ただ使命感だけが胸をせいだ。

あの爪痕のような月はどこにもない。

雲ひとつ無い朔の夜を駆け、吉原へと舞い戻る。

深い闇色に染まった河岸を背後に、岡村屋の一階に飛び込む。

岡村屋の間取りは楼閣としては極めて典型的である。座敷に台所に風呂に便所に、一番奥に楼主の部屋。

不躰に、みとらは襖を開いた。楼主は女の上で腰を振っていた。淫らな腰使いをとめて、情けない格好で瞠目している。

「お客さん、見世は二階にありますか」

「知っている。遊女を身請けしたい」

啞然とする楼主を尻目に、慥然と言い放った。

「身請けには幾らかかる」

「……遊女の年季に金十五両」

みとらは懷から百両を包んだ和紙を取り出し引き千切ると、十五両をばら撒いた。目に鮮やかな金色が飛散する。

小気味よい金の音に、楼主が恐る恐る一枚を手にして、噛んだ。
本物の金だと定めると、反射的に十五両をかき集め始めた。

楼主に抱かれていた女はいつのまにやら着物を羽織って、まじまじとみとらを注視し、何か言いたげにしている。

「なんだ」

睨みつけると、

「もしかしてあんた、とらさまと言いますかい」
「知っているのか」

訝しげに眉を顰めるみとらに、嬉々とした表情を見せると、女は部屋を飛び出した。

慌しく廊下を去ったと思いきや、今度は二階に上ったのか天井から埃が舞うほど物音をたてて、再び戻ってきた。
その小脇に、お鈴を抱えて。

「……とらさま？」

お鈴は足元に散らばる小判など気に留めず、恬淡と呟いた。

「すっかりおし、お鈴ちゃん。あんたの好きな人が迎えに来たんじやないか！ ええそうだろう、旦那さん」

破顔しながら女が目配せする。みとらは、強く頷いた。

「少し待っていて」

楼主人の首ねっこを掴んで、立たせる。

「主人よ。あと、幾ら必要なんだ」

「へえ、確か……、二十両」

もう二十両を、みとらは足元に投げやる。

「で、あんたを殴るのには一両で足りるだろうか」

「へえ？」

最後の二両。それが畳に転がると同時に、みとらは楼主を力任せに殴った。楼主はばたりと腰を落とすと、その場に泡を吹いて気絶してしまった。

「あらあらあら！ やっちまったね。まあこっちは何とかしておくよ」

女は口元を隠しながら楼主の傍に膝をつくと、お鈴に面を向けた。
「短い間だったけど、楽しかったよ。身体には気をつけるんだよ。
みとらの旦那、どうかこの子を宜しくお願いします」

深々とみとらに、頭を下げる。

みとらも頭を軽く下げると、手に残った十四両を懷に戻し、お鈴の手を握った。

女はそれを見て静かに微笑むと、楼主人の腰巻に結ばれた鍵を取って、錠前のついた箆笥から小さな紙を一枚取り、みとらに差し出した。

「これさえあれば、女も大門を通れます。四郎兵衛番所の男に見せなさい」

受け取って、みとらは丁寧になを懐へとしまつ。

「行こう」

「でも……」

みとらの言葉に、躊躇うお鈴。

「ほら、早く行きなさい。でないと楼主が起きちまつ」

「すみません、姉さん」

「良いのよ。落ち着いたら遊びにおいでね」

そう言つて、女はふふふと笑つた。

みとらとお鈴は見世を後にし、手を繋ぎながら外へと向かつた。女のいったとおり紙を出し、大門を無事に通り抜ける。

見返り柳を過ぎ、二人して、堀に沿つて歩んだ。

月のない、提灯もない。他人のもつ灯や、家々から漏れる光を頼りに進む。薄暗い夜道だというのに心は晴れやかで、澄み切つている。

「ここらへんで、良いだろうか」

大川のたもと、漆黒の中に水の流れる音がする。船頭たちの、小節のきいた歌が花を添える。川の上にはいくつかの小舟があつて、蛍のように泳いでいた。

暗闇に目が慣れてきて、土手の上に二人して腰を下ろす。そうしてしばらく、穏やかに肩を並べて、大川を眺めていた。

「とらさまの手は、温かい」

「お鈴の手が冷たすぎるから」

手と手を重ね合わせ、互いの温度を確かめる。しつとりと汗ばんだ手と、冷たく華奢な手と。まるで何年も何十年も寄り添ってきた夫婦のように、じつとそうしていた。

やがて、穏やかな時、柔らかな空氣に身を委ねながら、閑話休題に話を切り出したのは、みとらだった。

「お鈴、俺は今、あと十四両を持っている」

懷から小判を出して、みとらはお鈴へと傾けた。

「これで故郷に帰るんだ」

その言葉に押されてか、お鈴の寂しげな横顔に、涙のひと雫がともった。

お鈴には、みとらの言わんとしていることが解かってしまうのだから。だからぽつんと、問いが出た。

「どうして、どうしておらにそんなことをなさるんですか」

「お鈴が好きだから。好きになったことに、好きであることに、理由が必要？」

なんの澁みなく返される言葉に、お鈴はようやくみとらへと向き直った。その目からは滂沱と、涙が流れ始めていた。

「そうじゃなくて。とらさまはこれからどうなさるんです。それは、西村屋の旦那様から盗んできたお金でしょう。そんなことをなさったら、とらさまは」

責めるように悔いるように、お鈴はみとらの胸元に手のひらを押し付ける。

いつから、みとらの計画の結果に気付いていたのだろう。彼女はしめやかな憤りに胸を焦がしているようだ。

「大丈夫だよ」

安心させるために、お鈴の背中に腕を回す。

「そんな酷いことにならないから」

しとやかに諭すみとらに、

「とらさま、おらは口べらして売られたんです」

お鈴は、打ち明け始めた。

「おらの故郷は貧しくて、食べるものがない。みんなして、ずっとひもじい思いをして暮らしているんです」

みとらは素直に、聞き入る。

「だから売られたとき、おらは死ななくて済んだと想ったもんです。そればかりか、お腹いっぱい食べさせて貰えて、お話きかしてもらえて」

割られた口は訥々と語る。

「お江戸の人は、優しいです。その中で、とらさまが一番優しい。そんなとらさまが、おらのせいで酷い目にあうのは、耐えられません。」

それにもう、とらさまがいなければ、おらは生きていられない気さえするんです」

静謐が二人を包む。お鈴はみとらの胸元に埋めていた顔をあげて、涙に潤う目を差し向けた。

「後生です、とらさま」

刹那の時、見詰め合う。短い間が、二人にはまるで千秋にも感ぜられる。いつしか、逃れられぬほど恋慕の鎖は絡み合い、二人を半身としていた。

「一緒に逃げてくれませんか。おらと一緒に、逃げてはくれませんか」

第三十六話「修羅の愛」

浅葱色の朝靄に光が差し込み始めた早朝、みとらはひとり、西村屋にいた。

お鈴と駆け落ちするのだと腹を決めた上で、彼がこのように戻ってきたのには、理由があった。金が足りないと、思ったのだ。

自分が今、手にしているのは十四両。これさえあればお鈴は国に帰れるだろう。

しかし二人で主人の目をくらまして逃げるとなると、話は違う。一体どれほどの金が必要になるのか、幼く、一人で生きたことのないみとらには検討もつかなかった。

お鈴には、すぐに戻るから待つようにとだけ言ってきた。見世の者たちが眠っているうちに金をとって、早々と二人でどこかへ逃げるのだ。

幸い、見世はまだ冷たく、しんと静まり返っている。

みとらはそつと、物音をたてないように足を滑らし、主人の寝室から再び鍵を盗み出した。注意をはらいながら、慎重に事を進める。

金庫部屋の前にひざまずき、鍵穴に鍵を差し込んだ。金属の擦れる音さえ漏れないように手を添えて、ゆっくりと回す。回しきってから、鉄格子の扉を開け、奥にある最後の鍵も解く。

圧迫感を持った暗がりが見とらの前に現れる。

ここで踏みとどまれば、まだ引き返せるかもしれない。大川に残したお鈴を捨て、主人の寝室で眠りなおせば、折檻はされるだろう。

が裕福な明日を迎えられるだろう。
少なくとも、年端もいかない若者同士での駆け落ちよりは遙かに苦
勞せずに済む。

激動にこのまま身を任せるのか。

答えは明白であつた。

紙に束ねられた小判の山、その中からひとつ摘んで、彼は懷へと
忍ばせた。

これで完全に、主人を裏切つた。今日からは陰間ではなく、一人
の男として女を愛し、守っていくのだ。

「お前は、馬鹿者だ」

何の前触れなく、重く沈んだ声がみとらの背骨を殴つた。血の氣
が、みるみる内に引いてゆく。振り向かなくとも、誰が背後に立っ
ているかは瞭然だ。

身体が知っている。

「……旦那様」

「そこで何をしているんだ。それ以上、何をするつもりだ」

西村屋の旦那は、仮面のように固く冷たい表情で、みとらに問う
た。酔つたように締まりのなく、蝶よ花よとみとらを溺愛するばか
りだつた中年男は、そこにはいなかった。

「旦那様、俺は……」

「俺？」

ぴくりと、旦那が眉をあげる。

「わしのみとらは、もつと良い子だろう」

調教された身体には重すぎる威圧。

旦那は面容を頑なにしたまま、みとらへとにじり寄る。両手を広げ、歯だけを見せる。

それが笑みだと分かって、みとらは身の毛がよだつのを感じた。

「旦那様、み、みとらは……」

冷酷で禍禍しい所作で迫られ、身体のコから凍える。

怖気が走るといふのに、屈従してしまう。隅々まで恐怖に蹂躪される。強姦される。

「よしよし、そんなに震えるな。わしはそれほど怒ってはいない。

賢いお前がそんなことをするものだから、驚いたただけだ」

脂ぎった手がみとらを掴み、恐ろしい胸元へと引き寄せる。

「可哀想なみとら。ただの気の迷いだろう？」

「か、堪忍どす、旦那様、みとらは……」

懐柔させられてしまう。

「そうだよ。お前は騙されているんだ」

このまま抱かれてしまえば、みとらは旦那を籠絡させることが出来るだろう。旦那にひれ伏して股間のものをしゃぶりあげて股を広げて誘い込んで丸く慰めて絶え間ない肉欲に身を投じて。

情事の喜びが染み付いた身体が絶望に陥落する。

が、寸でのところでお鈴の顔が過ぎつた。
途端に恐怖が晴れ、頭が冴える。

「旦那様」

「なんだい？」

「どこまでがあなたの策略ですか」

「なんのことかね」

旦那がみとらから身体を離して、破顔する。

口元は柔らかなのに、目は寒月のようだ。こうして人を、嵌めていくのだろうか。

「知っていて、手を回したのでしょうか」

どうして気付かなかったのだろう。よくよく考えれば分かることだ。あんなにも繁盛していた料理屋が、夜逃げ同然に暖簾を外すわけがないのだ。

奉公人たちが借金形の形に売られる先が吉原だなんて、切見世だなんて、出来すぎている。

「今頃か。お前はやっぱり、馬鹿者だな」

気付くのが、あまりにも遅すぎた。

「だがまさか、お前が見世の金を盗もうとするなんて思わなかった。女を抱くと無駄な度胸が生まれるな。やれやれ」

鬼蜘蛛のような男は、にたりとしながら、みとらの頬を両手で包んだ。

「馬鹿者だが、わしはお前が可愛くてたまらないのだよ」

「触るな」

みとらは俯き、呟いた。

「俺に触るな」

「みとら、お前は騙されているんだ。あの女は汚い。田舎育ちのおぼこに見えて、ああやって男を丸め込んで骨抜きにするんだ。

女郎が、今頃は吉原で男どもをくわえて、むせび泣いておるわ」

卑劣な男の謀、まんまと食わされ、お鈴を吉原に売らせてしまった自分。

一本の残酷な線が繋がり、みとらは絶叫した。

「汚い手で俺に触るな！」

一気に旦那から距離をとり、勢いあまって小判の山にぶつかる。金の音が下品に響く。

よろめきながらも、みとらは更に叫んだ。

「あの人の何を知っている！俺の何を知っているんだ！お前なんか反吐が出る。反吐が出るんだ！」

咆哮をあげて、みとらは怒りのままに小判の山を振り払い、ひと掴みを旦那へと投げた。

ひるむ旦那に、

「死ねば良い、お前も俺も、死んでしまえば良い」
よたよたと歩み寄る。

「殺してやる、お前なんか殺してやる………！」

掴みかからんと、みとらは床を蹴った。

激情に爆発した身体はもう止められなかった。憎悪に満ちた手が旦那の袂に触れ、握りこむ。

その時、風を切って何かが一閃した。

「ひっ」

旦那が引きつった声をあげる。

その両手に小刀を認めながら、みとらは壁に背中を打ちつけた。拍子に、懷に忍ばせていた小判が音を立てて床に落ちた。

「何を……」

疑問を口にした瞬間、血の雨が降った。

視界が赤く染まって、眩暈を覚える。床を血が濡らしているのを横目にして、それから、燃えるような熱が。激しい痛みが襲った。

「あああああ……！」

裂帛に似た雄叫びが轟く。大きな雫が足元に滴る。流血を抑える手は、傷の形をなぞらい、すぐに顔全体を覆う。

斬りつけられたのは、美貌。みとらがみとらであるための刻印。

「お前が、お前が悪いんだ……」

自分がしたことに慄く旦那の手から小刀がこぼれる。

しかし、みとらに逆襲する意思はなかった。強烈な痛みと共に、全てが終焉なのだという達観が彼を貪り、憤怒も殺意も崩壊させる。

「お前が、お前が悪いんだ……」

真紅に眩む視界の中、みとらはその見苦しい披瀝を置き去りにして、一步を踏んだ。

思考は痛みによって途切れている。朦朧としながら、ふらつく足を伸ばす。

「お前が悪いんだ……」

終わりを告げる声が鳴り響く中、みとらは何処ぞへと歩き出した。

第三十七話「命拾い」

混濁しきった世界で、身体だけが鉛のように重たいと感じた。その感覚はそのうち不快感へと変化していき、全身の細やかな変化まで針のようにみとらを刺し始めた。

顔が痛い、背中が痛い、頭がかゆい、小便が出そうだ、ああ、腹も減った……。

薄く開眼する。紗幕のような視界は、ゆっくりと鮮明になっていく。覚えのない天井が広がっている。

「ここは……」

存外に弱い声が出る。一体どれほど眠っていたのだろう。

「起きましたか」

聞いたことのない、気楽そうな男声。鈍った頭で

「起きた」とだけ応えてから、みとらは勢い良く上半身をあげた。

「誰だ！」

みとらが布団に寝かせられている座敷、その奥にある板敷きの部屋で、ちやぶ台に本を広げる人物がいる。太つちよの髭もじゃで、頭の鬘は禿げかかりで崩れている。

「貴方こそ誰かと？」

「俺は……」

「とらさま！」

愛らしい声が響いて、お鈴が廊下から顔を出した。

「とらさまとらさまとらさま！」

とらいちの膝元へと飛び込む。

「す……」

愛おしい人の名前を発しようとして、だが、激烈な痛みがそれを阻んだ。鼓動に合わせて松明を当てられているような痛み。頭を抱え込んで、みとらは呻いた。

「とらさま、あんまり触ると傷が開きます」

「そうだ。何針縫ったと思う。さつさと寝れ、黙って寝れ」

みとらの顔にはぐるぐると、布が巻かれていた。勘が正しければ、この男がやったに違いない。縫ったとなると、

「蘭、学者？」

「机かじり虫と一緒にしないで頂きたい。私は蘭方医です」

むつつりと男は言い放つと、

「田村孝臣と申す。貴方様は西村みとらでよろしいか」

みとらは素直に首肯など出来なかった。西村の金を盗んで斬られてきた。もう西村の名を名乗るつもりではない。西村から貰った名も名乗るつもりではない。

「……とら」

「ただのとらか？」

「とら……いち」

適当に結んでみる。お鈴は膝元でみとらを窺い、覚ってくれたのだろう、にこりと蘭医に微笑んだ。

「はい、とらいち様です。ただのとらいち様！」

蘭医はしばし考えるように眉間を歪め、髭を引っ張る。そして軽く頷いた。

「よろしい、とらいち殿。なにか聞きたいことはあるかね」

「俺はどうしてこの場所に？」

「大川に散歩へ行きまして。血まみれで倒れているとらいち殿、そしてお鈴さんにお会いしました。急いでこの診療所に連れてきた次第です」

「そうか。……かたじけない。金を置いてすぐに出て行きます」

答えてみると、蘭医は俯瞰し長嘆息した。

「すまない、お鈴さん。とらいち殿と二人にしてくれないか」

お鈴が素直に立ち上がり、奥へと引っ込んでいく。どうしたことかと警戒していると、蘭医はちゃぶ台を押して立ち上がり、座敷の敷居を踏んだ。

そして、

「お尋ねしますが、お金などどこにあるのですか」

問いただされて、おもむろに懷をまさぐる。そこで、はたと気付いた。持っていない、と。金庫部屋での悶着によって、こぼしてしまっていた、と。

「訳ありでしょう。お金もなしで何処へ行くおつもりか知りませんが、若い二人の身空、一人は顔をぐるぐる巻きにしている男。目立ってしまうでしょうね」

青ざめる病人に、蘭医は追い討ちをかけるように言葉を繋いだ。

蘭医の言っていることは正しい。今の状態は目立ちすぎる。もし西村屋が追っ手を差し向けていたなら、まず、お鈴もろとも捕まってしまうだろう。

察知したことを踏んでか、蘭医は口元を柔らかくあげた。

「しばらく、この診療所にいなさい。木は森に隠せというでしょう。なら人は、江戸に隠れてしまった方がよい。下手に閑所周りをうろうるするよりは、見つからないと思うが」

驚いた。なんてお人好しな医師だろう。

絶句して、穴が開くかと思うほど凝視する。

蘭医は照れたように髭を引っ張ると、

「食事や治療代については気にしないでいい。お鈴さんは家事を手伝ってくれているし、男の独り身、助かることが多い」

一言付け加え、

「私はそれなりに、信用がおける男だよ」

第三十八話「もつれ合つ傷」

どれほど長く昔話を聞いているだろう。夜見世の殷賑が本格的に鎮まり始め、外からは冷気が吹き付けてくる。

ひばりが寒さにぶるりと痙攣すると、とらいちが火鉢をひばりの膝元に押しやった。

「そうして俺は、田村先生に出会った」
ひばりは遠慮なく火鉢に手を当てる。

「とらいちに薬を売らせている人？」
「そうだ」

「診療所に、とらいちは住んでいるの」
「ああ、根を張る予定はなかったんだが。冬を越えたら診療所を出て行こうと思っていた」

「どうして、残ったの？」
「それは……」

再び、思い出す。あの頃の記憶を、あの頃の思いを。今へ通じる過去へと。

二人で逃げ出した季節を越えて、江戸には霜が下り始めていた。蘭医は診療所を運営しながら、蘭学を研究し、実践しているようだった。ただの腹痛から牛痘まで診察する彼であったが、扱う薬といえは漢方だった。

元々、家が漢方医をしていたらしく、蘭学や西洋医学を書物で学

びながら、そこから漢方へ独学で共通項を探していた。

そのために、二階建ての彼の診療所の庭には、多くの薬草や漢方薬に使える木々が育てられていた。冬を前にして寂しげになった庭を、手入れする役目をとらいちは与えられた。

かじかむ手で丹念に、草木に病気がないか見回る。

土は腐っていないか、水を撒いたほうが良いか、草木の量は足りているか。そんなことを書物片手に確かめっていると、清涼な空気によつて心が穏やかになる。

とらいちはこの作業が好きだ。昔から学ぶことや働くことに喜びを感じる性分であったが、植物について知識をつけるということは初めてのことだ。

植物は自然科学、そして西洋医学に繋がっていく。書庫に入るところを許されて、ますます好奇心は膨らんでいくばかり。

知識というものは一本の大樹のようなもので、どれほど興味をもつて知識を得ていっても限りがない。

畑の上に広がる水溜りに、澄み切った空の藍色が映りこんでいる。俯瞰してみると、自身の顔が映った。

塞がり始めた傷は大きい。瘡蓋かさぶたの川は醜い赤茶に変色していて、なんの心積もりが無い者が見たら、あからさまに目を背けるに違いない。

布を払い、鏡を手にしたときの最初の衝撃は、身を裂くようなものだった。女々しく号泣し、情けなく罵られる夜もあった。それが一月で、胸は痛むものの、少しは受け止められるようになった。知的な深淵はいつしか、陰間としての喪失感をも拭っていた。

春になればここを立ち去るだろう。それまでに、吸い込めるだけの知識を吸い込みたい。

ああでもきつと、この穏やかな気持ちは、学問による喜悅だけが起因したものではない。

「とらさま」

家事がひと段落ついたのか、お鈴が小走りに診療所から出てきた。

「もうお寒いのですから、あまり外に出ては毒です。先生も無理はするなど言っていたでしょう」

「ああ、そうだな」

とらいちの面容を見ても、お鈴の態度は変わらない。そればかりか、傷の心配をし、細やかに労わってくれる。とらいちという男の人生に付き合ってくれる。

一人で逃げ出してしまえば良いのに、彼女はけしてその道を選ばない。

そのことがどれほどの救済となっているか、彼女は知っているだろうか。伝わっているだろうか。

踵を返すお鈴。

結い上げた髪、少しの乱れ髪が絡むうなじ。愛しくなって、とらいちはそのと、お鈴に手を翳した。

「や……っ」

途端に、お鈴が振り向き、勢いよく後ずさった。

「ごめん」

反射的に謝り、手を引つ込める。

お鈴は自身の両の手で身体を掻き抱きながら、しばし呆然と、とらいちの所作を見据えた。

「とらさま……」

縮み上がるお鈴。その目に涙が薄く浮かんで、とらいちは咄嗟に取り繕った。

「気にするな。俺は何も傷ついていない」

嘘だった。それでもお鈴を安心させたかった。

「さあ、今日の晩御飯はなんだろう。鈴の手料理は、美味いからな」

苦い感覚を噛み砕いて笑顔にする。お鈴はそれを見て、俄かに安堵し、再び診療所へと歩き出した。その背中は華奢で、少し痩せたような気がする。

とらいちが負った傷は深い。しかしながら、女郎生活がお鈴に与えた傷はそれ以上に根深い。

彼女が吉原の切見世に売られてからというもの、二人はひとつになったことがない。手を繋いだり、軽い抱擁をするのがやっとで、女を感じさせる部分には触れたことがない。

「ねえ、とらさま」

「なんだ」

「もし、鈴が病気になったら、迷わずお捨てになって」

時折、こんな寂しいことを、言う。

「じゃあ、俺が病気になったら捨てる？」

「そんなこと、けして」

「なら、俺だって同じだ。けして鈴を手放さないから、ずっと傍にいてくれ」

言葉に嘘はない。伝わってほしい。

お鈴はもう悲しい唇を閉ざしてしまって、ただ肩だけ震わせて歩く。少し距離を置いて、とらいちもついていく。

愛が変わらない自信はある。何度も何度も好きなように抱かれてきた身体がやっと思つた憩いが、お鈴なのだ。他に愛を捧げようと思う人物など、けして存在しえない。

例え、もう一人、吉原に売られた過去を持たない鈴が現れたとして、選びはしない。

ゆるぎなく、愛している。

だから、ただひたすら、お鈴が思いつめないように願う。お鈴の心が自分の態度でもどろくことのないようにと戒める。

どんなことがあろうと心だけは離れはしないと、強く誓っていた。

とらいちはいつの日か、診療所を離れ、二人で平穩に過ごしていくだろうと思っていた。

お鈴が心変わりをする日は来るかもしれない、それでも、暫くは愛を紡いでいられるだろうと考えていた。心を乱す変調などあるはずがないのだと。

……思えばお鈴は、予兆のようなものを、感じ取っていたというのに。

第三十九話「誓い」

それは唐突にやって来た。少なくともとらいちには、唐突以外の何物でもなかった。

雲の重たげな夜のこと、お鈴が高い熱を出した。

とらいちは桶に水を入れて、冷やした布を絞って、布団に横たわるお鈴の額に置いた。苦しげで熱い吐息の匂いが部屋に充満している。

「先生、お鈴は大丈夫ですか」

お鈴の細腕から脈をとっている蘭医に訊ねてみる。蘭医は渋い顔をして、溜息をくゆらせた。

「分からない。季節の変わり目であるし、ただの感冒かもしれない。お鈴、なにか覚えはないか」

お鈴は頬を赤くし、薄く汗をかいている。荒れた声は苦しそうに、
「先生と二人に」と揺らめいた。

頷き、とらいちは一人、廊下へと出た。

しんと冷えた床を踏みしめて、声の届かぬ場所へ出る。外には雪がちらついていた。

女特有の病気かなにかなだろうか、お鈴には覚えがあるのかもしれない。月厄は思いもよらない状態を引き起こすという。

ぐるぐると黒い風車が腹で廻る。それに応じるように右往左往し

ていると、話を終えたのか、蘭医が襖を開ける音がした。目が合い、急いで駆け寄ると、より苦渋に染まった顔が目飛び込んだ。

「……とらいち、心して聞くんた。何があっても、お鈴を責めるなよ」

鉛のような声色に、一瞬うろたえる。

「……はい」

「約束できるか」

「はい」

一体どういうことだろうか。それほどに重い病なのか。緊張しながら、覚悟を決めながら、とらいち言葉を待った。どんなことを言われても耐えられるように。

しかし、それら構えは簡単に打ち砕かれた。

「瘡毒かさづくだと、お鈴は言っている」

身体が血の気を失う。

「そんな」

瘡毒とは、男と女が身体をひとつとすることですつる病だ。十年のち身体を蝕み、命を奪っていく。治ることは、ない。

強気な気概は崩れ、悲壮のままにとらいちはその場に膝をついた。

「鳥屋についたとの自慢の客を、何人も相手にしたと。だから、なつたのだと」

「そんな馬鹿な」

ひざまずき、蒼白に呟くとらいち。だが、彼の中では、髭鬚と浮

かぶ過去の事柄が是を記していつていた。思えば思うほど、そういえばということは、あった。

何度か夜に求めたとき、彼女は静かに拒んだ。それは男に対する恐怖に寄るものだと言われ、納得していた。本当にそうだったのだろうか。

またいつぞやは、もし病気になったら捨てて欲しいなどと言われた。恋における不安から口にしたものだと思っていた。そうでは、なかったのだ。

お鈴は予兆を感じて、とらいちを思つて、行動していたのだ。

消沈するとらいちの肩に、蘭医が手を置いた。

「とらいち、よく聞くんだ」

そして更に耐え難い言葉を、放った。

「お鈴と別れなさい」

耳を疑う。とらいちには信じられなくて、啞然と、蘭医を見据えた。

「何を言うんですか」

「瘡毒は夜伽でうつる。聞くところによると、お鈴とお前の関係は純潔だったと。いいか、お前はうつってはいないんだ。お前は若いんだぞ」

「なにを！」

怒りが脳天を突く。衝動的に、とらいちの右の拳を上げた。

しかし天に掲げられた拳は落ちることはなく、ぶるぶると白く震えるだけだった。ひとつの思念が拳をとどめたのだ。

「……お鈴が言ったんですか」

蘭医は何も答えない。それが真実を結ぶ。とらいちが立ち上がった。

「ならん」

止めに入る、蘭医。とらいちが緊迫する蘭医に向き直ると、

「先生、大丈夫です。お鈴を責めません。酷い目には合わせません。だから、話をさせて下さい」

穢れのない誠実な瞳を傾けた。

ぐつと蘭医が言い淀み、腕の力を脱する。とらいちがそれを擦り抜けると、廊下を渡って襖に手をかけた。

「お鈴、入るよ」

すうつと襖が開き、熱の匂いがとらいちを抱く。お鈴は廊下に背を向けていた。

「ずっと気付いていたんだろう」

弱弱しい背中に投げかける問い。

「知っていて、懇情するのも拒んでいた。そうだろう」

一拍の間。お鈴は口を閉ざし続ける。ならば、

「俺は別れない」

「とらさま」

正直に繰り出すと、お鈴が小さく呻いた。儚げな後姿が、小刻みに震える。

「いけません、おらは」

「瘡毒だから？ そんなことが理由になると？」
とらいちは一歩を踏んだ。

「お鈴、俺は貴女にどれだけ救われたと思う?」
尋ねながら、そつと布団の脇に座る。

「俺は愛を注がれて育った。何人もの寵愛を受けて育った。けれど、俺の魂まで愛してくれた人がいただろうか」

流暢にとらいちは語った。ずっと思っていたことは、なんのしがらみもなく、とらいちの唇を動かす。

「お前は、綺麗だった顔を怖いと言ってくれたね。俺はその言葉が悔しい反面、すごく、すごく嬉しかったんだ」

長々と話すことで顔に大きく出来た瘡蓋が少しかゆくなる。構わず、とらいちは言い切った。

「救われたんだ。意味がなくなえた日々に、貴女は一筋の光だった」

お鈴の背中を見て、その目はどうしても穏やかになる。強くなる。

「俺だってそうだ。貴女の魂を愛したんだ。身体じゃない。病気がなんだ、俺が愛したのは魂だ。明るく笑い、魂を愛してくれるお鈴。こんな傷を負った男を愛してくれるお鈴。貴女だ」

男の目を、真に注ぐ。

「俺は貴女に救われているんだよ、今も。変わりなく、救われ続けている」

とらいちの視線の先、お鈴の震えは次第に大きくなっていた。そして嗚咽を噛み締めるような痙攣が。

「傲慢な男だと思いかもしれない。でも俺は、貴女を愛している」
手をのばす。骨の大きくなり始めた手のひらで、布団を撫ぜる。

「ねえ、鈴。こんな俺でよかったら、振り向いてくれ」

お鈴は振り向かなかった。両の手で顔を覆っているようだった。
わななき、号泣をひた隠し、呟く。

「もったいない。もったいないよ、とらさま。おらは汚いんだ。こんな女と一緒にいて、なんになるんです」

こんな時になって、いじらしい。

堪らなくなつて、とらいちは布団ごとお鈴を抱きしめた。
後ろから強く引き寄せ、

「汚くなんてない。とてもとても、綺麗だ」
囁いた。

「熱が下がったら、雪を見よう。春になったら、桜を見よう。
秋になったら、枯れ木に山の賑わいだ。また冬になったら、今度
は温かいものを一緒に食べよう。」

……お前としたいことがまだ、沢山あるんだ。きっと、きっと何
年かかっても足りない。百年あつても足りそうにない」

夢を語る。口にはしていなかったが、ずっと胸にあつた夢を。

「お前のために生きたいんだ。ねえ鈴、許してくれる？」

お鈴は何も言わない。ただ、振り向いた。

潤んだ目には涙が、緩やかに絶え間なく流れている。

「ねえ鈴、笑って」
柔らかな希求。

お鈴はようやく頷くと、薄く、小さく、少し困ったように、微笑んだ。

第四十話「馴染み」

瘡毒は熱が収まると、暫くは落ち着く。

とらいちは頭を下げ、お鈴を見てもらうために診療所に住み込みで働くこととなった。診療所の手伝いに加えて、薬を売って回るように言われた。

膝の悪い年よりの家や忙しい家々を回って、薬箱に薬を補充し、とらいちを介して診察をする。暇があれば医学書と辞書を開く。そうしているうちに、蘭医ほどではないが、とらいちにも医の心得のようなものが出来てきた。

「いつもすまないねえ、とらさん」

常連様の玄関先、薬箱をつめ終わり、とらいちは腰を上げた。年老いた婆が見送りにと下駄を引っ掛けるのを制して、

「無理するな、お婆」

「いやいや、悪いねえ、悪いねえ」

掌を合わせられる。

こういう風に感謝されるのはどうにも苦手だ。苦笑いで踵を返そうとすると、玄関口に佇む少年が目に入った。

鼻水を垂らし、睨むようにこちらを仰いでいる。

ここ数年で、とらいちの背は劇的に伸びた。

匂いがないものや脂の少ないものという風に陰間として食事に気をつけることがなくなり、調子に乗ってお鈴の手料理を腹いっぱい食べているからかもしれない。筋肉も大分ついてしまっている。

もう鏡で身体を調べるような習慣はないが、熊のような風体なのではないかと思う。

顔の傷も加わって、すっかり恐ろしげな男なのだろう。

人は容姿で善し悪しを決める。

とらいちを見ただけで怯え、或いは絡んでくる。遠巻きに、まるで猛獣を見るような目を向けられる。

嫌われた経験がなくて少し苦労したものだ。
だが最近では慣れてきた。こんな風に。

「があお！」

とらいちが去り際に振り向き、両の手をあげると、

「あぎゃああああ！」

悲鳴をあげて少年が尻餅をついた。

すぐさま這って逃げ、老婆にすがりつく。

老婆は腹を抱えながら、少年の頭を撫でた。

「お婆を大事にしろよ」

齒をにやりと見せて、家を出る。

薬を詰めた荷を担いで、長屋の並ぶ路地を進む。時折、江戸に響く鐘の音を頼りに、時間を推測した。

「早く終わったな……」

水無月。梅雨があけて、そろそろ夏の賑わいだ。当然、日もまだ傾きそうにない。

「寄るか」

考えを巡らして、とらいちは歩を速めた。

蘭医の勧めで、とらいちは吉原にも薬を売り歩いてた。瘡毒は吉原に多い。必然的に、吉原には瘡毒に詳しい者が集う。

医学はまず、情報収集だ。知識をもつて、症状から病を判断し、治癒を促す。

気は向かなかったが、お鈴のためになることならばと仕方なく通い始めた吉原も、もう慣れたものだ。

大門を通って、吉原は大海屋の門をくぐった。

「頼もう」

裏手から入ると、小さな禿を仁平が肩車であやしているところだった。とらいちを見やって、そろりと禿を下ろす。

「よう、とらいち。久しぶりだな」

「ああ。三船はいるだろうか」

「残念だな。丁度出て行ったところだ。まあ、ゆっくりしていけよ。そのうち帰ってくるだろうから」

仁平の言葉に甘えて、荷を降ろしていると、覗き込むような視線を感じた。見やると、仁平の足に隠れて禿が凝視している。

「あんまり見ると嘔むぞ」

嘔いてみると意外なことに、

「あい、すいません。お富士どす。よろしゅう」

丁寧に頭を下げられた。これには素直に感嘆する。

「驚いたな。小さいのに度胸がある」

「つか佐のこの禿だ。気位がめっばう高いぞ」

けらけらと笑う仁平。と、そこに手が伸びてきて、仁平の耳をきゆうつと引つ張った。

「いてえ、いててて！」

「うちの禿に変なこと教えるんじゃないよ」

噂をすればなんとやら、つか佐であつた。風呂上りの濡れ髪を流して、どこか流麗である。着物の間から覗く谷間がいささかだらしないが。

「この間新造から上がったと思いきや、もう禿持ちか。おめでたいな」

とらいちはつか佐に微笑んだ。つんとすます、つか佐。矜持なのか、どうにもとらいちには素っ氣無い。

「さ、お富士。行くよ」

「へい」

つか佐はそう言つて、立ち去ろうと廊下へと足を滑らした。それを一目見て、とらいちにある違和感が走った。

「もし」

「何よ」

とらいちに向けられる冷やかな目。全く物怖じせず、とらいちは荷から薬袋を取り出して、ぱんと投げた。

つか佐は反射的にそれを受け取ると、

「なんの真似だい」

「足を捻ったんだろう。薬草だ、湿布にでも使え」

つか佐はひくりと眉の片方だけ動かすと、

「金はないよ」

「禿持ちになった祝いだ、少ないがな。無理はするな。お前は身体が弱いんだから」

忌々しげに、むっとしながらも、つか佐は謙虚に薬袋を帯にしまいこみ、くるりと背を向けた。

歩き出すその足使いは至ってまともであるが、ほんの僅か、普段では見られない癖がある。足を庇って歩いているのだ。

そのまま去るかと思いきや、つか佐はふいに立ち止まって、
「……ありがとうよ」

呟き、階段を上っていった。少しばかり、耳たぶを赤くして。

「天邪鬼、か」

「はあ？」

「こつちの話だ。ところで仁平」

「なんだよ」

「見世にいるのだから、遊女の足くらい見ておけ」

「あ、あんなの分かるかよっ」

仁平は唇をひよつとこよろしく突き出した。

とらいちはそんな仁平に、玄関先に並べられた下駄のひとつを持つと、差し出した。裏側を晒して。

意味が分からず、仁平が眉を八文字に曲げる。

「医学でもなんでもないがな、分かりやすいのに履物がある。履物ひとつ見ただけでも、人がなんの病を持っているか分かるぞ」

「下らねえ。粹じゃないね。女々しく履物を見るなんてよ」

「そうか。いずれにしろ、お前は不寝番なんだ。惚れない程度に遊女を見とけ」

助言するトラいちに、仁平は腕を組み、にたにたと悦喜した。

「おあいにく様、この目じゃあ見たくても見えねえ」

「今度、お前にも良いものを持つてくるよ。眼鏡といって、役にたつ」

さらりと言葉を返すトラいちに、ついに臍を曲げたのか、仁平はふんと顔を逸らした。

「気取りやがって。てめえの施しなんぞ、誰が受けるかよ」

その時、丁度からりころりと下駄の音色が響いてきた。その足使いに、仁平がぴくんと反応する。

「三船だ」

筋は良いんだがな……と、トラいちは唇だけあげた。

第四十話「馴染み」（後書き）

読んで頂き有難うございます。ケータイ小説を書いて三年くらいになりますが、短期間でこんなに書いてるのは初めてです。これも評価や一言感想、ご投票下さる方のお陰です。

物語も後半ですが、最後まで楽しんで頂けるよう頑張ります！

【瘡毒】

瘡毒とは、梅毒のことです。

直接接触、通常は性交により伝播される急性および慢性の感染症で、症状には四期あり、三期になると抗生物質でも治癒が出来なくなります。

鳥屋につくなどと言い、梅毒の女郎を抱くのは粋、一流だとされていた時代もあったそうです。なぜ鳥屋といったかと言うと、髪の毛が抜ける様子が鳥みたいだったからのようで……。

それにしても昔は不治の病だった梅毒をそんな風にいうなんて、昔の人は現代人と感覚が違います。

梅毒自体は、日本では江戸後期からよくみられるようになりまして。海外ではコロナブスが流行らしたなんて俗説があるそうですが、なににせよ記録上はかなり新しい病のようです。

【走れない】

江戸時代以前の人は走れませんでした。手と足をばらばらに出すという行為、いわゆる“ねじり歩き”が出来なかったため、富国強兵の折りには大変苦労したそうです。

走るという行為は飛脚などの急ぐことが仕事の人の特殊技能で、特に農民などは走ることが難しかったといわれています。

お陰様で汗ばむ鳥籠は“走るシーン”が極端に少ない構成となっております（笑）。

第四十一話「忘却の轍」

とらいちとお鈴、極めて平穏な日々を送っていた。医学を知れば知るほど、触れれば触れるほど、治るかもしれないという薄い希望が木漏れ日のように心を照らす。

しかし、それが希望を望む故に起こる一種の盲目であることも感じていた。少しずつ擦れ、確実に何かは崩壊していた。

お鈴の全身に赤い点が浮かび、頭皮にまで回って髪が僅かに抜けた。

しばらくして、顔面が山のようにでこぼこと膨らむ。ぶよぶよと水疱とも違う異常な感触を持った出来物が身体の節々に出来る。

骨も折れやすくなった。

痛みに我慢強いお鈴も、この頃に入るとよく泣くようになった。とらいちは慰めたくて抱きしめる。

そうしていると不思議と、これは現実ではないのではないかと呆けてしまうことが時折あった。

こんな愛の結果を望んでいたのだろうか、これは悪夢じみていやしないかと。

思い、その度に罪悪と後悔がとらいちの胸を責めやった。それはお鈴といたうちにも疼くようになり、まるで深く肉に埋もれてしまった棘のようだった。

動くたびに、息をするたびに、棘は刺さる。ずく、ずくと。

意識をしないようにしていたが身体のどこかは思い知っている。

次第に理想と現実が、誓いと思いが乖離していつているのだと。

「とらさんよ、なんだか人相が変わったね」

診療所で馴染みの患者にそう言われて、とらいちは息を詰めた。

「どう、変わったろうか」

「どうって……なんだかなあ、前と少し違うねえ」

大工仕事をもう何十年と生業にしている頑固親父で、どちらかというと喋るのが得意ではない患者は、口をへの字に曲げてそのまま噤いでしまった。

魚の骨が喉に引っかかったような感覚を飲み込みつつ、とらいちは玄関先で患者を見送り、診察室へと戻った。今日の昼間はもう、診察する患者は一人だけだ。先ほどの患者から手渡された礼金を蘭医に渡したら、お鈴の様子を見に行ける。

「よろしいですか」

襖を隔てて向こう側へ声を投げると、一拍おいて

「よろしい」という返事がきた。

襖を開き、膝をついたまま部屋の敷居を越える。中では、女性患者が上半身だけ着衣をはだけていた。

浮き立つような白い肌が飛び込んできて、とらいちは少し目のやり場に困った。ほどよく肉のついた背中、そして斜め後ろから僅かに窺える乳房は大きく、はち切れんばかりにふくよかだ。

意識しなくとも、目に入ってしまう。

なるべく見ないようにと俯きつつ、早々と礼金を蘭医の傍に置いて、とらいちは診察室を出た。

心臓が妙に跳ねている。股間が僅かに熱っぽい。

自分はまだ二十を超えたばかりの若い男なのだ、仕方ないと思いつつも、思うとやりきれない気持ちになる。意識してしまうと駄目だ、出したいという生理的な欲求が高まる。

お鈴とは何年も“して”いない。

「……馬鹿な」

とらいちは呟いた。

女にも性欲はある、辛いのはお鈴だって同じだ。なにを傲慢なことを思っているのだろう。二人で決めた道ではないのか。

急に悔しくなつて、とらいちは些か乱暴に歩を進めた。

早くお鈴に会つて、声をかけて、そのまま薬売りに出よう。やるべきことは沢山ある。身を投じていれば、なんともなくなる。

渡り廊下を早々と渡り、とらいちは庭先に出た。庭ではお鈴が、咲き誇る花々を愛でている。そうして心を安らかにしているのだ。

「お鈴、仕事がひと段落ついたよ」

腰を軽く落としながら、顔花を指先でつつく、愛しい後姿。とらいちはお鈴に大きく呼びかけた。

「はい？」

お鈴がゆつくりと振り向く。顔の半分は腫れがひいていて、少し機嫌が良さそうだ。

とらいち嬉しくなって、今朝の話をしようと口を開いた。

「おめえさん、誰だべが」

が、声は喉に留まった。

「おらあ、お鈴だけど、おめえさん……」

お鈴が首をかしげ、きょとんと澀みのない目を向ける。その嘘のない、純な瞳に、言葉に、とらいち言葉を失った。

「俺は、お前の……、いや、貴女の……」

頭が混乱する。毎日毎日出会っている顔を、自分が忘れるわけがない。間違いなく彼女はお鈴である。

しかし奇妙なことに、どのお鈴だろう、という感覚が浮かんた。今日会ったお鈴なのか、数年前のお鈴なのか、お鈴の中にお鈴が重なる、遊離する。無数のお鈴が、とらいちの言葉を惑わせる。

身体感覚が薄らいだ。まるで、白昼夢のように。

「あんれ……？」

お鈴にも、なにかの違和感があったのか。彼女は開いた手の甲をおでこに当てると、眉を曇らせた。

「とら、さま？」

そよ風が庭の草木をなぶる。ほんの少しの静寂に、戸惑いの顔。

病いに蝕まれて少し細く潰れている目が潤む。そして一筋、涙の線を描く。

ゆっくりと、頬を、顎を、流れて堕ちた。

「なんで……いやっ、いやぁ！」

お鈴が絶叫し、庭の向こうへと走り出す。華奢な手を伸ばす。指の先には、鎌。

とらいちは寸でのところで後ろから抱きすくめた。お鈴の手から鎌がこぼれ、地面に突き刺さる。

「離して、離してください！」

「落ち着くんだ鈴、落ち着くんだ」

「お願い離してえ！」

痩せ衰えた身体のどこからそんな力を、と思うほど、お鈴の力は強固であった。

とらいちは全力でお鈴を掻き抱き、なんとか鎌から引き離す。

「とらさまを忘れそうになった、とらさまを、とらさまを！」

とらいちの耳元で弾ける獣じみた悲鳴、咆哮といっても差し支えない。

鼓膜を悲痛な叫びが埋める。それでも制止する腕を緩めるわけにはいかない。

号泣が轟き、お鈴の口が大きく開く。

閉じられんとした刹那、とらいちが右の四指を差し入れる。噛み千切らんばかりの力と痛みが、とらいちの親指以外の指に襲いかか

った。血が滴る。

お鈴は自害を阻まれた舌を懸命に動かし、小さく唸る。すすり泣く。

「お願いだ、死なないで。お願いだから」

とらいちらは必死の思いでお鈴に囁きかけた。何度も何度も呟き、お鈴の背中を自由な左手で撫で擦する。

次第に、お鈴の荒い呼吸が納まり始めた。お鈴が激しく咳き込みながら頷くのを認め、とらいちらは指をひき抜いた。

「とらさま……」

涙にまみれたお鈴の顔は、驚愕に固まっている。強い哀惜が弱る身体に食らう前にと、とらいちはお鈴の顔を胸元へと寄せた。

「大丈夫、少し調子が悪かったただけだ」

伽藍とした慰め。無意味で、なんと無力なんだろう。

視線を落としてよく見やると、お鈴の着物には血が滲んでいた。とらいちの血ではない。

悶着した際に、弱った腕の皮膚や背中中の皮膚が破れたか、崩れてしまったのだろう。障子紙などよりずっと、彼女の身体は脆いのだ。

絶望はこんなにも進行していた。そのことが、とらいちをさいなむ。無駄な慰謝を繰り返しながら、二人抱き合い、愕然とする。か弱く震え続ける。

胸元に埋もる愛しい者の涙の、なんと熱いこと。そして冷たいこと。激情に翻弄されるお鈴は、小さく、とらいちに訴えた。

「殺してください」

逼迫した懇願はとらいちを強く穿つ。心が揺れる。だが、理が許さない。生きることの渴望にひれ伏す世界は、許してはくれない。

そして若い愛情もまた、それを超えるのは恐ろしい。

「殺して……殺して……」

切なる思いはとらいちの内へと木霊し、深淵へと沈み込んでいく。また棘が増える。流すことの出来ない血の涙を生んで、心を赤く染め上げる。

鈴を宥めながら不意に思った。

ああそうだ。笑わなくなったのだ、と。

第四十二話「崩壊」

お鈴の様子は日に日に悪くなる一方であった。

記憶が部分部分、抜け落ちていく。それが積もり積もって、まるで今というものを知らない人間にする。

家事も出来ない。ただ寝るか、彷徨うか。性格も変わっていき、以前のお鈴からは考えられない言動をするようになっていた。

「おめえだれだあつ！」

とらいちを見るなり、お鈴はそう言い放つと、ふらふらと歩き回ろうとする。

「鈴、こつちだ」

「知らん、あべ」

まるで狐にでも憑かれたように、行動に一貫性がない。狐に疲れていたほうが、まだ良いかもしれない。

思つて、戒める。看病できるのは自分しかないのだから。

「鈴、そつちは外だ。危ない」

庭を越えようとするお鈴の前に出て阻むと、お鈴はじろりと油っぽい目玉でとらいちを射った。そして小さくわななくと、咳をしながら、ううと泣いた。

「おらをいじめる、いじめるよお」

とらいちの胸がぐつと痛む。心を穏やかにさせてやりたいが、お鈴を慰めることなど出来ない。

頭を撫でたり、抱きすくめたり、それらの愛のある行為は、とらいちを忘れたお鈴にとって今、脅威になってしまっている。

「おつかあ、おつかあはどこお……」

むせび泣くお鈴に、眩暈を覚える。

彼女はこれからどうなっていくのだろう、自分はこれからどうなっていくのだろう。

とらいちは惑い、目の前が曇っていくような気分になった。そう言えば、ここ何日も眠っていない。体力はすでに空になりつつある。

無意識に過去のことを思い出す。お鈴と過ごした日々のこと、病気が発覚して誓いをたてた日のこと、お鈴の自害を抑えたこと。

ただ沸々と浮かび上がり、とらいちは立ち尽くした。

「とらいち殿！」

と、庭先から蘭医に声をかけられて、とらいちが診療所のほうを見やった。そこには蘭医と、小脇に見知らぬ青年がいた。

「少し話がある。彼は蘭医の卵でね、ちょっと彼にお鈴さんを任せて、診療所のほうへ来てくれないか」

「はい」

すれ違い様に青年を横目にする。彼は真意が汲み取れない仮面の笑みでとらいちに会釈すると、お鈴のほうへと駆けていった。

早く話を済ませよう。とらいちが診療所に入ると、玄関先、蘭医が腰をかける前に立つ。

「話とは？」

とらいちから切り出すと、蘭医は腕を組んで、眉間に皺を寄せた。あまり良い話題ではないらしい。多分、お鈴のことだろう。

「単刀直入に言う」

いったん、深く呼吸をし、蘭医は言葉を継いだ。

「しばらく暇をやるから、お鈴さんと離れなさい」

耳を疑う。

「先生……、ご冗談を」

「冗談ではないよ」

蘭医はきっぱりと言い切った。

一緒にお鈴を看病して来た者として、正気の沙汰ではないと思う。とらいちは湧き上がる怒りを抑えつつ、

「俺はそんなこと出来ない。それに俺がいなくなったら、誰が鈴を看るんです。放っておけば、すぐにいなくなるのに」

「心配しないで頂きたい。離縁しろと言っているのではない。間を置けと言っているのだ。知り合いの蘭医が、少し看たいそうだ。鈴のような症状を出す若い女性は珍しい。つてを回れば、多くの医者が看てくれる」

とらいちの追求にさらりと返す蘭医。あまりのことにカツとなり、とらいちは蘭医に食って掛かった。

「そんな、鈴は見世物じゃない！」

「馬鹿者っ！」

弾き飛ぶ、一喝。蘭医は立ち上がり、とらいちに迫った。

「このままでは共倒れだ、その事実をいい加減に受け止めるんだ」
他人をねじ伏せる、強い語気。とらいちはずいぶん口を閉じた。青ざめ、屹立する。

「とらいち殿だけではない。私とて、もう限界なのだ」

蘭医は俯き、唇を噛んでから、再びとらいちに向き直った。

「辛いのは今だけだ。今でこそお鈴さんは外へ逃げ出そうと躍起になるが、そのうち歩けなくなる。

食事もあり取らなくなり、ついには寝たきりになるだろう。そうなるまで人に預ければ、君も看病をしやすくなるんじゃないか」

「なんてことを、言うんだ」

「まだ言いたいことはある。貴方はお鈴さんが死ねば良いと思ったことはないか」

「それは……」

深く、蘭医の言葉がとらいちの心臓を抉った。その言葉を否定することなど、とらいちには出来なかった。

お鈴と対峙すればするほど、過去のことか思い出され、現実を揺り動かしている。それは後悔に酷似していて、耐え難い罪悪、不安となる。

もしお鈴を好きになっていなければと遠い過去の自分を非難し、なぜお鈴の自害を妨害したのかという今の自分を疑う。

その背後に、死を求める気持ちがなかったといえはそれは嘘だ。

自分は、お鈴の死を望んでいる。

落石のように、隠していた事実が身体を押しつぶす。耐えられず、とらいちは膝をついた。

「いいか。このままお鈴さんと一緒に居続けたら、とらいち殿までも狂う。もしかしたらとらいち殿が、お鈴さんに手をかける日があるかも知れないんだ」

蘭医が失意するとらいちの肩に手を置く。とらいちは我を失って視線を地面に泳がし、頭を深く垂れた。

「先生、俺は……」

「仕方がないのだ、これは貴方のせいではない。仕方がないのだ」優しい声が軽々しく琴線に触れる。拒絶したいのに、癒されてしまう。そのことが悔しい。悔しくて堪らない。

とらいちはその場に蹲り、頭を抱え込んだ。

そして人生というもの、その奈落の深さを呪った。

第四十三話「ひばりという物」

その夜から、とらいちは診療所を出た。

漆黒には爛々と月が輝き、じつとこちらを見下ろしている。まるで惨めな男を蔑むように。

何がいけなかったのか。最初から恋など、しなければ良かったのだろうか。

迷いは、かなたこなたへ揺ら揺ら動き、定まることはない。ただ幸せであろうと望んだだけだった、そのことが仏も怒髪を晒すほど浅はかだったのだろうか。

罰が下るべき人間は自分だけのはずだ。
どうしてこんなことになったのだろうか。

せめて、お鈴の病気を治すことが出来たなら。

大川を下つていくと、港が広がっていた。暗忽として、水面すらはつきりしない。ただ、水の流れる音がした。

果てのない大海原。人生が川ならば、死は海だろうか。海まで流れていけば、救われるだろうか。

二人で駆け落ちした夜に眺めた川は、こんな暗澹とした海に繋がっていた。

自嘲する。馬鹿馬鹿しい。なにが川か、海か。所詮は水の流れだ。そんなことを思い、お鈴が助かるものか。

「この先には、ただの異国だ」

鼻で笑う。そしてふらふらと歩き出す、が。

「……異国」

暁灯のように、思案が差し込む。貫くような衝撃に痺れ、とらichiは両手で身体をかき抱いた。

「異国。異国……」

絶る藁はまだある。まだあったではないか。

「蘭よりもっと先の医療を金で買えないか……」

女性のために異国に目を向けるなど狂恣だ。しかし困窮する今、それは何よりも素晴らしい考えに思えた。

金を貯めて、お鈴に今よりもっと良い医療を受けさせてやるのだ。時代はやがて変わるだろう。もしかしたら民衆でも海の外へと行ける日が来るかもしれない。

「金だ……金を集めるんだ」

そうだ、金を集める。お鈴の看病をしながらも大金を集める。

なにか、なにか良い方法がないだろうか。

悶々と知恵を巡らすうちに、とらichiが今まで培ってきた経験がひとつの奇策を弾き出した。

身分の低い、醜い男が金を掴むための甘美な夢物語。

狂わずに生きるための、一縷の望み。

彼は決断し、北へと足を向けた。

桜の花びらの一枚が、格子窓の隙間を縫って、火鉢の中へ舞い落ちる。

焦げ臭い匂いを放ちながら花びらは黒くくすんで、ただの灰と化

した。

ひばりは燃え尽きた花びらに視線を流し、自分の中で蠢く感情がなんなのか惑っていた。心臓を抉り、内臓を翻弄する狂おしい熱。これは怒りなのか、それとも悲しみなのか。

「金になると思って、特に白子を探した。奥州まで行って、ようやく金になりそうな子どもを見つけた。お前だ。お前で賭けをすれば、三船から楽に金を搾り取れるという算段だった」

「わっちは……」

「お前は、物だ」

「そう」

ひばりは無然と呟いた。

そうだ、自分は物なのだ。ひばりは、かつて吉原への道中で知ったことを、改めて思う。

ずっと物であり続けたのだ。とらいちが賭けをしているのは知っていたのだ。それがどうして、こんなにも苦しいのだろう。

「俺の話はこれでおしまいだ。どうする。賭けを奪うかどうかはお前次第だ」

どうして、こんなにも。

「賭けは……」

ひばりは心から言葉をこそぎ取る。

「わっちはただ、知りたかった。それだけのこと」

口を動かしながら、まるで他人の意思のようだと思う。どこか薄っぺらだ。

こんなにも五臓六腑に感情が渦巻いているのに、どうして素直に唇から出ていつてはくれないのか。

壊れてしまわないようにと願って、事実を求めた。しかし事実を知った今、より壊れてしまいそうな自分がいる。

「ひばり」

とらいちが名を呼んだ。

「俺を殴りたいか」

ひばりは火鉢から、真っ直ぐ、とらいちを見やった。

とらいちは凝り固まったいつもの仏頂面で、両腕を広げる。まるで誰かを抱きしめようとするかのように、大きく。

「吉原に売ったことを怨むのならば、俺を殴れ。それでお前の気が済むのなら、殴れ。俺はお前には謝らん。気が済むまで怨め」

ひばりは口を閉めた。

自分でさえ戸惑っている感覚をこんなにも簡単に、とらいちは見透かすのだ。

怨みつらみを覚り知られて、ひばりは自分の中の熱が瞬く間に萎んでいくのを感じる。

とらいちが何をするでなくとも、自分はきつと死ぬか売られていただろう。流れ流され、辿り着いた先が吉原であっただけのことだ。とらいちを殴る腕など、どこにあるう。

「殴りんせん」

ひばりは言い切った。

「最初から、物だと知っていたんだから」

感情のこもらない言の葉が、風とともに去っていった。

第四十四話「生きるも死ぬも」

暗がりに姉新造の調べが遠くから聞こえる。膝を折って正座をしつつ、その音だけ掬うようにしていると、間に割り入る声があった。

「ひばり、一寸おいで」

行灯に浮かぶ金屏風、その奥でくぐもる、つか佐の声色。

「あい、何でしょう」

ひばりは膝を滑らせ、屏風の脇へとうつる。そして横から、顔を覗かせた。

屏風を隔てた先には、布団の上で男とまぐわうつつか佐がいた。

豊満な乳房や、ほっそりとした腹を差し出す。股間には男の頭がある。遊女の繊細な部分を舌で舐っているのだ。

「お冷を」

つか佐は男を片手で撫でながら、恍惚とした表情で艶然と微笑んだ。

「あい、お待ちなんせ」

ひばりもまた、微笑を返した。

かつては性交を覗き見、つか佐と目が合ったことで言葉を失ったものだ。しかしながら、二度目は心の乱れることはなかった。

愛想笑いを生意気だとも思ったのか、つか佐は途端に唇を一文字に下げ、男の方へと視線を落とした。

ひばりは、お富士に後を任せつつ廊下へと出た。三日月が爛々と空で輝いている。夏の高い闇に、よく似合って美しい。

佳月にしばし見蕩れてから、進む。夜見世の前に女中たちが用意した水がまだ残っているはずだ。階段を一階まで下りて、渡り廊下を歩く。

角を曲がり、そこで偶然、仁平と八尋の姿が目に入った。

庭先で岩に腰をかけ団扇を扇ぎつつ、談義と洒落込んでいたらしい。

「ひばりじゃないか」

気付いて、八尋がぱつと顔をあげる。

「おひさしゅう」

八尋と会うのは、年の変わった啓蟄の頃以来ではないだろうか。西村屋の一件、あの夜から。随分と音沙汰がなかったように思う。

「おう、ひばり聞いてやれ。こいつ見世を継ぐ羽目になったらしいぞ。なんとあの兄貴、借金作りまわってご隠居に勘当されたらしい」

「仁平、下手なことは言わないでくれ……」

八尋は気まずそうに眉を下げた。

木下八尋。両替屋の次男坊である。彼と親しくなったきっかけのひとつに、ある騒動があった。

売られて初めての夜、宴会の先で、彼の兄は遊女が来ないと当り散らしていた。そのとき、酷い訛りで大立ち回りをして、笑われたのだ。

あの頃の自分はなんて不躰だったのだろう。今ならもう少し、見苦しいところなくあしらえるかもしれない。

「それより」

ひばりがふいに昔のことを思い出していると、仁平が岩から腰をあげた。

「思い出させるようで悪いが、あのこと、本当にすまなかった。子どものような謝り方をしてしまったね」

あのこと、

河童の話だろう。

八尋はひばりに良い話をと、河童のことを調べていた。何故、ひばりの故郷の河童が赤いのか分からないと頭を捻っていて、その答えをひばりは教えた。

河童とは水子なんだと、口べらしに川へと流された子どもなんだと。

彼はまだ、気にしていたのか。

「仁平が言ったように、あのあと、俺は兄の仕事を回されてなかなか家から出られなくてね。……謝らせてくれないか」

「ええのに」

この人はどれほど真面目なだろう。ひばりがきつと傷ついたままだと思ったのか。あしらって誤魔化したのはひばりの方だということに、ずっと考えていてくれたのか。

優しい、けれど、綺麗過ぎる。

「わっちは流れてここに来た河童みたいなもんざんす。お気遣いなく」

自分は河童だ、自分は物なのだ。ひばりは既にそう達観している。情けをかけられるほどのものではない。割り切って接してくれれば良い。ひばりは思い、微笑んだ。

「そんなことを……」

しかし今度の仁平はあしらいに囚われず、酷く困惑したように首を左右に振った。

寂漠として、

「そんなことを言ってしまったら、生きているのも死んでいるのも同じではないか」

生きているのも死んでいるのも同じ。

ひばりは仁平の言霊がしんと自分の腹の中に納まるのを感じた。それはなんの淀みもなく心に浸透していく。

生きているのも死んでいるのも同じ。

いつだったろうか、とらいちは恋をしても無駄だと言った。

鳥籠では報われない。鳥は卵を産めても、その中には何もない。

そうだ、生きているのも死んでいるのも、ひばりにとって同じこと。何も無いのだ。何もならない。無駄なのだ。全ては無駄なのだ。

泣いても何が変わるというわけではないように、熱い心を持っていても鳥籠では空虚に終わる。

ただ笑ってさえいればいい。心をなくして笑ってさえいれば、痛みも苦しみも最初からなかった。あの人も、あの人も、あの人も。なんてことはない。

「失礼しんす。姉に頼れておりますんで。また今度」

ひばりは会話を断ち切るように会釈した。仁平が語れないように背中で拒む。

「ああ、また」

仁平の侘びし気な言葉が、夜闇へと消えた。

第四十五話「ひばりとみとら」

「もう、夜見世が始まる頃合だな」

人々のざわめきに耳をすませて、とらいちが顔をあげた。

いつものように琴を間に面する、昼見世と夜見世の境の時間。ひばりは琴から手を離すと、すっと姿勢を正した。

「少しはまともになったな」

「お陰様で」

そう返事をする、とらいちは腰をあげた。襖に寄り、手をかける。

「今晚は日が終わるまで三船の部屋にいる。何かあったら、来い」

「あい」

ひばりが三つ指で深々と頭を下げる。あげる頃には、とらいちはおらず、閉まりきった襖がどんと佇んでいた。

とらいちの過去を知り、八尋の言葉を胸に納めてからというもの、心は風のない湖畔のように静寂だ。心が壊れてしまったように、とらいちに触れられても感じない。

物だ、河童だと身体の底から悟ることで、本当に死んでしまったかのように心は平穏だ。

最初から、こうすれば良かったのだ。

ひとつだけ、深呼吸をする。

長持に琴を仕舞って、ひばりは見世先へと向かった。

今晚の座敷では、木下の若旦那が知人を連れてくるのだと聞いている。もう謝られることはないだろう。知人を連れてくる建前、ご隠居のようにつか佐の相手をするかもしれない。

それならば少し、楽だ。

「ひばりちゃん、お疲れ様」

お富士が軽く手を振る。

「姉さんは？」

「今、簪を付け足しておる。……来なんした」

流麗な足取りで、しずしずとつか佐がやってきた。そのまますれ違つように座敷へと向かう。その後を、お富士とついた。

「つか佐でありんす。よろしくお頼みしんす」

襖を開け、宴に入る。芸子姉さん方が三味線を鳴らし、小唄を口ずさんでいる。料理や酒に舌鼓をうちながら、それを楽しむ二人の男。

木下八尋、それに……、西村。

「西村様、お初にお目にかかります。つか佐と申しんす。可愛がってくださいまし」

ひばりは記憶の糸を手繰った。西村屋の旦那は菊乃屋のご常連のはずだ。どうしてこんなところにいるのか。

馴染みの客が別の見世に入ったら、つけ断り文という知らせが回る。他の見世に浮気することは認められていない。帰り際の大門に新造たちが並んで、客を責める規定があるほどだ。

連れだといえ、馴染みの見世で肩身の狭い思いをすることは避けられまい。けつたいなものである。

八尋は当然のことながら、つか佐の酌を求めた。ご隠居がいないのだから、つか佐をたて、ひばりの相手をしないのは当然のことである。西村も同じように、つか佐の酌を味わい、話に花を咲かせている。

だがその一方で、ちらりちらりと、ひばりは西村の視線を感じた。気のせいだろうか。

疑問を浮かべつつも、ひばりは芸子への手拍子を始めた。

「ひばりちゃん」

そっと、お富士が小さな声で耳打ちをしてきた。

「西村様を知っていらっしやるの」

「どうして」

「さつきから、ひばりちゃんを見ている」

ひばりの気のせいではなかった。

そっと西村へと顔を向ける。真っ直ぐに視線を注いでいると、西村と視線が結ばれた。

西村の目は、魚のようだった。黒々とぬめり、ずっとひばりだけに集中していたように、揺らぐことがない。正に凝視である。

どうすべきかと迷う前に、ひばりの身体はあしらいを選んだ。からくり人形よろしく、くくっと、頬が緩む。心のない傀儡じみた、しかし表面だけではいつもと変わらぬ笑み。とらいちから学んだ、あしらい。

愛想よく会釈を加えて視線を別の果てへと流す。そうして、ひばりは芸子への手拍子を再開した。

が、三拍も叩かぬうちに、手は空で固まった。

「似すぎている」

鬼の形相の西村が目の前にいた。脈が張り老いも深くなり始めた両手がひばりの手首を掴みあげている。それは紛おうことなく、男の力であった。

「お前は、似すぎている」

西村の奇行に、座敷が声を失う。三味線の音さえ止まり、痛いくらい静けさが周囲を覆う。

「あの日のみとら、あの日のみとら、あの日のみとら。何故お前の中に無数のみとらがいる」

「何を……」

「お前はみとらを知っているだろう！」

罵声がひばりの頬を叩く。手首への力が膨れる。

「答える！」

手首に爪がめり込む。更に強く捻じられ、ひばりは呻いた。

「何をするんですか！」

慌てて八尋が仲裁に入る。引き剥がすべく間に身体ごと出て、西村の手を握りこんだ。五指を割り込ませ、力づくでかかる。

若い力が勝って西村の手が離れた。

拍子にひばりが倒れこむ。八尋はひばりを庇うように前へ一歩出て、両の手を突き出した。

「落ち着いて下さい」

「そこをどいてくれ」

血眼の西村。あきらかに狂気の滲んだ様子で、彼はゆらりと前へ踏み込む。周囲は逆に、緊迫して距離をとる。

「どくんだ、木下。わしが話したいのはその禿だ」

「ならん！ 私はどかない！」

「どけ！」

西村がひばりに飛び掛る。寸でのところで八尋が西村の胸元を掴む。

西村が倒れこみ、間髪いれず八尋を殴る。

血反吐がぱつと畳に散る。

「やつ……旦那様」

ひばりは青ざめ、竦みあがった。

西村の強行は続く。口から血を垂らす八尋の顔面にもう一発放つと、じろりとひばりを睨み付けた。

「逃げるんだ……」

八尋が血の泡で口元を汚す。

しかしひばりはその場にしゃがみこむことしか出来なかった。すっかり、腰が抜けていた。

「答える」

ゆらりと立つ西村。

狂気に染まった面容は、底知れぬ恐ろしさをもってひばりを張りつける。釘でも打たれたように、ひばりは動くことが出来ない。西村が近づいてくるというのに。

全身が激しく震える。奥歯がわななき音をたてる。

怖い、怖い怖い怖い。

「答える！」

西村が身体を突き出す。その腕が急激に伸び、ひばりに襲い掛かる。

ひばりは悲鳴をあげ、助けを呼んだ。

真っ先に浮かんだ、あの名前を。

瞬間。

涙に潤んだひばりの視界が、時を失った。

泥のように現状がゆっくりと流れて、未来を捉えていく。

襲いくる西村、恐れおののく芸子たち、青ざめる姉遊女、朋輩。

重く閉ざされた襖、開かれて、飛び込む影。

西村の脇に駆け寄り、その腹を、蹴り上げる！

音が弾けた。

重い音が響き、西村が吹っ飛び、襖にぶつかる。激しい騒音をたてて襖がはずれ、西村が視界から消える。そして変わりに現れた影。

ひばりはもう一度、その名を口にした。

「とらいち……っ」

第四十六話「決着」

心がどくどくと熱に跳ねる。再び、堰をきって溢れる。
とらいち、とらいち。

「どうして来たの……」

ひばりは自分の目の前にたつ影を仰視した。

「三船から聞いた。これは俺の問題だからな」

とらいちは、無愛想にそう言い放つと、八尋を抱きかかえ支えた。

「大丈夫か」

「貴方は？」

八尋が鼻と口と流れ出る血を手で押さえながら、起き上がる。

「……巻き込んですまない。ひばりを頼む」

とらいちの目は既に、襖を隔てた先にあった。

そつとひばりの方へ八尋を導くと、後退する。外れた襖の向こうから、ずるずると、足を引きずって西村が現れる。鬚は乱れ、夜叉のような面持ちで、首を傾げている。

かっと思開かれた目、その目がしっかたとらいちを捉え、色が、みるみるうちに歓喜へと染まる。

「おお……」

感嘆の声を漏らし、西村はぶるぶると身体を痙攣させた。

「お前は、お前はみとらかい？」

首を反らし、身体をぎこちなく揺らし、喜びに浸る。顔をぐにやりと曲げる。

眉と頬を極限まであげ、目を細め、黄色くぬめった歯を晒す。

「探したよ、ああ、酷いことをしたね。美しかった顔がこんな傷を負って」

「俺はみとらではない」

「何を言う。目に面影があるな。ああ、あんなに美しかったみとら。こんなに醜くなってしまつて、あの女のせいだな」

「黙れ」

とらいちは語気を強めた。しかし、

「臍を曲げているのかい。悪い女に捕まつて、可哀相に」

「黙るんだ」

「こらこら、お前はそんな子じゃないだろう。」

ところでその子はなんだい、みとらにそっくりで、まるでお前の子どものようにないか。まさかあの女と子どもを作ったのか。

そんなわけがないよなあ、あんな切見世で男に回された汚い女、お前が抱くはず」

刹那、べらべらとやまない唇に、とらいちの右手が伸びた。大きい手のひらが頬を掴み、ぐいとあげる。

背の高いとらいちと西村、必然的に、西村は後頭部を後ろに埋め、つま先を立てた。

「やめ、やめなさい……」

とらいちの威圧の前に、西村の舌は止まらない。

「どうしたんだい、みとら。みとらはそんな子じゃないだろう。」

あんなに可愛くて、あんなに愛し合ったじゃないか。毎日、肌を重ねた仲じゃないか。今でも思い出してしまうよ。お前の中は吸い付くようで、果てても果てても欲は尽きなかった。

お前もそうだろう、あんなに鳴いて、わしに縋りついて」
「変わらない屑だな」

とらいちの長めの黒髪から、猛禽のような眼が光る。
怒りに燃えて大きな傷は歪み、こめかみに脈が浮き出る。

「自分の欲に忠実で、身体しか見ない。この下衆が、生きる価値のない下郎が」

嫌悪と憎悪、そして殺意が迸る。とらいちは正に一匹の猛虎となつて、西村に牙を剥いていた。恐ろしいほどの緊迫が周囲に漂う。

とらいちの腕の筋肉が盛り上がり、血管が這う。

「お前、お前はみとらじゃないな……。お前は誰だ」

ついに西村はとらいちの気迫に負けた。恐怖に身体を縮め、惨めに喘ぐ。

「みとらはそんな子じゃない。そんな子じゃない」

西村の膝がぐくぐくと笑い、体制を崩す。

とらいちはぐいっと、西村を片手で持ち上げた。空に浮く西村。押し付けられた口内が歯で傷ついたのか、舌が赤く染まっていく。血の混じった唾が飛散した。

「お前は誰だあ！」

「とらいちだ」

言い捨てる。冷語が座敷にしんと沈む。

途端に、西村はぐつたりと脱力した。

「そんな……、そんな……」

とらいちが手を離すと、西村は情けなく尻餅をついた。力の入らない膝を漸う立てて、なんとか四つんばいになる。

「わしのみとらは何処だ？ わしのみとら、可愛いみとら……」

「何言つてやがるんだ」

失意で赤ん坊のようになった西村へ、とらいちは問うた。

「てめえがあの夜、小刀でばっさりと斬ったのは誰だ。殺したのは誰だ」

淡々ととらいちは告ぐ。

「みとらは死んだ」

引きずる過去と決別するように。

「てめえが、殺したんじゃないか」

ひばりの心は囚われる、八尋の肩越し。

とらいちの輪郭は光に包まれ凜としていて、力強い。そして一方で、哀婉としていた。

ああ、きつととても傷ついている。

ひばりはそう思った。

つんととらいちの横顔が沁みて、視界は涙で霞みがかかる。熱い、心臓が火を抱いたように熱い。

揺らめくひばりの世界で、とらいちだけが鮮明だ。そのとらいちは、はたと思い立ったように首をあげ、ひばりへと向いた。

「ひばり！」

駆け寄ってくる。八尋の隣に膝をつき、ひばりの肩に手をかけた。

「大丈夫か、怪我はないか」

右の手のひらで頭や頬や、そして赤く染まった手首を撫でる。

どこか懐かしい感覚、心の硬い部分を解してしまう不思議な温もり。

いつだってそうだ。とらいちの手は汗ばんでいて、だけど触れているのが気持ち良い。

ひばりは涙でつかる喉を懸命に絞った。

「うん」

「そうか」

とらいちがゆっくりと頷く。とても穏やかな目、安らかであることを望む目。繊細で、過去という棘に傷つき続ける目。

「よかった……」

そっと、安堵と共に伏せられる。

とらいちという主の温もりに緊張が薄らいだのか、ひばりの中に

ようやく恐怖らしきものが湧いてきた。怯え、声を出して泣いてしまふ。

激しい熱がぐるぐると目まぐるしくひばりを巡っている。皮膚の内側、あらゆるところにぶつかる。

まるで肉体という狭い鳥籠の中、暴れる小鳥がいるよう。羽をばら撒き、檻に身体を打ち、どこにもいけないと血を流すよう。

激しい叫びとなって込み上げる、この気持ちは一体、何なのだろう？

こんな思い、必要がないのに。

ああ早く、凍ってしまえば良いのに。

第四十七話「閑話」

西村の一件から、西村は大海屋と菊乃屋のふたつの見世からの締め出しとなった。これから西村が吉原に足を踏み入れることはないだろう。

八尋もまた、西村の真意を知らなかったとはいえ迂闊に連れとして招いたことを反省し、しばらく見世から離れることとなった。

とらいちについては。

蒸し暑い夜、鈴虫の音色が楼閣を包んでいる。とらいちとひばりは三船に呼ばれ、三船の部屋に座していた。

三船は床几に肘をひっかけながら、キセルをくゆらせる。紫煙がふうっと、遠くの闇に消えた。

「今年は逆に、払って貰うことになりそうだね」

「気だるそうな三船の物言いに、

「そうだな」

とらいちはさもありませんと答えた。

「迷惑をかけた」

「まったく。しばらく見世にも来ないでくれ。

騒ぎが外に漏れて、うちは誤魔化すのにてんやわんやなんだ。噂に尾ひれがつくような危ないのは避けたい。騒ぎが鎮まったら文でも出すよ」

「承知している」

「ひばりも、分かったね。あんたはしばらくとらいちに頼らずに修

練するんだ」

ひばりととらいち、そしてとらいちと西村。珍奇な関係はひとたび漏れたら江戸の好奇をさらっていくことだろう。間違いなく大海屋の矜持に大きな傷をつける。

楼主として必然の対応だ。

「話は終わりだ」

三船は嘆息すると、鉢にキセルの灰を落とした。それを合図に、とらいちは立ち上がる。

ひばりも倣おうとして、

「ひばりだけ、少し残っておくれ」

三船に止められ、姿勢を正した。

「ひばり」

去り際にとらいちが一度振り返った。

「情るなよ」

素直に頷く。ぴしゃりと襖が閉められ、部屋にはひばりと三船だけが残された。

「さてつと……」

三船は鉢にキセルを引っ掛けると、適当に床几の上へ乗せる。それからずっと、真顔になおった。ひばりは畏まって耳を傾ける。

「とらいちのことを、全て知ったんだろう」

「あい」

「そうかい」

おでこに手のひらを当てて、三船は悩ましげに眉間を揉んだ。それからしばらくして、熟考を終えたのか、ゆっくりと喋り始めた。

「今回のことは、私も同罪だね。とらいちの昔を知っていて、西村の大胆那を通しちまったんだからね。

浅はかだったよ。まさかあんたからとらいちの面影を見つけちゃうとはね」

「三船おかあさんは、陰間だった頃のとらいちを知っていたんでしよう」

「ああ。不思議だね、あんたたちは顔かたち全く別なのに、どこか似ているんだ」

三船の視線が空を泳ぐ。遠く目を細めて、懐古に耽っているようだ。

「とらいちは湯島の天神とまで呼ばれていた。噂があんまり大げさに思えて見物に行ったのさ。

そしたら、怖いくらい綺麗な生き物がいた。男でも女でもなかった……あれは魔性だね」

「魔性？」

なかなか耳慣れない単語が出て、ひばりは聞き返した。三船はふふと微笑むと、頬に手首を押し付けた。

「まあ、昔のことさ。今は傷に仏頂面だけだね」

ぶつきらばうながら、どこか慈しみの隠れた声色である。とらいちと大海屋の付き合いはそれなりに長い。馴染みとして想うところがあるのだろう。

「三船おかあさん」

「なんだい」

「もしかして賭けをしたのは、とらいちのことを慮って？」

三船が僅かに微笑を固めた。それを誤魔化すように、視線をひばりから外す。

「別に、面白そうだったからさ」

強風が一陣、吹き抜けて格子窓を叩いた。鈴虫たちが警戒して羽音を静める。だがすぐに鈴虫は糸を切って、再び歌い始めた。

「お前は、賭けをどう思う？」

自然がもたらす妙なる歌を背に、三船が問う。

ひばりは間髪いれず答えた。

「さあ、わっちの外のことですから」

「何も感じてはいないのかい」

「あい」

するりとひばりの唇を縫っていく返事。

三船は何か言いたげに口を薄く割ると……そのまま嚙み、ふんと鼻を鳴らした。

「……なら、良いんだけどね」

第四十八話「轍の果て」

時は流れる。季節は押しやられる。

あれほど高かった空も低く沈み、蒼にくすんだ灰色が混じるようになっていた。海から吹いてくる風は冷たさを増して、江戸の街に牡丹雪を降らせる。

人々の歩調は速くなり、その間をゆつくりと、火の用心の声がよく練り歩くようになった。

ぬかるんだ道に莫蔭が敷かれている。莫蔭の上を選んで着物を汚さないように進み、季節の移り変わりを感ずる。木々には緑が落ちて、枝が天に脈々と噛み付く。まるで空が罅割れているようだ。

仰いでいると、しばらく会っていないある人物の顔が頭に浮かんだ。

いつも胸に棘を刺し、世の中の全てを悲観するような仏頂面。大きな傷があつて、恐ろしげな風貌なのに、時折ひばりを見詰める目は繊細で穏やかだ。

西村の事件が招くかと思われた悪しき風評も三船の機転で振り払うことが出来た。

そろそろ、彼がやってくるだろう。

ひばりももう、十三だ。身体はまだまだ未熟だが、芸はだいぶ身についた。外八文字も習い始めた。

彼はなんと、言うだろう。

俯き、足を外八文字にくねらせる。踵から払い、外へ挟るようにして滑らす、八を描いて大きく進む。

もう、転んだりはしない。

意気込んでから、背を僅かにそらせ遠く一点を見つめ、しず、しずとゆく。それは完璧に近い外八文字だった。

しかし数歩進んだところで、足は鈍り、泥に湿った藁の上に沈んだ。

目だけが一点を捉えたまま、大きく開かれる。

「とらいち……」

視線の先に、ぼんやりと浮かぶ大柄な影。ひとごみを縫って歩く、長髪の男。

頑固そうな強面には傷があり、荒々しい印象を人に与える。そのくせ、目は微笑んでいる。

「元気にしていたか」

いつもの通り、不遜な唇。

「今日から見世に？」

ひばりが訊ねると、とらいちはぶんと首を振り、

「見世には行かん」

「そう……。薬を売り来なんしたか」

仕事のことを思い出して納得しようとして、ひばりはとらいちが何の道具も持っていないことに気付いた。

「とらいち……？」

怪訝を含ませ上目を使うと、とらいちはまどろむような面容で返

してきた。

「好きなように生きる」

似つかわしくない言葉に、ひばりは目を丸くする。

「え？」

問いかけると、行き違いでとらいちは顔を上げた。眉間に皺を寄せる。ひばりは、はっと振り返った。

「ひばり！」

離れた場所からこちらへと、誰かが手を振り、大慌てで近づいてくる。月代が蒼っぽく、ふたつの丸い硝子が目を飾る。

「仁平」

「探したぞ！」

「どうなさった」

「どうなさったもこうなさったも、ねえ！」

顔を紅潮させ、と荒く呼吸を整えながら、仁平はひばりの手首を掴み、引っ張った。

「ここじゃあ話せねえ。見せん戻るぞ！」

勢いに圧倒されつつ、引きずられるように仁平の後につく。

軽く肩越しに後ろを見やったが、既にとらいちは何処にもいなかった。まるで忍ぶ者のように、忽然と消えていた。

見世に戻ると、廊下でひそひそと女中たちが談話をしていた。ちらりちらりとひばりを窺う。好奇と、どこか哀れむような表情に、ひばりは嫌な汗をかいた。

西村の騒動が、今頃になって尾ひれを付け始めたのだろうか。

仁平は女中たちを気にもとめず三船の部屋に行き、声もかけずに襖を開いた。中では三船と、つか佐が座っていた。

三船はまた渋い顔をしていた。それはまだ良い、驚いたのはつか佐の様子だ。

大海屋で一番の遊女としての矜持を背に、常々凜とした余裕を醸し出しているつか佐が、蒼白だった。

唇を軽く噛んでいる。今にも倒れてしまいそうな身体を精神で支え、なんとか正座しているように思える。酷く儂く、弱弱い。こんなつか佐を、ひばりは見たことがない。

「来たね」

三船はさつと手を畳に添えた。導きに従って、その場で膝を折る。

「ひばり、あんたにとって良くない話だ」

「西村の旦那の件さんすか」

「違う」

三船の表情は強張っていた。困惑と動揺の色がはつきりと混じっている。

「もっと良くない話だ」

重苦しい空気が部屋を覆う。ひばりは緊張しながら三船の話を待った。三船は言いにくそうに嘆息を二度繰り返してから、ゆっくりと、唇を開いた。

「とらいちが人を殺した」

鈍痛。

何の前触れなく殴られたような衝撃がひばりを貫いた。瞬間的に眩暈を覚える。背骨が氷柱に変わる。

「何、何を……」

激しい戦慄に襲われながら、ひばりは首を左右に振った。信じられない、信じられるはずがない。どうしてもあの男が人を殺す理由があるのか。

まさか。

「お鈴という女を、知っているだろう」

まさか……！

「剃刀で喉を切り裂いて、殺したそうだ」

心臓がひしゃげる。重圧にひばりは手をついた。苦しみに縮む五指に畳が噛み付く。両腕がわななき、上半身すら支えられなくなる。

「ひばり」

仁平が後ろからひばりの背中を擦る。

「な、んで……」

舌が痺れ、千切れる門訊。喉の奥が燃えるように熱く、萎んでいく。肺だけ溺れてしまったように、苦しい。

「街の噂では、邪魔になったとか。詳しくは分からないが、病人を

殺したとあって、大騒動になっているようだよ」

「そんな……」

じゃあ、さっきとらいちが消えてしまったのは、そのためか。仁平に捕まると思って、早々に立ち去ったのだろうか。さっきの、とらいちらしからぬ言葉は、その意味は。

体中が軋み、悲鳴をあげる。

とらいちが殺した、とらいちが人を、それもあの人を殺した。

ぐわんぐわんと叫びは轟き、身体のあらゆる部分を傷つける。頭が痛い。心臓が止まってしまいそうだ。

ひばりは必死に、がたがたと泣く両腕を叱咤して地に伏せまいと堪えた。そうしているうちに、ばたんという大きな音と共に畳が震えた。

「つか佐！」

なんとか顔をあげると、つか佐がぱったりと横に倒れていた。

陶器人形のように唇まで血の気を失い、目蓋を瞑っている。その目から、つうつと涙がにじみ、一本の線を描いて畳の上に滴った。

隠れた恋慕をとらいちに寄せていた、つか佐。その勝気な彼女の魂を、悲壮は引き裂いたのだ。しかし、

「つか佐姉さん……」

彼女は一方で、あの天女のように妖しい笑みを口元に浮かべていた。

第四十八話「轍の果て」（後書き）

いつも作品を読んでいただき、ありがとうございます。汗ばむ鳥籠ももうちよつとでお仕舞いです。そして春エロス2008も……、蛍の光が脳内で響いている中、続きを今も書いています。

たぶん、間に合う、間に合えます……！
ではでは。

四月十八日にメッセを下さった方へ

やっぱりこちらのサブアドの調子が悪いようなので、後書きにて返信させていただきます。

お話も佳境の佳境、ああようやく佳境です。少ない語彙を絞りつつ、なんとか佳境が書けそうです。よろしければ、お付き合いください。

登場人物は、強くなっていきますか？ 成長を本筋のテーマとはしていなかったために、ちよつと不安だったりします。ちゃんと、ひばりが大きくなっていると良いのですが。

完結まであとちよつと、実はまだラストは書いていません。今から書きます。どんな風になるか自分でもちよつと分からないのですが、楽しんでいただけますように！

頑張ります！

第四十九話「恋」

つか佐が臥床してしまった。

事が事であったので、冬終わりに身体を冷やしておこった感冒として、三船の部屋でしばらく様子を見ることとなった。

休み続けて二日、つか佐は更に熱を出したらしく、昼見世もなくなった。

お富士と二人で、いつものように朝を起き、楼閣を掃除して回る。ひばりもまた、つか佐と同じように狼狽しきっている。でも、身体を動かしている方が楽な気がして、いつもより多く掃いては、拭いた。

掃除する部分が綺麗になることで、磨耗しきった心をなんとか繋ぐ。身体は羽のように軽いが、なんとか重心を保っていられた。

「ひばりちゃん、大丈夫かえ」

声をかけられて、少し身体が重くなる。

「ええ、お富士ちゃん。平気」

「無理さんの。つか佐姉さんが倒れたんじゃ、どうせわっちら、今お座敷もないんだから。寝ていたって、三船母さんは何も言わんし
よう」

お座敷がない。そのことに、ひばりは改めて瞠目した。とらいちのことを考えてしまうだろうという恐怖が疼く。

ずっと働いていられたら良い。布団などに入ったら、とらいちで頭が一杯になり、とても寝てはいられない。

昨晩は目蓋を閉じてても閉じなくても同じで、時間をいくら数えても朝が来なかった。そんな夜が、また来るのか。今晚は、耐えられるだろうか。

「ひばりちゃん」

暗鬱に目を瞬いていると、お富士がそつとひばりの頭を撫でた。

「今から、部屋の掃除じゃ。先に行ってちょうだい」

お富士が水桶をもって反対へ駆けていく。

ひばりはお富士に従って部屋に戻ると、雑巾で格子を丁寧に擦り始めた。何度も、何度も執拗に拭いていく。

格子窓の隙間から空風が吹き、ひばりのかじかんだ手を更に冷やす。感覚がなくなっても尚、ひばりは雑巾を格子に押し付けた。

「おまちどう」

明るい一声とともに、お富士が襖を開けた。後ろ手にぴしゃりと閉める。

片手には先ほど持っていた水桶のかわりに、いちまつかすり市松緋の風呂敷包みを握り締めていた。

「それは、何……？」

ひばりの問いには答えず、お富士は屏風を開いて、その裏からひばりを手招いた。まるで忍ぶような所作に小首を傾げつつ、お富士の向かいに座る。

「何をなんすか」

「渡したい物がありんす」

そういつて、お富士は風呂敷の結び目を解した。丁寧に開いたその中であつたのは、着物であつた。茶色にくすんだ、男物。

「仁平が前に捨てたやつ。頬かむりをしてこれを着て、草履を履いて手足を汚したら

……すっかり男になりんす。これで大門を通ったらええ」

訳が分からず、ひばりは啞然として、唇を手で覆った。

「なんで……」

「とらいちに会いたいんでしょう」

「何を、何を言って」

ひばりは喘いで、なんとか内なる否定を探す。しかしその隙を与えず、お富士はひばりを直視した。漆黒の闇に一筋の光をたたえた、意志の強い瞳がひばりを射る。

「誤魔化しては駄目。このままでは、ひばりちゃんはつか佐姉さんよりもっと、悪くなるよ」

「何を」

「とらいちが、好きなんでしょう」

ぶすりと、言葉が突き刺す。

「好きで好きで、たまらないんでしょう」

「お富士ちゃん……、違う」

ひばりは顔を背け、お富士のひたむきな目から逃れようとする。お富士はさっと、ひばりの頬に片手を添え、

「誤魔化さないで」

更に思いを注いだ。

「ひばりちゃんは、とらいちに、恋をしている」

「違う！ わっちはとらいちと主従で……！」

「違うことありません！」

凜然としたお富士の両手が、紅潮するひばりの頬を強かに打った。向き直り、ひばりはお富士の淀みない思いと対峙する。熱く、強く、揺るぎ無い覇気。

「叶わぬ恋だと、ひばりちゃんは自分の目を潰しているだけじゃ。嫌われてしまうと恐れているだけじゃ！
お鈴さんのことを知って、心を閉ざしただけじゃ、だけど」

俄かにお富士の眉が曇る。それを打ち払うように、お富士は小首を振った。

「恋には抗えん。誰も恋には抗えんのよ、ひばりちゃん」

「……恋？」

「そつ、恋じゃ」

恋という一文字が、ぐっとひばりの喉を押す。胸まで落ちていき、腹の底を静かに焦がす。

次第にひばりは、自分の身体の中に湧き上がる熱を感じた。あの時の、耐え難い高温たち。

西村から救ってもらい、声をかけられた時の熱。
とらいちの過去を知りたいと願った時の熱。

羅生門河岸でお鈴のことを知った時の熱。

琴のお稽古で肌と肌が触れた時の熱。

恋を無駄だと言われた時のこと。

花魁道中に姿を見つけた時のこと。

怯えてしまつて撫でられた時のこと。

あの時も、あの時も、あの時も。

そして。

初めて肌に触れられ、自分の価値を知ってしまった時のこと。

いつからか、いつの頃からか、自分はずっと恋をしていたのだ。

飼うものと、飼われるものと、その関係が始まった時から、深まった時から、とらいちちに惹かれていたのだ。

理屈も理由もなく、道理も義理もなく、惹かれていた。

思い、感じ、誓い、願い、恐れ、望み、探し、隠し、壊し……、
ずっとずっと、恋をしていたのだ。

「わっちは、わっちは……」

溢れる熱に翻弄されるひばりの身体を、お富士は抱きしめた。そしてそつと、耳元に唇を寄せた。

「ひばりちゃん、ええかい。わっちら、まだ引つ込み禿でしょう。

朝から御昼間までは、掃除だ稽古だと姉さん方より忙しい。それに今は、つか佐姉さんが寝込んでる。

今なら、わっちが残つてひばりちゃんの分動けば、なんとか一日くらいは見世の目を欺ける」

お富士の囁きが深く浸透し、ひばりは目が眩んだ。しかし、すぐさま我に返る。

「駄目！ そんなの駄目！」

吉原での足抜けは禁忌だ。もちろん、その手助けをした者もただでは済まされない。

記憶が、二年前に見た折檻を手繰る。縄で逆さづりにされ、針を押し付けられた美佐。三船が心の傷をそうして癒していて今より過剰だったとはいえ、足抜けが激しい罰則を与えられる罪であることに変わりはない。

「お富士ちゃん、分かっているの？ そんなことをしたら、そんなことしたら……」

「大丈夫じゃ」

「いけん！ 朋輩だからといって、お富士ちゃんがそんなことまでする義理はありんせん！」

ひばりは叱りつけるようにお富士の胸を叩いた。勢いがあまって、お富士が後ろに押され、手をつく。熱っぽい吐息が互いの頬をなぶった。

「朋輩だからではないの」

畳に足を崩し、両の手を後ろに、頭を垂れて、お富士は呟いた。

「朋輩だからでは、ないのよ」

その声は、くぐもる。

「ひばりちゃん、あのね」

少し乱れた前髪の間から光が一粒離れ、お富士の襟に小さな水たまりをつくる。骨が落ちるような音が聞こえた気がした。

「わっちも、恋をしているの」

お富士が顔を上げる。

「叶わぬ恋を、ずっとしているから……」

潤んだ目は、ひばりに向けられていた。じっと、ひばりに。

「お富士ちゃん……」

雷撃のような確信が、ひばりに流れた。思わず唇を手のひらで押さえる。

過ぎ去った夜、柔らかで悪戯な感触が思い出されて、ひばりは動揺した。そして滂沱と、涙が流れた。

思いは高い音をたてて弾ける。

「……ごめん。お富士ちゃん、ごめん」

ひばりは畳に手を置いて、深々と頭を下げた。それから熱と涙の絡む喉を懸命に絞った。

「出来ん、わっちには、出来んよお……」

深く深く詫び入る。弱さに負けて、痛みを負けて、ずっと見ないふりをしていた。聞こえないふりをしていた。多くのことを、知らないふりをした。

穏やかなあの目が、本当は自分を透かして通り過ぎ、違うものを

見ていたから。気付いていたから、知ってしまったから。

「でも、好きだ。本当は、本当はずっと、ずっと好きだった。ずっとずっと言いたくて仕方がなかった」

号泣し悔いるひばりに、お富士の温もりが被さる。熱いものが後から後から込み上げて重なり、二人をくるむ。

「お富士ちゃん、お富士ちゃん。会いたい、会いたいけど、出来ないよ……！」

泣く。

「会いたいよお……！」

第五十話「真実」

連日泣きすぎて目が腫れぼったく、疼痛がある。

昨晩は赤ん坊のようにまた泣いて、お富士に背中を撫でてもらい、
ようよう眠りについた。

途切れ途切れ、水に濡れた薄紙のような淡い夢でも安寧をもたらす吉時である。軽い倦怠感はあるものの、少しは体力が回復した。胸の熱はまだ温度を保ったまま渦を巻いているが。

「あ、いたいた」

と、仁平に呼び止められた。仁平は軽快に廊下を渡り、ひばりの前にでんと立つと、指で膨れた目を突いた。

「ひでえな、後で水風船でも当ててやろうか」

「なんざんしょ」

不躰な仁平の所作を適当にあしらう。すると仁平は、

「客が来てんぞ。裏に回ってみろ」

裏を指差した。

自分に客など、珍しい。誰だろうと裏へと回ってみると、裏庭で椅子に腰掛ける一人の男が目に入った。

どつしりとして貫禄のある、髭の長い初老の男だ。小奇麗な服を纏い、形良い頭を丸めている様は、重鎮の雰囲気かいきやくを放っている。

しかしながら腰をかける椅子が小さすぎて、どこか諧謔かいぎやくの風も呈していた。

「こんにちはあ、ひばりさんす」

「これは。可愛いお嬢さんだ」

男は腰をあげ、頭を下げた。

「お初にお目にかかる。田村孝臣と申す」

覚えのある名だった。確か、

「田村……先生」

「私を知っているのかね」

「とらいち殿から話を」

「そうか。とらいち殿が……」

腕を組み、遠い目をする男。この男がとらいちの心の師ともいえる人物、蘭方医、田村孝臣その人なのか。

ひばりが想像していた人物はもっと小柄で、賢しそうな老人であった。しかしながら蘭医の図体は想像を凌駕し、でかい。

とらいちとどちらが高いだろうと目で測って、心が沈んだ。

人前で泣くわけにはいかず、ぐっと目元に氣力を注ぐ。ただでさえ、唇のように腫れた見苦しい目を出ているのだ。例え不安定な心であっても、泣くわけにはいかない。

「座ってください」

促され、ひばりは蘭医と相對するように椅子へと腰を下ろした。

蘭医はまじまじとひばりを見やってから軽く頷くと、早々と本題に入る。

「今日は貴女に話があって参りました。……とらいち殿のことです」

緊張が走る。ひばりは大きく開眼し、深く吸気を胸に納めてから、相槌をうった。

蘭医はにこりと笑うと、

「とらいち殿は、人を殺めてはおりません」

驚愕の一言から、口火を切った。

「これは五日ほど前のことです。とらいち殿に祝言をあげてはいないが、思い人がいたことをご存知ですか」

「……あい」

「世間ではその方を、別れ話のもつれで殺めたなどと噂しております」

下世話な風評。

「ですが、その思い人は、病に伏せておりました。不治のもので、毎日横たわり、死を前にしていた。彼女は動けなかった……、喋ることも出来ませぬ」

ひばりは胸が切り裂かれるような痛みを感じた。とらいちの愛した人の容態は、そんなにも悪くなっていたのだ。

蘭医は続ける。

「別れ話など、ただの噂です。真相は全く違う」

首を大きく、がえんじた。

「昨晚、とらいち殿の代理として時折、思い人の看病をしている者が白状してくれました。」

彼は彼女の口ひげが伸びていたことに気がついて、剃刀を彼女の枕元に置いたそうです。そこではたと、忘れ物を思い出して、席を

外したのだと」

柔らかな声は次第に、重みを増す。

「彼女が動けるはずないと、彼は思っていた。私も聞いたときは驚きました」

悔悟するように、瞑目する。短く、年のせいでまばらになった睫毛が微動する。蘭医はそうして沈黙してから、再び口を開いた。

「寝室に戻してみると、彼女が自分の手で、剃刀を喉に当てていたそうです。刃は既に深々と刺さり、彼女の周りは血の海だった。しかし、まだ彼女は生きていた」

首を押さえて、

「弱った彼女の身体は、完全な自害を与えてはくれなかったのだろう」

吐露するように。

「血の泡を吹いて、彼女は息をしていた。

息をするたびに首の傷から息が漏れ出て、苦悶の表情で、彼女は生きていた。

あまりのことに、彼は絶叫したそうです。その声を聞いて、とらいち殿が飛び込んできた。

そして彼女を見て、……全てを理解した」

蘭医から聞く、事実。ひばりの中で風評が立ち消え、違和感が崩れた。と同時に、悲哀が募る。

「とらいち殿を駆け寄ると、彼女が持つ剃刀を一気に喉に押し当てたそうです」

そうか、とらいちは。

「介錯だ、介錯をとらいち殿はしたのだ。どんな思いで刃を押し当てたのか……」

声を絞りきり、

「とらいち殿はそれから、息絶えたお鈴殿をつれて忽然と消えた」
蘭医は天へと喉を反らせた。

「看病人はそれを利用し自分の罪から逃れんと、とらいち殿を貶める嘘をついたのです」

田村孝臣、彼の中にあるのは、後悔。防ごうとしたことを防ぐことが出来なかった己の無力さ。

「申し訳ない。真に、申し訳ないことをしました」

蘭医はひとしきり仰ぐと、今度は深くうなだれた。

「とらいち殿は人を殺めておりませぬ。彼はそのような人間ではない。信じていただけないかもしれないが……」

「いいえ」

ひばりは間髪入れず答えた。

「真実を教えてください、有難うございます。わっちは信じます。とらいちを、知っていますから」

知っている。ひばりの知っているとらいちは、ただの色恋沙汰で思ひ人を殺める人間ではない。けしてそんな人間ではないから、ひばりは好きになったのだ。

それはひばりの、紛れもない誇りのひとつ。

蘭医はひばりのきつぱりとした返事に目を瞬くと、ふっと細めた。「今日は、このことを伝える他に、もうひとつ用があつて来たのです」

そうことわつて、蘭医は椅子の脇に置いていた袋を両手にとつて、ひばりに差し出した。

「とらいち殿の部屋から見つけました。この見世の名と、あなたの名がある。重たいですよ」

言葉の通り、達筆に名が刻まれている。とらいちの字だ。

素直に受け取ると、ひばりの腕に思いもよらない重さがかかった。こぼさぬようにと持ち上げると、鉄と鉄が噛み合う音が軽やかに響いた。その独特の、誰もが吸い込まれてしまうような音にひばりは驚き、蘭医の顔を見やる。

「彼は、この見世の楼主と賭けをしていたそうですが……」
まさか。

「彼は一枚も手につけていませんでした。これは、貴女に返そう」
「頂けません！」

反射的に返すと、
「私はもつと、頂けぬ人間だよ。貴女がいらぬなら、楼主にでも渡せば良い」

蘭医はゆっくりと立ち上がった。丁重に丸まった頭を下げる。
「さて、私は用があります故、これにて失礼します。なにかあったらいつでもお呼び下さい。では……」

胸元を引っ張り正して、蘭医は玄関先へと足を伸ばした。去り際に、思い出したように振り返る。

「そうそう、もうひとつ」

一本の指を虚空へ突き出して、

「貴女の出身は、何処ですか」

「……奥州ざんす」

ひばりは布袋をしっかと抱きながら、故郷の名を口にした。

「そうか、奥州。どうりで、めんこい」

意図の捕れない蘭医の言葉に首を傾げる。

「いえいえ。奥州にも白子がいるとは、と思いました」
そういう意味か。了解して、ひばりは朗々と綴った。

「白子は北に多いと、とらいちが申ししておりんした」
「はて……」

ひばりの返答に、蘭医が髭を引っ張る。

「白子は探せば江戸にもおりますが」

不可解なことを言い残すと、
「では、失礼」

会釈し、蘭医はくるりと背中を見せた。

第五十一話「炎上」

「とらいちがこの金をね……」

畳の上に広げられた布袋、口からはみ出た一両小判を一枚摘むと、三船はふうと溜息をついた。

蘭医からとらいちが残した金を受け取ってすぐ、ひばりは部屋で帳簿を観覧していた三船のところへ来て、ことの経緯を語った。

「全く、お前もよく馬鹿正直に持ってきたものだよ。とらいちも蘭医も、お前も、よくやるよ」

「わっちが持つていても、仕方ありません。盗人扱いでもされたら、大変さんしょう」

「こんな大金、どうしてしまおうね。これだけあったら、お前はお前を身請けできそうだよ」

とらいちが残した金は、ひばりでやった賭けで儲けたものより幾分多いものだった。間違はなく、薬売りなどをして稼いだ金も混じっている。お鈴を救うために何年もかけてこつこつと貯めたものだろう。

「とらいちはまた、なんでお前にこんな大金を残したんだろうね」

分からないのは、ひばりの方である。しかしながら、お鈴が死んでしまった今、彼にとってこの金は無意味な代物なのだろう。

死体を抱いて逃げ去るという奇行をした彼の罪が、まっさらに白く晴れることは恐らく無い。

「とらいちは、本当に馬鹿者だ」

三船はぼつんと呟いた。その声色は懸念を孕んで、小さく震えている。何を想ったのか、三船は寂寥に満ちた目をついとひばりに向けた。

「あんたには、言っていないことがある」

三船の眉根は厳しく、冷たい。ひばりは背筋を張って、言葉を待った。

三船の唇が、

「心中死体が……」

思いもよらない話を紡ぐ。

「三日ほど前から、大川に男女の心中死体が浮かんでいる。

……一人は小さい女、一人は」

暫時をおき、

「……顔に傷がある大柄の男だと」

三日、前？

ひばりの中で、最後にとらいちと会った時が飛散する。いつもと変わらぬ、苦虫を噛んだような顔。そのくせ繊細で、愛に満ちた目で、彼はなんと言ったろう。

好きなように、生きる。

三日前。とらいちがお鈴の遺体をつれて失踪したのが四日前。三日、彼は“一人”で忽然とやってきて、忽然と“消えた”。

身体を突き崩す衝動。目の前が白む。とらいちが人を殺したと訊いたときより遥かに激しい眩暈と痺れが花火のように散り、五臓六腑を炙る。そのくせ、手足は凍り付いてしまったように冷たく、汗ばんだ。

「とら……いち……」

ひばりを震撼させる恐ろしい確信。喪失感に打ちのめされ、朦朧と、ひばりは畳に肘をついた。もう終わりだ……。

頑張ることがもう出来ない。生きるも死ぬも同じだと心が泣き叫んでいる。

何も、したく、ない。

ひばりがついに絶望へと墜落する、その瞬間、重厚な鐘の音が、ごおんごおんと腹に響いた。

「なんだい？」

三船が真っ先に反応する。鐘の音は吉原中に轟いているようだった。

分厚い鉄が木で殴られ、罵声を放ち続ける音。江戸に生きる者ならば誰もが心から怯える、地獄からの共振である。

「なんてこった……」

その意味を成すところ、全てを灰燼と帰する。

四方八方を駆け回る足音。鐘の音を背に、吉原のありとあらゆる建物が人の波によって喧騒の塊となる。

しばし呆然とする三船、ひばりのもとに、人一倍大きな足音が近づいてきた。

「三船！ てえへんだ、火事だ！ 京町二丁目、瑞乃屋だ！」
勢いよく、襖を引いたのは仁平であつた。

火事！

一言で三船は畳を蹴つて、格子窓を大きく開け放つた。楼閣の外廊下を右往左往する見世のものをぐるりと見渡し、

「なんてこつたい、今日は客の入りが多いんだよ。客はどうしたんだい！」

「今、逃がしに回つてゐる。他の見世もだ。遊女に禿も順に出た」

「風は？」

「強い。見事な空つ風、羅生門の方からぐるりと回りそうだ。早いぞ。大海屋まで来る。小火じゃあすまねえな」

三船は片掌を眉間に押し当て、息を吸い、吐いた。

江戸の多くの場所がそうだが、吉原もまた限られた区画をぎつしりと埋めている。楼閣やら茶屋やら小料理屋が、殆ど間なく立ち並んでいるのだ。

火がつくと、どんどん燃え移る。周囲を突き崩して回らぬようにと火消しらが奔走するが、こんな乾燥しきつた仲陽では無情にも大きく広がるであろうことは間違いない。

おはぐろどぶが三十尺と広い堀であることから、火の手が吉原を超えることは殆どない。

しかし逆にいうならば、火の手は堀を背として一気に食らいつくということだ。吉原は四角い朱色の箱となつて隅々まで燃えることだろう。

「……地震以来か。ああ、なんてこつたい、なんてこつたい」

三船はそうして、ひとしきり混乱を撒き散らしてから、きつと天井を睥睨し、背を凜と伸ばした。

「ひばり」

「三船おかあさん」

突然の出来事に怯懦と座り込むひばりの両腕をもって、三船はぐいと立ち上がらせた。ひばりは小刻みに震えてやまない足をなんとか棒のようにして、身体を支える。

「いいかい、ひばり。お前もさつさと出るんだ。私は楼主として残ってやることがある。金だ着物だなんだのは、奉公人たちでやるから、お前は身ひとつで、姉さんたちについて逃げるんだよ」

三船はぐつとひばりを抱擁し、優しく言いつける。明確な語調で、すべきことのひとつひとつをひばりに教えるように。

「良いかい、今、お前はとても悲しいかもしれない。けどね、ふんばりな。絶対、燃えるんじゃないよ。これは、お前のためだけに言っているんじゃないからね」

「三船おかあさん」

ひばりは心の底からひばりを思いやって生まれている三船の切言を腹にしまいこんで、力を振り絞り、手足に気合を入れた。

空っぽになった心に力が少し与えられ、動かぬと思った身体はしなやかな硬さに満ちる。

なんとか自力を筋肉に注いだらしいことを感じると、三船はふつと微笑んだ。

「早くお行き！」

背中を激励が打つ。ひばりはふらふらと廊下を出、眩暈をかみ殺しながら足を一歩一歩前へ出した。

第五十二話「会いたい」

心の悲しみが鋭く重い杭となって刺さり、ぐらぐらと見えない血を絶え間なく流させる。

臃気な頭で、息をするようにひばりは、大切な名を呼んだ。

「とらいち、とらいち……」

けして来てはくれないだろうとは分かっていた。だがその名を呼ぶと、ほんの僅かに心は痛みを和らげた。

人がひばりを追い越していき、ひばり後ろへと戻る。激しい流れの中、ひばりはなんとか渡り廊下まで来て、はたと足を止めた。

「……足袋。めりやす足袋」

三船に身ひとつで逃げろと言われた。しかし、めりやす足袋だけは忘れることは出来ない。

めりやす足袋は何枚か持っている。しかしあの一枚を燃やすわけにはいかなかった。一番最初の、穴の開いためりやす足袋。他のめりやす足袋も大事だが、もっと大事なめりやす足袋。

苛めによって厠にめりやす足袋を捨てられたことがあったが、押入れの奥に仕舞いこんでいたそれは難を逃れたのだ。あれを忘れるわけにはいかない、あれは、絆そのものだから。

三階まであがって、つか佐の座敷まで戻り、ひばりは箆笥を引いた。着物や小物の奥に、ぼろぼろのめりやす足袋を認め、そっと手に取る。

「あつ、あつた」

安堵すると、

「……仁平の服」

お富士がもし逃げるときにと渡してくれた風呂敷包みが目にとまった。茶色いくすんだ色合いを暫く見詰めていると、胸がどくどくりと高鳴った。

会いたい。

思いが湧き水のように噴き出す。

会って、言いたい。

そうだ、自分はまだ何もしていない。やるべきことが、ここに残っているじゃないか。

今ならば、この混乱に乗じて逃げたとして、お富士が罪に問われることはないだろう。自分だけの罪となる。それならば、

会える。

心の籠が外れて、ひばりはむんずと風呂敷包みを掴むと、結び目を解いた。

屏風の裏に回って自分を包む邪魔ものを脱ぎ、仁平の服に袖を通す。仁平は男としては背の低いほうだが、着物は僅かにひばりの体型には合わず、大きい。

それでも、このような着崩し方をする江戸浪人はいるだろうし、頬かむりをしてしまえば傍目からは分かるまい。それでこそ、この騒動だ。

舟代には足りる分の小銭を懷にしまいこんで、ひばりは胸に手を

置いた。

きつと、会える。

「何やってるんだい」

冷たい声。漂う、麝香の香り。

「つか佐……姉さん」

頬かむりを握り締めてしばし立ち尽くしてから、ひばりは振り向いた。

そこには襖に寄りかかり、氷の微笑を浮かべるつか佐がいた。白い着に、鬘を結わない長髪は乱れて、絡まる。床に臥せたせいで寝れきり、普段の流麗さは微塵もない。

しかしながら美貌によって妖しく、別種の凄艶を漂わせていた。皮膚が怖気立つ、美しさ。

「なんだい。まさか、ここから逃げるつもりか」

ひばりは既視感を覚えた。嫌な過去が頭をもたげる。

「逃さない」

小島……！

「そつだ、あんたはここで燃えてしまえば良い。ここでわつちと、燃えてしまえ」

美佐の指を切り落としたときの小島にどこか似た風貌で、つか佐は揺らめき、一步を踏んだ。思わずひばりは後退する。

「つか佐姉さん、御戯れを」

「御戯れ？ 御戯れであるもんかい！」

白い平服から白い足が突き出て、ひばりの胸を捉えた。強靱な力で押され、箆笥に背中を打ちつける。肺が急に締められ、かはつと口から唾が飛び、咳き込む。

「ずっとずっと気に食わなかったよ、あんたのその目、その顔、その髪、全てが気に食わなかった！」

ひばりの胸に鷹の爪よろしく食い込む、つか佐の足。それはどんな歪んで、ひばりは激しい痛みに悶えながら首を振った。

「つか佐、姉さん……」

「姉さんと呼ぶな！」

罵詈が弾ける。

「あんたなんか妹分でもなんでも無いわ！ 憎くて憎くて、たまらない」

白粉でも塗ったように青ざめたつか佐の、阿修羅も逃げ出す眼。

「めりやす足袋なんか握って……」

それがひばりの片手を掴む。

「ああ、もっと厠に落としてやれば良かった」

「え……？」

ひばりは目を見開き、唇をわななかせた。その所作に、つか佐がけらけらと目尻をあげる。

「ああ、気付いてなかったのかい。あははは、ざまあ見る」
「もしやと思い、ひばりの中でかちかちと事が新たに嵌っていく。」

お富士が追求したとき、小島の禿たちはただただ怯えていた。それは偶然、廊下での悪態を聞いていたからに過ぎず、彼らが厠に捨てたという確証はなく、ひばりが有耶無耶にした。

考えてみれば、彼らはどうしてめりやす足袋や匂い袋があの箆笥にあると知っていたのだろうか。そしてどうしてそれが、ひばりのものと分かったのだろうか。

麝香の芳香はつか佐の芳香。それは見世では当たり前、誰でも知っていること。

寧ろ普通ならば、それでこそお富士ほど親しくなければ、ひばりのものではなくつか佐のものとして、触れることを避けたはずだ。

「何でそんなことを」

今更に真相を叩きつけられ、ひばりは喘いだ。

つか佐は眉を片方ぴくんとあげると、

「何で？　じゃあ、なんであんたは、そんなにとらいちから貰えるんだ？」

逆に問いかける。

「足袋も、芸も、あしらいまでもとらいちから恵んでもらって、これ以上何を望むんだい？　私は何もなかったよ。とらいちとはなあんにも」

つか佐が大きく口をあけ、絶叫する。

「……ああ、あの女が死んでせいせいした！」

大声をぶちまけて、つか佐の肩がぜいぜいと上下する。ふふふ、ふふふと笑みをこぼすと、ふいに、口がぐにやりと下がった。

「なのに、ちくしょう、ちくしょう……」

両手で顔を覆って髪の毛を振り乱し、つか佐はすすり泣いた。

「なんでお前なんだ。なんてわっちじゃなくて、お前なんだ。そしてあの女なんだ。なんでだよお、なんでだよお」

姉女郎の胸中にずっと秘められていた感情。その暗く湿った劣情と嫉妬が、口々から滴る。

ひばりは心から、同情した。同じ男を思う者として、胸がつかえる。

「つか佐ね……」

「呼ぶなって言うてんだろう！」

再び強く筆筈へ押し付けられ、ひばりは呻きを漏らした。

つか佐に宿る恋慕の炎が燃え盛る。錯乱の色を帯びて、つか佐はまた肩を揺らして顔を捻じ曲げた。

「燃えるんだ。丁度良い、こんなに丁度良いなんて、まるでとらいちが火をつけたみたいだと思わないかい？」

血脈が走り、潤んだ目はうっとり、耽溺に染まる。

「ここであんだと、燃えるんだ。そう、とらいちが望んでいると思わないかい？」

残酷に問いかけられた刹那、ひばりの中に霞がかっていた憐憫が

さつと、掻き消えた。

つか佐とはまた異なる、熱い決心がひばりの肋骨を猛々しく押し上げる。思いのたけ、吹き荒れる。

「……わっちもここで燃えられたら、どれほど楽か」

煌々と輝き、昇華する。

「でも、出来んせん。わっちはここで燃えるわけにはいかない。

会わなければ、とらいちに会わなければ。わっちはまだ、とらいちに何も言っていない。何も言っていないじゃ！」

ひばりはつか佐の足首を掴んだ。そして瘦躯のどこからかと思うほどの力で、退けようと押しやる。

幼い双眸から滲む気迫。それは阿修羅より妖しく、神々しかった。

魂の全てをぶつけてくる、真摯な瞳。鏡面のように他者を映す瑠璃と、心を奪ってしまいそうな漆黒。ふたつは細まり、淀みなくつか佐を貫いた。

「ここでは燃えんせん！ わっちはここでは燃えんせん……っ！」

慟哭に酷似した訴願。ひばりは尚も力を込める。

「どいてください、姉さん」

その威圧は、一筋に天へと伸びる、烈火の如く激しかった。

第五十三話「鳥籠から飛び立って」

憑き物が落ちたかのように。

「何で……」

つか佐はぼとりと足を下ろし、そのまま崩れた。両の手をだらりと垂れ下げ、まったく虚脱しきって、

「何でそんなに、あんたは……」
呟く。

「ひばりちゃん！」

廊下から、高い声が響き、つか佐の部屋へと転がり込んだ。息を切らしてやってきたのは、お富士だった。

「ひばりちゃん……」

座り込むつか佐、そして仁平の着物に身を包んだひばりを見やり、一言。

「似合っているよ」

「……お富士ちゃん」

こんな喧騒に紛れて立ち去ろうとしている自分を見やって、微笑む朋輩に、目頭が熱くなる。ひばりは眉間にぐっと皺を寄せた。

そんなひばりにお富士は近寄ると、頬かむりをさっと取って、くるんとひばりの頭に巻きつけた。深々と顔が隠れるように整えてから、きゅっと結ぶ。

「ここはわっちに任せて、行きんさい」
「うん」

「ひばりちゃんのこと、わっち、忘れないよ」
「……うん」

ああ、お富士ちゃんにはいつも敵わない。とても愛らしくて、とても気が強くて、少し意地悪で、果てがないほど優しくて。だから応えようと、思えるのだ。

「行つてきます」

ひばりはぐつと頷くと、つか佐の部屋を後にした。早々と足を進めながら格子窓の外を見やると、火の手は京町二丁目から角町へと燃え移ろうとしていた。本当に火の手が早い。逃げ遅れた者もいるだろう。

寡黙にそれを認め、ひばりは先を急いだ。階段を降り切り、人の流れを見やって、どう行ったら良いか思案し、裏手へ回ることを決める。

踵を返して強く一步を踏み込んだ、……その時。

遠くで奉公人たちに指示を出す三船と、目が合った。
反射的に俯く。身体が血の気を失い、凍りついた。

ばれたろうか……、ばれたろうか。
鼓動が耳奥まで響くほどに高まる。冷や汗が背中と脇を流れる。

「仁平、ちょっと」
三船が仁平を呼んだ。ああ、ああ、捕まってしまう。
。

「そこに最後のお客さんが残っているから、大門の方へ急いで案内してやってくれ」

気付かれなかった。

どつと安堵が降下して、ひばりは気を引き締めた。大門まで連れられるらしい。今度こそ、ばれてはならない。

肝に銘じていると、仁平の足音が近づいてきた。

「お客さん、早く、こっちだ」

すつと通り過ぎ、混みやった見世先ではなく、裏手へと回る。さつさと進む仁平の背中を追いつつ、隙をついて手足を汚した。こうすることで、大門では浪人として誤魔化す。

仁平は目が悪く、眼鏡と言うものをつけてはいるが、それでも人の手足などぼんやりとしか見えない。無論、手足を汚したくらいでは、気付かないだろう。

見世を出て、仲の町から待合の辻、そして大門へと向かう。逃げ惑う人々の間を縫うように歩きながら、仁平はひばりに話を振った。

「ええですかい、お客さん。火事のために今、おはぐろどぶには六つの橋が架かっていやす。」

ですがね、大門から行くと良い。避難用だからと橋は混雑して、火の手が近い大門の方が少ないんだ。もみくちやにされないで、済みますから」

大門まで、あと僅か。そこで仁平が立ち止まった。

「案内はここまででやんす。じゃあ、お行きなさい」

ひばりは仁平を追いつき、前へと進んだ。

「ええですか、大門です。今なら四郎兵のやつら殆ど、橋の方へ行っている。俺が引き付けるから、行け」

その言葉に、ひばりは足を一寸とどめた。
どういう。

「行くんだ！」

仁平の強い叱咤が背中を押す。ひばりはゆっくりと、大地を踏みしめた。一步、また一步と。

感慨無量が心を突き動かす。

お富士、三船、仁平の思いがひばりに力強い一步を与える。一步、また一步。

大金を残していったから？ いいや、けして違う。

後ろ髪をひかれる。愚かな自分、我侭な自分。その自分を理解し、救いの手を差し伸べてくれる。そんな人々を、己の轍に置き去りにする。

振り向いてしまいたい、だけれども。

会いたい。

会いたい会いたい会いたい。

貴方に。

会いたい会いたい会いたい。

貴方という棘に、満たされているから。

第五十四話「ひばり心中」

そして、彼女は大川にいた。

大川に浮かぶ小舟の数々、それらは一点を囲むように漂っている。
「へい、どいたどいたあ」

川の流れて乗って、船頭らしくかい櫂で舟を操る、舟渡し。若いながらその見事な腕前は水を切り、他の舟をゆるりゆるりとかわして、舟の中央へと進む。

船には老若男女、身分も様々の者たちが乗って、皆一様に同じ方向へ顔を向けていた。

油っぽい目は、好奇と怪奇、そしてなにより畏怖を宿らせている。感嘆し、ひそひそと囁きながら。

川の中央、水が淀む場所を人々は食い入るように見詰めていた。視線の先には竹の棒がいくつか差し込まれ、魚を採るための罟を張ってある。

そこにそれはいた。

網に藻と共に引つかかった、ぷかりと浮かぶ、それ。
彼女は、ひばりは、ぼんやりと皆に倣った。

点は大きくなり、人間の形へと像を結ぶ。あれは頭だ、あれは背中だ、あれは手だと心をとらう。

「どうだい、あれがあんたの見たがったものだよ……」
「もっと、近づいて」

「え、ここでええじゃないか」

水死体とあつて匂いも強いのだろつ、見物は幾分か遠巻きで、しかし皆それで満足しているようだ。

こんなふうに求められるのは初めてなのだろつ、薄気味悪そうに舟渡しが眉を顰めた。

しかしひばりの横顔は真剣そのものだった。鬼気迫るものがあり、舟渡しはしぶしぶ、櫂を動かす。

周りの舟の群れから外れ、すつと進む一隻。

皆の目が一旦それから外れて、ひばりの乗る舟を追った。ゆつくりと、ゆつくりと近づいて。

水の腐つた匂いに、すえた異臭がひばりの鼻腔をついた。鼻が捻じ曲がりそうなほどの悪臭。

「お客さん……」

舟渡しが、蚊のなくような声を出した。構わず、ひばりは「近づいて」と強請る。命令でやけくそになったのか、舟渡しは乱暴に水を掻き始めた。

ぐんと進む。

ひばりは一切目をそらすことなく、その姿を受け止めた。

ああ、ここにいた。

それを掬い上げること出来そうなほど近づいた舟の上で、ひばりは打ち震えた。

服の色合いから分かる、若い男女の心中死体。体中をぐるぐると

縄で縛って、ぴたりと身体を寄せている。一人は小さく、一人は対照的に大きかったが、その様は驚くほど酷似していた。

水面に揺れる二人の長髪は海草に広がっている。身体は水を吸って、着物や縄を引きちぎらんとするほど膨れていた。

瘡気を放つ皮膚は真緑で、藻が生えてしまったのかと思わせる。目は白く濁りきって、剥き出した。

両方の顔は玉のように丸くなっていて、片方に大きな傷がある。もう片方にも傷があって、喉がぱっくり割れている。

ふたつの水死体は身体を離れまいとするかのように身体を絡ませあい、縄でしつかと縫い付けて、川に身を委ねていた。

「とら……いち」

変貌しきつたその姿を目の前に、ひばりは呟いた。
舟の淵に手をおいて、身を乗り出す。

「とらいち……」

凍りついた表情で名を呼び、ひばりは彼と対面した。彼は何も答えず、ただひたすら、ひばりではない女を抱きしめていた。

昔のことを思い出す。

彼は自分の母親を女ではないと言った、そして自分を、女にしてやると言った。

彼の言ったとおり、吉原はそれまで培っていた女という概念を覆す女たちが群れをなしていた。

だから彼女たちのように、女になろうと願った。

「とらいち」

しかし女であることと、彼が愛を傾けるといふことは全くの別物で、本当に望んだものは得ることが出来なかった。

吉原の女に近づけば近づくほど、離れていくもの。そうだと知っていたら、自分は女を願ったろうか。教えを希っただろうか。

否。

今だから分かる。きっと運命を拒んだに違いない。

それはひとえに、愛していたからだ。きつかけなどなく、ただ魂が求めてしまった。振り向かせるためだけに呼吸を繰り返した。

あの閑散とした貧しい故郷で殺されずに済み、売りに出されたとき、既に自分は死んでいた。河童となっていた。

ただ川の変わりに道を流れ、時を流れ、吉原に辿り着いた、河童。そして物。

河童に恋など、とらいちがするはずもない。

物を通して見ていたものは、この世に唯一与えられた愛だった。自分に僅かでも向けられるはずがなかったのだ。

生きるも死ぬも、同じだ。

こんなにも、似ていた。

ひばりには何も残らなかった、全てはこんなにも無駄だった。

とらいち。

ひばりはそつと、手を伸ばした。

ぐちゃりという、腐った肉を掴む感触がひばりの五指を伝う。瘡気が強い刺激を伴って、目と鼻とを攻撃する。肉が崩れて、ひばりがとらいちに沈んでいく。

「ひいつ……」

舟渡しが息を飲む音が遠くから聞こえる。ひばりはそれを意識の外へと締め出して、上体を水面へと近づけた。

形のいい唇を軽く開き、そつと、とらいちの朽ちかけた唇に……、重ねる。

口内に広がる、生臭く、苦く辛い味。

藻の匂い、肉の腐った匂いがひばりの舌に噛みつく。

おぞましい筈の感覚。身体が拒絶するはずの味覚、嗅覚、触覚を、ひばりはひばりの全てで受け止めた。

痺れる。

唇が、下が、頬が、髪が、

うなじが、腕が、乳房が、腹が、

背中が、腰が、腿が。

痺れ痺れて、砕けそうになる。

本当はずつと、こんな風に口付けを交わしたかった。舌を絡ませあい、互いを奪うように貪りたかった。

それなのに。

そつと顔をあげて、ひばりはとらいちの向こうにお鈴を見た。

「あなたが」

ひばりはぐつと、二人を繋ぐ縄を握る。

「あなたがいたから、とらいちは苦しんだんだ」
縄をぐいと引っ張っては、押した。何度も何度も。

「もうこれ以上苦しめないで」

水が跳ねる。それとともに肉片や悪臭も跳ね、飛び散った。とらいちとお鈴が、どんどん崩れていく。崩れるほどに骨が露わになり、骨までも二人、絡み合っていると気付く。

まるでひとつの固まりのように、二人の手はしっかりと繋がっていた。

身体を貫く絶望が、ひばりの身体に残った最後の力まで奪う。
ひばりは悶える手をそのままに、とらいちを再び俯瞰した。

「ね、とらいち」

ゆっくりと、舟の淵に足をかけて。

「わっちも、そっちに行っていていいでしょう」

ひばりはそう語りかけると、寂しくて残酷な世界の理に、身を投げ込んだ。

第五十五話「生と死、性と私」

輝く水面を中から見上げ、思う。河童が川に帰るのだ、と。煌々とした光と、暗澹たる闇を同時に纏い踊る水。とらいちの形骸にしがみつきながら、その美しさに胸が安らいだ。

……求めてやまなかったことがある。

ずっと前だろう、真昼に夢を見た。その夢では、つか佐ととらいちが身体を重ね、まぐわっていた。そういう風に、思い込んでいた。しかし本当は違くて、つか佐は成長した自分という願望だった。あの時とらいちに抱かれたのはつか佐ではなく、自分だった。

ずっと、ずっと求めていた。ひばりはずっと、とらいちに抱かれなかった。未熟な肉体を呈上し、貪って欲しかった。

覆いかぶさって、蒸れる瘦躯を抱きしめて、愛して。乱暴でも良い。射るような鋭い目と、逞しい腕を捧げて、この身体をほだして。ひとつも余すことなく甘い舌を這わせて。

膨らんだ男らしい喉仏を、脈の浮き出た指に夢中になっているうちに、舐めて、噛んで、ねぶって、じらして……。

思うだけで、身体は熱くなって痺れて、感じてしまう。大人になりかけたあの場所が、濡れてしまう。

背徳などひとつもない、互いに魂から許しあうのだから。乳房は膨らみかけて、割れ目はまだ隠れることを知らない。そん

な身体でも、奪われてしまふことを望んだ。いつそ、犯されていると怯えるほどに激しく、指で弄って。

身体の中央であり先端、とらいちを受け止めるための場所に指を添えて。赤く膨らむあの場所を攻めて。

きつともつととせがむから、今度は隠し持っていた大きくて太くて、硬くて、ちよっと痛い肉の杭を晒して。口に含んでなぶるから、隅まで高まったら、ぐっと奥まで貫いて。

愚か。

慙愧も羞恥も超えてしまつて、全てが愚かしい。浅はかで醜い夢、汚らしい幻想だ。自分に与えられたのは、この光と闇とに揺れる朧で儚い冷たさ。苦しさ。

ぼこりと、大きな気泡がひばりの唇を割って出た。それは上へのぼり、水面に真珠のような円を描く。

波紋は広がり、呼吸の出来ない苦しみが頭蓋骨を揺さぶった。目の前が白み、意識が遠のいていく。

好きなように生きる。

とらいちが言い残していた言葉。

でもとらいち、生きているんも死んでいるんも、同じなんだあ。

なら、好きなように死のう。

ここが今日から飼われる鳥籠だ。

大門をくぐった時、とらいちはそう背中を見せた。あの時のとらいちは何故か小さく見えて、目を擦ってから仰いだら、また大きいとらいちだった。

とらいちが、振り返る。

くちべらしとして売られて、江戸に行く道中。とらいちは素早い足取りでいつも先に行ってしまった。

ひばりはいつも置いていかれては、離れてしまった距離の縮まるのを待たれ、距離をつめたら、また引き離される。

とらいちは振り返っては歩き、振り返っては歩き。

ひばりはそれについていこうと必死に歩いた。足にまめが出来るほど、何日も何日も。

本当に終わる日が来るのだろうかと思うほど歩き続けた。あんなにも遠く江戸を離れて、自分という物を買いに来た。

それもすべて、一人の女性のために。お鈴のためだけに。

最後に、お前の目。

とらいちがにたりと笑い、指をさす。

病気ではないのに、右片方だけ薄い緑色をしている。お前のような目を持つ人間を探して、俺はこんな北まで来たんだ。

全ては、お鈴のため、思い人のためだけに。

ひばりにとって、生きるも死ぬも同じこと。それはとらいちにとってひばりが、生きるも死ぬも同じだから。自分は、河童だから。

本当に、そうか？

陽炎のような世界で、ふいに見知らぬ声が聞こえた。誰だろうと思って、ぼんやりと手繰って、ある人物を思い出す。

木下八尋。

本当に、そうだったか？

強く問いかける言葉。朦朧とするひばりに迫り、揺り動かす。溶解する意識はその意図を定めない。

はて……。

ひばりのかわりに、誰かが頭を捻った。

白子は探せば江戸にありますか。

あの時は傷つきすぎて聞き流した蘭医の言葉が、さっと横切る。

とらいちがまた、振り向く。

歩いては振り向き、歩いては振り向く。

ひばりは歩き続ける。まめを潰し、足を引きずって、痛みに耐えながら歩き続ける。

二人ぼっちの道中、とてもとても長い道のりを。

どうして、とらいち？

ひばりは耐えかねて、棒のような足を止めた。もう歩くのは辛く

て、立ち止まってしまったひばりを、とらいちが見下ろす。

歩くのは辛くて、どうしてこんなに歩くのか分からなくて。

江戸にも白子はあるのに、どうして奥州まで来たの？

ひばりは目に涙を浮かべて、とらいちに訊ねた。

いつもの仏頂面、笑顔なんか知らないという顔で、とらいちは目を細めた。

好きなように、『生きる』。

唐突に穏やかな言葉が絶叫のように聞こえた。天啓のように響き、轟き、全身を包む。

ひばりは戸惑いながらも、その言葉の奔流に魂を広げた。

急に、ひばりの身体が、水面から一気に浮上する。

誰かが押し上げるような強い感覚が背中にある。温もりを持った、圧迫感。

次第にひばりのまどろんでいた意識がはつきりと、鮮明に、開けた。

お鈴は奥州の生まれだと、とらいちは過去を話したときにぼつんと付け加えたことがある。そして彼女は、奉公人であったと。

ひばりの故郷で奉公となると、ふたつの意味を持つ。

ただ奉公に出されたか、口べらしか。

思い出す。誤魔化すように流暢だった部分。お鈴は口べらしかったんだと。だから、田舎に帰るのを拒んだ、と。

好きなように、生きる。

生きる、生きる。

あの遠い道のりを、とらいちはどうして選んだのか。
ひばりが白子だったから？

北に白子がいると聞いたから？

違う、そうじゃない。

歩きながら、とらいちは何度も振り返った。
けして距離が縮まることはなかった、けれど、彼はずっと待って
くれた。

ずっとずっと、置いていくことのないようにと、待っていてくれ
た。

ひばりに、心を傾けていた。

自分は歩いたのではない、歩かされたでもない。
ずっとずっと、距離は縮まることはなかったけど。

生かされていたのだ。

とらいちは白子だから、美しいからひばりを選んだのではない。
あの日売りに出された子ども、一番幼く、売れ残ってしまいそうな
子どもを、彼は選んだのだ。

全ては、生かされるために。

とらいちを失ったひばりの心は血を流し、深い闇に墜ちていた。

闇が払らわれるまで気づかなかった。

自分はこんなにも心を傾けられていたのだ。自分は河童ではない、人だ。生かされている、人間だ。

どこへいこうと、どこまでも流れようと、生きるも死ぬも分からなくなっても、自分は生かされそこには心があった。

湧き上がる感情、突き抜ける喜怒哀楽。

心を失うことなど、出来はしない。思いのたけをもって人は人であり、心は人の中にある。

心はあり続けたのだ、あの日にも、あの場所にも。

生かされている、ずっと生かされていた。互いの心に触れあい、見えない温もりを分かち合って、こんなにも思われ、こんなにも救われ、こんなにも生かされていた。

河童じゃない。河童なんかじゃ、ない。

とらいちだけではない、きつととらいちが愛した人の心もひばりを生かしたに違いない。そして……。

吉原の者たちの顔が浮かんだ。

お富士、三船、仁平、つか佐、禿たち、奉公人たち……、彼らによっても。

目の前で、“生きる”と、涙する人によっても。

仄かな視界が輪郭をとり戻し、ひばりの中に五感が蘇る。

全身を倦怠感と、突き刺すような靈感が襲う。鼻腔や喉が燃える

ように熱く、ずきずきとした痛みがあったが、ひばりは懸命に声を震わせた。

「どして、いつも……ふっと、現れる、の……木下の、」

ひばりが目覚めたと気付いて、八尋はほっと安堵した。横たわるひばりを思いがけないほど大きな力と温もりを持って抱き寄せると、

「無事で良かった」

と目に涙を滲ませる。

八尋の身体は湿っていた。まるで川に飛び込んだように濡れそぼり、髪も乱れて、唇が紫色に染まっている。

「吉原に火が出たと聞いて駆けつけた。その途中で見かけて……、
なんであんなことを」

背中に砂利の感触がある。左右に視線を投げやると、ひばりは自分が河原にいると知った。土手を降りた場所、丁度舟渡したちと話をしたあたり。

人垣が出来ていて、その中心にいる。

「あの、二人は？」

「二人？ ……心中のことかい？ まだ浮かんでいるよ」

「ひとつになって？」

「ああ」

八尋が相槌をするのを認め、ひばりは鉛のように重たい腕をわななかせながら上げて、八尋の胸元を掴んだ。

「お願い」

ひばりの切なる懇願。

「葬って、あの二人を。もう二度と、悲しい思いをしないで、ずっと、二人で、いられるように……」

八尋はひばりの手を男らしく角張った手で包むと、頬を緩めた。
「君を頼むように、あの人から言われたからね。安心してくれ」

柔和で包み込むような語り口。そして少し叱咤を含めた声色で、
「生きることも死ぬことも同じではないよ。同じなわけないだろう」

言い切ると、溜まった涙の雫が、くるりと光を放って揺れた。いつの間にか深い夕日色が差し込み、八尋の顔は造形とは別種の、えもいわれぬ美しさをたたえていた。

雫がちぎれて、ひばりの頬に舞い墜ちる。

ひばりは軽く目を瞬いてから、

「ねえ、旦那」

親に甘える子どものように八尋を掴む手を引いた。

「わっち、河童じゃなかった。ひばりだったよ……」

悟るまで時間がかかった、大切なこと。ひばりの身体の全て、髪の毛ひとつにだって染み込んでいること。

「だから、吉原に戻ろう」

ひばりはそうして、口元を微動させた。

あしろいとはまた異なった素朴な笑み、素のひばりから生まれる、たおやかな笑みがそこにはあった。

生きるための力に満ちた、芯のある微笑み。

「あれはわっちの、鳥籠だから……」

最終話「汗ばむ鳥籠」

果てしない蒼に、白粉をはたいたような天空。春の近づいた風ことを知らせる突風が時折吹き付ける。

江戸は相変わらずぎっちりと瓦が羅列し、その隙間を多くの人々が生きている。

そんな魂の息吹に満ち溢れた街の、ある場所に四角く白い区画があった。

……吉原だ。

吉原は、どこもかしこも白い木材が骨組みとして組まれ、朝から晩まで大工が右往左往していた。中でも大きく組まれたものが吉原は中央、仲の町にあった。

大黒柱がいくつも立つ。梁は高く、どっしりと構え、威風堂々としている。あと幾ばくかの時が流れれば、豪華絢爛の言葉にふさわしい大見世が出来ることだろう。

大海屋という看板をたてて。

見世の骨組みを内から、ひばりは仰いでいた。

蒼弓に浮かぶ白い梁を目で楽しみ、切り倒したばかりの真新しい樹の芳香を肺で楽しみ、ひばりは口から息をついた。

それを目にして、

「ひばりちゃん、あんまり深呼吸ばかりしていると木屑が喉に刺さるよ」

お富士が腰に手をあて、呆れたように注意した。

「だって、良い匂いざんしょう」

「それもそうだけれど」

談義する二人。その後ろからぬつと影が現れ、後ろから割り込む。

「良い匂い、ねえ。禿は気楽で良いもので」

眼鏡の小男こと仁平は、木材片手に皮肉を呟いた。

「あらあら、仁平知らない？ 大海屋が新しく建ったら、わっちも

お富士ちゃんも新造にあがりんす」

「そうそう、わっちら禿じゃありません」

ひばりとお富士、肩を組み合いにやりと齒を見せる。

「お前等が新造？ 世も末だねえ。」

仁平は負けじと毒づいた。

と、そこへ、

「あんたたちっ！ そこでなに油を売っているんだよ！」

肝が冷やがる叱責の声。大海屋楼主、三船その人である。

三船は恰幅の良い身体に合った、きりりとした表情で二人の禿を睨めつける。

「ほうら、戻るよ。それとも二人してここで大工どもと夜を明かすかい」

三船の一言にひばりとお富士は顔をあわせると、大慌てで三船に駆け寄った。

「まったく、これから舞だ小唄だと稽古があるんだろうに。見世が焼け落ちた今だからこそ、腹に気合いを入れな。病みあがりのつか佐に迷惑かけんじやないよ」

二人は『あい』と口を揃えて三船の後を追った。

刹那、一陣の疾風が舞う。

反射的に、ひばりは手をかざしたものの、細かな塵が目に入り、ちくんと痛んだ。

仕方なく、腕から下げていた巾着袋を紐解き手拭いを取り出す。その拍子に違うものが落ちそうになって、ひばりはふためき、さと掬い上げた。

ほつと胸を撫で下ろす。

その手が握るものは、所々に穴があき、汚くくすんだ、めりやす足袋だった。

とらいちのことを、不意に思い出す。

もしかしたらあの世で、落ち着けと不遜な言葉を投げやったかもしれない。思い人を隣に置き、手を繋ぎながら。

空のどこかに消え入った影を探す。

蒼は震えるほど蒼く、白は沁みるほど白。風は流れて、川のように流れて、日々を押しやっていく。

どこにもいない、彼はどこにもいない……、けれど。

忘れぬ心は今もここにある。彼が教えてくれたことひとつひとつが血となり肉となり、ひばりという人間になっている。

新造にあがれば名は変わるだろう、しかし、心までは変わらない。与えられた命までは変わらない。

生き続ける限り。

たとえ、この命が尽きてしまっても。

生かされていたことは刻む。そしてこれからも生かされ続けてゆく。

叶わぬ恋をした。

思い出すだけで今でも汗ばんでしまうほど熱い恋を。

でもね、無駄では、なかったよ。とらいちも、そうでありんしょう？

生かされること、恋をするということ。人が人である限り、それは深く、尊い。

だから生き続けられる。

「ようし……」

めりやす足袋を巾着に仕舞い込むと、ひばりは空に向かって大きく声を出した。

「利取る利取ると鳴きましょか！」

その澄んだ声は鈴の音のように凜と響いて、遠く遠く、どこまでも、果てのない彼方へと翼を広げていった。

最終話「汗ばむ鳥籠」（後書き）

最後まで「汗ばむ鳥籠」を読んでいただき、有難うございました。
そして春エロス2008を楽しんでいただき、有難うございました。
た。

心からの感謝を、あなたに。

外伝「残響」（前書き）

とらいちの外伝というか、二次創作的なものです。

外伝「残響」

障子を開けると、最愛の女性が喉を掻っ切っていた。“彼”はしばし呆然と立ち尽くし、みるみるうちに彼女の血を吸っていく布団と、彼女の茫漠とした表情とを凝視した。

「あ、うああ……」

彼女の傍には、彼女の介護を手伝うために医師が呼んだ青年が、蒼白の唇を歪めている。青年の愚鈍な呻きに、彼はようやく身体を動かした。

一步、また一步と進むごとに、彼女が自身の喉に押し当てているものが剃刀で、剃刀は彼女の喉から血を滴らせていて、剃刀の周囲は赤い柘榴のように開いていることを知る。無残で美しい傷口から留め止めなく血が流れ、はひゅうはひゅうと呼気が漏れるのを、彼は見下ろし、首を捻った。捻りながら、彼はだがそれを疑問だとは感じていなかった。来るべき時が来たのだと、彼女の病が発覚したときから決まっていた定めがやって来たただけなのだと悟り、無意識に観念していた。

ああ、そうだ。そう思ったとき、自然と彼の身体は動いていた。彼女の前に跪き、彼女の喉を食らう剃刀を、剃刀を抱く華奢な彼女の指先を包み、押し倒した。

「ひい……！」

傍らで青年が息を飲んだが、彼には聞こえなかった。ただ一心に、泣きもせず力を込め、静かに彼女の血を浴びる。彼女の血に染まる。全てはそう、決まっていたこと。温い鉄の匂いの中で、彼は小さく微笑した。もし自分が狂ったら、殺して欲しい。そう彼女が望んでいたから。

けれど、けして一人には、しない。

彼は乱れた布団を整えながら、その身体を抱えあげた。うたかたのように軽い彼女に、少しだけ驚く。昔は、出会った頃は、自分と変わらない重さのある少女だったのに。

彼が大きくなったのか、彼女が小さくなったのか、その両方なのか。それとも……。

「人殺し……、人殺し……」

青年が蠅に似た動作をしながら、震える。その眩きを背に、彼は彼女と散歩に出かけた。彼にはやるべきことがいくつか残されている。彼女を失えば何もなくなるだろうと想っていたはずなのに、たくさんのことをやり残すような生き方をしてしまった。

「悪いが俺の我儘に、少し付き合ってくれ」

心臓を止めた彼女に囁く。彼女は苦悶の表情を浮かべていて、彼にはそれが嫉妬のように思えて愛おしくて、心が晴れやかになる。これほどまで澄んだ感覚は、何年ぶりだろう。

部屋に戻り、謝りながら大き目の布袋に彼女を入れ、血を軽く拭ってから着替える。そしてやるべきことのひとつを終えてから、街を出た。

愛しい人を担ぎながら、彼は人の多い街を歩き始める。季節は冬で凍えるほど寒いというのに、何処を行っても人が行き交い、人生の色と匂いに満ちている。冷たい街はこんなにも瑞々しく、温かいものだったのか。

「なあ、綺麗だな……」

郷愁のような感覚が胸を締め付けて、耐え切れず彼は溜息をついた。吐息は白んで、空気に溶け込む。惚けたように歩いていると、彼は目的の場所に辿り着いた。

瓦屋根に白塗りの壁の、店だった。老舗の風格を呈し、大きな暖

簾と看板が架かっている。それらをくぐって中に入ると、多くの人でごった返していた。店番の一人、男が彼に目を合わせると、跳ねるように立ち上がった。

「あなたは」と男は目を丸めると「こちらにどうぞ」

思ったよりも機敏な様に、彼は軽い安堵を覚える。門前払いになるかもしれないことも考えていたからだ。

彼は中庸ではない。大柄で、髪も髭も不精に伸びて、眉間には猛禽のような皺が寄っている。無頼そのものの様相である。少なくとも男の店を尋ねられる格好をしていない。体よく追い払われても仕方がない。そんな彼を案内したということはつまり、彼にとって目的を達成するに相応しい男ということだ。

彼の予想を裏切らず、誰も居ない座敷の障子を閉めて開口一番、男は「どうなさったんですか」と訊ねた。

「頼みがあつて、来た」

「頼み？」

「あの子に惚れているのなら、生きる意味を伝えて欲しい。あの子にとって、生きるも死ぬも同じことだ。止めてやってくれ」

彼の言葉に男は眉根を顰めた。素早い反応だ。何のことが、理解したのだろう。

「俺は上手く教えてやれそうにない、そういう生き方を選べなかった」

「あなたは、何者なのですか。彼女の何なのですか」

男は唇をわななかせた。嫉妬、あるいは憤りを含む口調は、針のように冷たく鋭い。当然だ、彼は男にとって、実に重大な発言をしている。穏やかそうな男の、気高い矜持をさかなでるような言葉を。

「俺は、あの子を」

つばを飲み込み、続けた。

「娘だと思っている」

驚愕に男が蒼白になる。

「娘……？」

「落ち着け。血は繋がっていない。それにこれは、俺の勝手な言い
がかりだ。あの子は知らない。知らせないように、育てた」

男が膝をつく。彼もまた、男の前に座り、視線を合わせた。ゆっ
くりと、染み込ませるように言葉を紡ぐ。

「あの子は、口減らしだ。それを俺が買って、育てた」

「それは……。それじゃあ、ただの人買いでしょうに」

厳しく、的確な返し方。彼は独白の前に冷静でいられる男の度胸
に、胸が躍るのを感じた。良い男を見つけたものだ、誰がために
夢想する。

「だから言いがかりといった。これは賭けだ。無謀で、……もう無
意味だ」

「どういうことです」

「鳥籠は何のためにあると思う？ 鳥を飼うための場所だと思うか
？」

「何を……」

「己を誇るためか、賤けるためか、愛でるためか……、なんのため
か」

「何を！」

噛み付ように声を荒げる男に、彼は落ち着き払って答えた。

「吉原は鳥籠だ。鍵はもうすぐ開く」

更に続けようとして、彼は唇を嚙んだ。障子の向こうから聞こえ
る店先の音が変わり、耳をすます。どうやら店が終わる頃合いらし

い。致し方なく、彼はよろめくように腰をあげた。男は彼に懇願に似た視線を絡めているが、彼は気にせず障子に手を掛けた。

「あなたはこれから、何をするつもりですか！」

たまらず、男が身を乗り出す。しかし彼の袖を掴むには緩すぎた。男が知るべきことは既に語られていた。だから彼は振り向くことなく、一言だけ置いた。

「誓いを尽くす」

障子は開けられ、高い音を響かせて閉じた。

彼が街に再び出ると、ちらちらと雪が踊っていた。可憐なそれは暗雲から生まれる。黒くうねるそこから、どうしてこんなにも純白で儚いものが舞い降りるのだろう。男は幼い疑問を抱き、赤ん坊を背負いなおすように布袋を上げた。

「雪国は貧しくて、食べるものがないと言っていたな。みんなひもじい思いをしていると。本当に、そうだったよ。こんな寂しい、暗闇のようで」

虚空を仰ぐ。

「だけど、お前たちを。……めんこいものを、生むんだよな」

野獣のような彼の背中は、酷く困ったように、どこか嬉しそうに、窮屈だ。荒くれ者にそぐわない少年っぽい仕草で、彼は首を竦めると、歩みを進めた。最後に行く場所は何年も前から決めていた。迷うことなど、あるはずもなかった。

月もない。灯もない。漆黒の中に水の流れる音がする。目が闇に慣れてしまうと、さめざめとした墨汁色の川が目の前に広がっていた。そのたもと、土手の下まで降りると、腰を下ろす。夏ならばよくいる、蛍もいない。

彼は漸う、彼女を下ろした。彼女の身体は硬く固まり始めていて、布袋から出すのに苦労する。

「すまなかつたな」

抱きしめてみると、すっぱりと胸におさまってしまう。極限まで痩せた身体は加えて、醜く臭い。普通の人間なら目を背けてしまう彼女をあやすようにして、彼は川を眺めた。

形骸を失っていくように、彼は自分自身が脱力していくのを感じる。そうして、心のどこかが途方にくれているのを知る。

ああ、少しは戸惑っていたのだと。ずっと、迷っていたのだと。もう、終わりで良いんだと。

彼女の体温が、強く沁みて、

「相変わらず、手が冷たいなあ」

気付けば彼は泣いていた。

子どものように号泣していた。

「愛してる、こんなにも愛しているんだ。ずっと、ずっと愛していたのに」

切なる思いに、慟哭に、しかし彼女は返事をしてくれない。何故だろう、何故こうなってしまったのだろう。何がいかなかったのだろう。一体、どうしてだろう。

「悪かった、俺が悪かった。だから、お願いだ、死なないで。お願いだから」

絶望に喰われる。魂まで強姦される。あの日の記憶が、千切った猶予が、彼をさいなむ。

「お願いだから……あなたを、愛しているから……」

傲慢な渴望。彼女を撫で、縋りつく。

だから、彼女は、

「おらも、とらさまとしたいことがあります」

笑った。

「……ん？」

振り向き、潤んだ瞳で微笑む彼女に、彼はきよとした。彼女は、赤い頬を更に赤くさせる。

「熱が下がったら、雪を見ましょう。春になったら、桜を見ましょう。その後に、もし、おらの身体が瘡毒でなかったら……、弟や妹を、迎えに行きてえ」

「弟や、妹？」

「北に残ってしまったから。もし、もし生きとったら、おらが引き取りたいんです。お江戸なら、このお江戸なら、きつとなんとかするでしょう？」

彼女ははにかむと、

「一番下だと年だいぶ離れてっから、もしかしたらまた生まれてるかもしんねえから、おらが、おつかあの代わりで。そしたら、みんな喜びます、はい」

それから不安げに顔を伏せたまま彼を見上げた。

「ご迷惑はかけませんから……」

唐突な彼女の願い事に、彼は眉を下げる。その反応に彼女ははつとして、俯いた。その動作がまるで叱られた子猫のようで、慌てて、
「違う、違う！」

彼女の両頬を手で覆い、仰がせた。

「おつかあつてことは、俺がおつとうだなあつて、思つて、嬉しくて、ごめん」

みるみるうちに、彼女の表情が緩んでゆく。まるで花のように咲き誇る、笑顔。そんな彼女が可愛くていじらしくて、

「そうだな。熱が下がったら雪に、桜に、北へ行こう。お前としたいこと、お前と合わせたらもっともっと増えるな。百年じゃあ足りない、これじゃあまるで……」

彼の頭の中に、ある言葉が浮かぶ。今の思いを形容するには、この言葉以外ないように思え、彼は運命的な驚きに痺れ、口にした。

「千年の恋だ……」

人は死ぬ。百年も経たずに滅びる。だが肉に、魂に、こんなにも熱い思いを抱くことが出来るのか。灼熱より熱く、雷撃より眩しく、どれだけ抱いても果てそうにない思いが。そして思いを共有することが出来る。

彼は感動に打たれ、強く強く彼女を抱きしめた。彼の愛情に彼女が呼応し、寄り添う。死ですら二人を分かつことは出来ない証明するかのように。二人は抱き合い、そっと口付けを交わした。

唇と唇が繋がり、もつれ合い、

……冷たい。

硬く、冷たく、全ては狂おしいほどに苦しい。

彼の眼前にはただ、暗澹たる現実がある。自分で命を絶とうとした愛しい女性、彼女の命を奪った元凶である自分、錆付いた空想すら無碍にする悲壮、土塊のように冷えた、笑顔。

それらが逆らえぬ濁流のような人生そのものとなって茫漠と押し掛かり、矮小な一人の男を噛み砕こうとする。

しかし。

一筋の光がある。何も出来なかった彼が、必死に抗い残した希望がある。自分ですら行動の理由を定かに出来ず、がむしゃらに隠し守り続けた、誰も気付かない密やかな愛が残されている。

生きてそれに会うことはもう叶わない。守るために強固な場所に

自らが閉じ込めたのだから。自分を偽りながら選んだあの場所に。
あの鳥籠に。

悔いることはない。

そうだ。……ただひとつを除いて。

「もっと、おぶってやりたかったなあ」

彼女を抱きかかえ腰を上げると、闇へと悠々、歩き出す。先ほどまで丸まって小さかった背中は大きく。

彼らしく大きく、どこか、笑っているようだった。

外伝「残響」（後書き）

本当に二次創作のような話ですね……。ご要望が多かったので、外伝としてとらいちの、「汗ばむ鳥籠」では時間の都合によって省いてしまった設定を書いてみたのですが、別人のようになってしまつて、すみません。少しでも楽しんでいただけたらいいのですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9184d/>

汗ばむ鳥籠

2010年10月9日05時30分発行